Project Report 2010

The Kyoto Faculty Development Center

「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発･組織的運用システムの確立」

2010年度 事業報告書

平成20年度･戦略的大学連携支援事業

京都FD開発推進センター

はじめに

平成20年度文部科学省戦略的大学連携支援事業に採択された、京都地域18大学・短期大学による連携事業「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」は、FDが大学の義務とされ、各大学・短期大学においてFD活動の実質化が問われている中で、京都地域全体のFD活動の充実と大学教育の質向上を目指して、多彩な連携活動を実施してきました。

平成20年10月に京都FD開発推進センターを設置して以来、(1)階層別・分野別のFD研修プログラムの開発と実施、(2)ICTシステムを活用した授業支援／FD活動支援、(3)連携大学・短期大学のFD活動への支援と情報提供、(4)国内外のFDに関する先進事例の調査・研究と研修、の4つを活動の柱として、FD活動の共同実施と各大学におけるFD活動の活性化を目標に、さまざまな取り組みを進めてまいりました。

事業3年目にあたる平成22年度には、連携大学教職員による3つのワーキンググループの活動とセンター独自の活動を連動させて、階層別FD研修プログラムの企画・運営、海外の高等教育機関に委嘱したFD研修の実施と運用体制の確立、FDハンドブック第2巻の作成・配布、連携大学教員意識調査等、多彩なFD諸活動を本格的に実施することができました。補助金最終年度にあたり、現在、事業評価と事業全体の総括を進めておりますが、連携大学教員による内部評価、外部識者3名による外部評価に共通して、本事業により実施した多くのFD研修活動が効果的なものであり、研修に参加した教職員に有益であったことが示されています。特に増刷を重ねているマンガ版FDハンドブックの制作、国立教育政策研究所の基準枠組に準拠した新任教員合同研修プログラム、学長ほか大学執行部教員に対するFD執行部研修の実施は、全国の高等教育関係者からも高く評価されております。

本報告書は本年4月以降に発行される『最終事業報告書』の前段として、平成22年度の事業活動をまとめた〈第1部〉と、2010年11月にアメリカ・セントルイスで開催されたPODカンファレンスに2名の教職員を派遣した際の参加報告である〈第2部〉を合わせたものとなります。本報告書を補助金事業終了後における公益財団法人 大学コンソーシアム京都全体によるFD連携活動の基礎として、また、全国の高等教育機関、連携組織における取組のご参考として、広く活用していただくことができれば幸甚に存じます。

本センターのさまざまな活動へのご協力、ご支援にあらためて感謝を申し上げますとともに、今後とも忌憚のないご意見、ご批判を賜りたく、重ねてお願いを申し上げます。

平成23年3月

京都FD開発推進センター長
八木　　透
《佛教大学教学部長・教授》

目　次

はじめに

《第1部》

1. 2010年度活動方針 …… 4

2. 2010年度活動総括 …… 5

3. 2010年度活動記録
　2010年度センター活動記録 …… 8
　2010年度活動カレンダー …… 22

4. 各WG活動記録
　①FDer養成ワーキンググループ
　　FDer養成ワーキンググループ 2010年度活動記録 …… 24
　　―京都FDer塾報告書（第4回～第9回） …… 29
　②FDシステム検討ワーキンググループ
　　FDシステム検討ワーキンググループ 2010年度活動記録 …… 82
　　―「授業改善に関する連携大学教員意識調査」の結果 …… 88
　　―「職務意識調査」の結果 …… 95
　　―「教育改善に向けたICTシステムの活用に関する意識調査」の結果 …… 109
　　―クリッカー授業実践報告（京都光華女子大学／佛教大学） …… 118
　③FD研修プログラム検討ワーキンググループ
　　FD研修プログラム検討ワーキンググループ 2010年度活動記録 …… 126

《第2部》海外研修参加報告《POD2010》 …… 137

「戦略的連携支援事業」連携大学･連携機関

The Kyoto Faculty Development Center

Project Report 2010

1

第1部

1. 2010年度活動方針

2. 2010年度活動総括

3. 2010年度活動記録

4. 各WG活動記録

2010年度活動方針

2010年度は昨年度に作成したFD研修プログラムを実際に運用し、長期的に実施可能なFDプログラム体系として確立することに重点を置く。補助金事業最終年度にあたり、京都FD開発推進センターが中心となり、連携大学のFD担当者と協力してFDの「京都モデル」を実現していくための体制固めと長期的展望を確立する。

《研修プログラムの実施とモニタリング》

2009年度に固めたFD研修プログラムを実施するとともに、内容の調整と評価・フィードバックを重ね、補助金事業終了後に向けて最終的な体系化を行う。

- 2009年度に刊行し好評を得ている「FDハンドブック」をシリーズ化して発行する。また、ハンドブックをテキストとして活用した階層別の研修プログラムを展開する。
- 新任教員を対象とした合同研修プログラム、連携大学のFD担当者を主な対象とした「京都FDer塾」の定期開催、連携大学の学長・副学長を対象とした「京都FD執行部塾」を、補助金事業終了後にも定例開催していけるようプログラム化を図る。
- 2009年度にメルボルン大学に委嘱して作成した研修プログラムを継続実施するとともに、アメリカでも同様のプログラムを作成できるよう検討する。

《FDシステムの最終構築と保守方針決定》

- クリッカー、WEBアンケートシステム等の様々なICT技術を、連携大学が共通して利用できるシステムとして紹介し、活用事例を広げていく。
- 補助事業終了後の運営方法および機器リプレイスを含めた保守方針を決定する。

《分野別汎用プログラムの開発とモニタリング》

京都地域の特色である芸術系大学・学部のFD連携を進めていくため、海外の先進事例を紹介し、活用方策を検討する。海外から講師を招聘し、セミナーを開催することも検討する。

《FD推進のためのSD研修プログラムの検討》

今後ますます教育の質が問われる時代に向けて、より実効性のあるFD活動を支える職員の能力向上が必要になる。国内・海外の調査成果を参考にして、FDを支援する職員の能力向上を図るためのSD研修プログラムの開発を検討する。

《2011年度以降の組織体制の確立》

京都FD開発推進センター事業の継続とファカルティ・ディベロッパーの養成、FD研修プログラムの実施体制、(財)大学コンソーシアム京都への組織移管等、補助事業終了後の組織体制と財政方針を検討し決定する。

《評価システムの実施体制と評価基準、評価組織の決定》

学外識者により本補助事業の評価を行うとともに、補助金事業終了後の評価方針・方法を決定する。

《事業総括と最終事業報告書の作成》

3年間の連携事業の総括を行い、最終事業報告書を発行する。

2010年度活動総括

文部科学省「戦略的大学連携支援事業」に採択された、京都地域18大学・短期大学の連携事業「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発・組織的運用システムの確立」は、2008年10月に京都FD開発推進センター（以下、本センター）を設置して以来、連携大学教職員による3つのワーキンググループの活動とセンター独自の活動を連動させて、旺盛で活発な連携活動を実施してきた。

2009年度には連携大学のニーズ分析を手始めに、FD研修プログラムの作成と試行、国内調査・海外調査の実施、FDハンドブックの作成、FDシステム開発整備を本格的に開始し、教職員の授業改善に対するサポート、連携大学のFD活動支援の体制作りの契機とすることができた。

2010年度は補助金事業最終年度として、階層別FD研修プログラムの本格実施、海外の高等教育機関に委嘱したFD研修の実施と運用体制の確立、FDハンドブック第2巻の作成・配布、連携事業のレビューとフィードバック等、様々な活動を連携大学の参画・協力を得ながら進めてきた。

2010年度の具体的な活動内容および実施状況については、後掲する本センター活動記録および3つのWGによる活動記録に詳述する。本章は2011年4月以降に作成する『最終事業報告書』の一部として、2010年度のFD連携活動を当初活動計画に則して総括するものである。

①事業の評価

1）研修プログラムの実施とモニタリング

2010年度は以下の研修プログラムを実施したことによって、連携大学教職員の授業改善やFD活動に対する知識と意欲を喚起することができ、また本事業の企画、運営に反映させることができた。事業評価においても、階層別研修プログラムをはじめとする研修活動に対して高い評価が示された。

・2009年度に作成した階層別FD研修プログラムを、新任教員合同研修（2回）・京都FDer塾（9回）・京都FD執行部塾（1回）と、それぞれ計画通りに実施した。各研修において参加者アンケートを実施し、FD研修プログラム検討WGもしくは、FDer養成WGにおいて事後検証を行っている。さらにそれぞれの研修プログラムについて、センター会議および連携運営委員会において開催結果が報告され、次回の研修を計画、実施する際に活用している。

・FD先進事例の海外調査研修（ボストン8名、メルボルン6名）を実施した。また、事前学習会、研修報告会（28名参加）を開催し、調査報告書（1500部）を発行した。ボストンおよびメルボルンで実施した研修は、来年度以降も継続して実施できるよう計画している。

・スペイン（3名派遣）およびアメリカ（2名派遣）で開催されたFD担当者の国際会議に連携大学教職員を派遣し、教育開発に関する国際的な動向を調査するとともに、海外のFD担当者と意見交換を行った。

・連携大学職員の提案により、国内のFDに関する5つの大学連携組織（山形・八王子・名古屋・石川・愛媛）を訪問し、インタビューと意見交換を行った。

2）分野別汎用プログラムの開発とモニタリング

芸術系大学・学部の連携によるFD基礎プログラムの開発を目指して、2009年度に実施した海外調査において、芸術系大学におけるFD活動の先進事例を調査した。今年度は海外の芸術系大学に所属する講師に招聘講演を打診したが、都合により実現しなかった。

3）広報システムの最終構築と保守方針決定

センターニューズレターの発信（年4回）、本連携事業内部で使用しているメーリングリストとともに、京都大学と広島大学の高等教育関連のメーリングリストを活用することによって、本センターの活動情報を効果的に全国に発信することができた。また、本センターのホームページからFDハンドブックの申し込みができるシステムを整備することにより、効果的に成果を発信することができた。事業評価においては、連携大学のFD担当者や全国の大学関係者に対して、本センターから発信する情報は回数、質ともに適切であるとの評価を得ている。ただし、連携大学内部での情報の浸透については、課題が残っている。

なお、本センターの広報システムは、補助金事業終了後のFD連携事業に引き継がれる予定である。

4）評価システムの実施体制と評価基準、評価組織の決定

補助金事業最終年度にあたり、本連携事業の事業評価を以下の手順で実施した。

（1）一次評価：全連携大学による内部評価（2010年11月～12月）
各連携大学1名（連携運営委員またはワーキンググループ参加教員）に活動報告を示し、評価シートの記入を依頼した。

（2）二次評価：外部識者による外部評価（2011年1月～2月）
外部評価委員3名に活動報告と内部評価の結果を示し、評価シートの記入を依頼した。

（3）総括評価：外部評価委員およびセンター会議メンバーによる事業全体総括（2011年3月）
内部評価と外部評価の結果に基づき、事業評価委員会にて事業全体の講評・総括を行った。

5）FD推進のためのSD研修プログラムの検討

本連携事業において、具体的なFD担当職員のための研修プログラムの検討は行わなかった。ただし、すべての連携会議および各種研修プログラムに連携大学からFD担当職員が多数参加し、結果的にFD活動の進め方や研修方法等について学習する機会を提供することができた。

6）事業総括と最終事業報告書の作成

4）に記載した3段階の事業評価により事業総括を実施した。

ただし、当初刊行を計画していた『最終事業報告書』については、文部科学省の指導により今年度に刊行することができないため、本報告書を2010年度に刊行することとなった。

②全体総括

2年半にわたる連携活動と多くの取り組みを通して、FDの諸活動が「大学連携」と非常に親和性が強く、特に中小規模大学のFD活動にとって「大学連携」という枠組みが効果的であることが、あらためて明確になった。

上述した事業評価においても、本連携事業の高い評価として挙げられているのは、

a. 大学コンソーシアム京都において積み上げてきたFD取組の実績を充実した形で継承している点

b. FD研修プログラムを体系的に組み立てて着実に進めている点

c. FDハンドブックやニューズレターを発行して、イベントに参加できない教職員へアプローチをしている点

などである。特に中小規模の連携大学にとって、体系的な階層別FD研修プログラムが提供され、様々な形で大学教育に関する情報が提供されたことには大きな意義があったと思われる。

また、本事業に参加した教員、中でもワーキンググループ参加教員が、本務校の業務だけでも大変なところを毎回

夜間の会議のみならず、セミナーや研修に出席したり、自ら発表、講演したりと献身的な尽力により本事業を成功に導いた。京都地域内の他大学の教員とのコラボレーションは、大学コンソーシアム京都の様々な活動においても充実した形で実現されているが、特にFD研修プログラムの企画・開催やFDハンドブックの作成、海外FD研修等のFD諸活動において有効であることが、本連携事業によって明らかとなった。

もう1点付け加えるとすれば、多くの評価者の一致する意見として、センター専属の専門職員が非常に有効であることも明確にできたことが挙げられる。本センターは専門研究員・専門調査員・事務担当職員の3名体制であったが、大学コンソーシアム京都のFD担当職員や連携大学のFD担当職員の協力を仰ぎながらも、企画・立案・運営と、かなりの量の業務に忙殺された。現状の高等教育機関においてFD活動を活発に実施しようとすれば、その企画・立案・運営を担う専従職員とその労力は必須である。本事業は当初事業計画において「FDer牽引型」のFD連携活動を標榜してきたが、単独ではFD専門部署を設置することができない中小規模大学が、戦略的大学連携によって共同のFDセンターを持つことのメリットは十分に発揮されたと総括することができる。

事業評価において低い評価としては、

a. 個々の連携大学・短期大学自体のFD活動に対する影響が明確でない点

b. FD研修プログラムが（体系的ではあるが）網羅的にはなっていない点

c. 授業コンサルテーションの実施例がない点

などが挙げられる。本事業においては（1）FD活動の共同実施、（2）各大学におけるFD活動の活性化の2点が課題とされたが、（1）の課題については成果が表れているが、（2）の課題については現段階で明確な成果はなく、長期的な評価が必要とされている。本事業において実施した研修形態やプログラム作成の手法は、今後の大学コンソーシアム京都におけるFD連携活動に継続して活用されていくこととなるが、さらにそれぞれの大学内のFD活動、FD研修プログラムに取り入れていくことが期待される。

③その他

1）平成22（2010）年度補助金について

政権交代による事業仕分の一環として、戦略的大学連携支援事業も見直しが行われ、新規事業採択の停止とともに、継続中の課題についても20%程度の削減方針が打ち出された。2009年度中に文部科学省による事業ヒアリングと詳細な調書提出が求められたことにより、2010年度の事業計画には大幅な変更を余儀なくされた。

とはいえ提出した事業実績の調書と文部科学省のヒアリングにより、本連携事業は非常に高く評価されたため、2010年度予算額は当初（2008年GP採択時）予算額の約9%減という結果となった。

これにより行事や会議の回数、海外研修派遣については計画通り実施し、各種費用を圧縮、節約することによって効率的な補助金執行が可能となった。

以上

2010年度センター活動記録

会議の運営

(1)京都FD開発推進センター会議

本連携事業の最高意思決定機関であるセンター会議は、各連携大学・短期大学からの代表者1名を構成員として、八木センター長(佛教大学教授・教学部長)が議長を務め、年度初め・秋・年度末の年3回を定例会として開催した。

2010年度は、すべてFD連携運営委員会との合同会議として、5月に前年度決算、今年度活動方針・予算・センター活動予定等を決定、10月に人事案件および次年度以降の活動方針の審議とともに、センターおよびWGの活動報告・会計中間報告等を行った。2011年3月は、補助事業後の連携体制・最終決算等を審議・決定した。

(2)FD連携運営委員会

本連携事業の執行機関である運営委員会は、各連携大学・短期大学のFD委員長などを構成員として、8月と12月を除く毎月、計10回開催を常会としている。運営委員長は佛教大学の藤松素子教授(教授法開発室長)が務めている。

毎月のセンター活動報告と活動予定の承認とともに、行事開催を決定し、連携運営方針について協議した。

(3)幹事会

年3回のセンター会議、年10回の運営委員会よりも機動的な意思決定を必要とする事案に備え、また18大学による連携をよりスムーズに進めるために、連携大学の中から4大学(佛教大学、京都工芸繊維大学、大谷大学・同短期大学部、龍谷大学・同短期大学部)と大学コンソーシアム京都による幹事会を構成した。2010年度は、2011年1月に開催した。

(4)代表校事務連絡会

代表校である佛教大学の運営委員会メンバーと京都FD開発推進センター、大学コンソーシアム京都の三者による運営委員会の事前打ち合わせの場として連携運営委員会の前に開催してきた。センター会議・運営委員会に提出する議題・資料を確認するとともに、事務手続き等をスムーズに進めるための打ち合わせを行っている。

(5)ワーキンググループ

連携大学教職員による3つのワーキンググループ(以下WG)の活動詳細については後述するが、FDer養成WGは9回、FDシステム検討WGは11回、FD研修プログラム検討WGは10回の定例WGを開催し、会議の準備、資料作成から記録作成までの事務作業と、それぞれのWGが主催するセミナーや学習会等の運営実務は、京都FD開発推進センターと大学コンソーシアム京都の協働により進められている。

特に、FDer養成WGの事務局機能を大学コンソーシアム京都の担当者が担うことによって、京都FD開発推進センターの負担が軽減されただけでなく、スムーズなWG運営に大いに役立った。

センター行事

1）第1回FDセミナー

“京都FDer塾”の一環として「授業技術」をテーマに、特に多人数授業における授業改善の工夫を取り上げた。梶川先生からはさまざまな授業技術や学生をひきつけるテクニックが紹介され、宮田先生からは携帯電話やICTを使った授業運営について紹介された。

全国から151名の参加があり、実際に大教室を使ったレクチャーに加え、グループディスカッションも取り入れたため、会場から多くの感想や質問が出され、内容の濃いセミナーとなった。

テーマ：**授業技術を考える～多人数授業の工夫～**
日　時：2010年7月31日（土）　15:00～17:30
場　所：大谷大学　1号館1209教室
参加者：151名
講　師：梶川裕司氏　（京都外国語大学　外国語学部　教授・マルチメディア教育研究センター長）
　　　　宮田　仁氏　（滋賀大学　教育学部　教育実践総合センター教授）
コーディネーター：
　　　　村上正行氏　（京都外国語大学　マルチメディア教育研究センター准教授）

梶川裕司氏

宮田　仁氏

質問時間

2）第2回FDセミナー

本連携事業の最終事業報告会として、新任教員合同研修の開発･実施、各大学のFD担当者を対象とした『京都FDer塾』の定例開催、学長等を対象とした『京都FD執行部塾』の実施、ICTを使った授業実践と教員意識調査、まんが版FDハンドブックの刊行など、本センターによる多くの実績について報告し、さらに補助金事業終了後のFD連携活動についての展望を話し合った。

内　容：FD連携事業～3年間の活動報告と今後の展望～
日　時：2011年1月23日（日）　14:00～16:30
場　所：龍谷大学深草キャンパス　3号館201教室
参加者：85名
記念講演：合田隆史氏　（文部科学省科学技術･学術政策局長）
報告者：　林　久夫氏　（FD研修プログラム検討WGリーダー、龍谷大学教授）
　　　　　深田　守氏　（FDシステム検討WGリーダー、京都薬科大学教授）
　　　　　松本真治氏　（FDer養成WGリーダー、佛教大学准教授）
　　　　　深野政之氏　（前京都FD開発推進センター専門研究員、一橋大学特任講師）
コーディネーター：川面　きよ　（京都FD開発推進センター専門研究員）

合田隆史氏

林　久夫氏

深田　守氏

松本真治氏

深野政之氏

3）大学コンソーシアム京都主催　第16回FDフォーラム･ミニシンポジウム

本センター主催の「新任教員合同研修」は、国立教育政策研究所が開発･提唱している「新任教員研修プログラムの基準枠組」に準拠し、連携する京都地域の18大学･短期大学の新任教員が共通して必要となる知識･理論･技術、そして意識を身につけることを目的にして研修プログラムを開発してきた。

本シンポジウムでは、「基準枠組」開発にかかる経緯の報告や、「基準枠組」を活用した新任教員研修の実践事例を紹介し、参加者とともに、より効果的な新任教員研修のあり方を議論した。

テーマ：**新任教員研修プログラムの構築と実践**
日　時：2011年3月6日（日）　10：00～15：30
場　所：京都外国語大学　1号館　171号教室
参加者：66名
報告者：川島啓二氏　（国立教育政策研究所　高等教育研究部総括研究官）
沖　裕貴氏　（立命館大学教授）
井上史子氏　（立命館大学講師）
林　久夫氏　（FD研修プログラム検討WGリーダー、龍谷大学教授）
コーディネーター：深野政之氏　（前京都FD開発推進センター専門研究員、一橋大学特任講師）

川島啓二氏

沖　裕貴氏

井上史子氏

林　久夫氏

ミニシンポジウムの様子

海外FD調査・研修 〔詳細は『2010年度夏季FD研修・調査報告書』参照〕

本連携事業の連携機関である、大学コンソーシアム京都とアメリカ・ボストン地区の大学コンソーシアムColleges of the Fenway（COF）、オーストラリアのVictorian International Directors' Committee（VIDC）との連携協定が締結されたことを受け、アメリカ・ボストン・フェンウェイ地区とオーストラリア・メルボルン地区の大学におけるFD現地調査・研修を「国際連携プログラム開発事業」との共同企画として実施した。

また、6月末にスペイン・バルセロナで開催されたICED（教育開発国際コンソーシアム）および11月初旬にアメリカ・セントルイスで開催されたPOD（Professional Organizational Development Network in Higher Education）のカンファレンスに研修参加した。

これらの研修・調査については、2010年12月に『2010年度夏季研修・調査報告書』を刊行し、連携校および全国の大学教育センター等に配布した。PODカンファレンスについては本報告書内にて報告を行う。

A. 夏季FD研修・調査事前勉強会

①事前学習会「オーストラリアの教育システムについて／訪問先紹介」

日　時：2010年8月4日（水）　16:00～18:00
会　場：キャンパスプラザ京都　第2共同研究室
講　師：山本尚広氏　（大学コンソーシアム京都　主幹）
　　　　水町尚子氏　（大学コンソーシアム京都　主査）
　　　　深野政之　　（京都FD開発推進センター　専門研究員）
参加者：6名

②事前学習会「Colleges of the Fenwayについて／訪問先紹介」

日　時：2010年8月10日（火）　16：00～18：00
会　場：キャンパスプラザ京都　第2共同研究室
講　師：山本尚広氏　（大学コンソーシアム京都　主幹）
参加者：8名

B. オーストラリア・メルボルン研修・調査

2009年夏季同様、メルボルン大学高等教育研究センター（CSHE）における2日間のFD研修を軸に、比較検討のため、同地域内でメルボルン大学と同規模・同レベルであるディーキン大学、モナッシュ大学におけるFDに関する取組の調査を行った。また、オーストラリアの中等後または第三次教育機関であるTAFEに訪問し、学生サポートや教員向けのトレーニングの現状をヒアリングした。

日　程：2010年8月21日（土）～8月29日（日）　8日間
訪問先 ：（1）Deakin University: Institute of Teaching and Learning
　　　　（2）The Gordon Institute of TAFE
　　　　（3）Monash University
　　　　（4）The University of Melbourne: Centre for the Study of Higher Education
参加者：6名

モナッシュ大学にて

メルボルン大学での研修の様子

C. アメリカ・ボストン研修・調査

アメリカ・ボストン地区の大学コンソーシアムColleges of the Fenway（COF）において、コンソーシアム内でのFDに関する取組を調査するとともに、いくつかの加盟校を訪問して独自の取組についてもヒアリングを行い、今後のFD/SD分野における協力関係の可能性について議論した。

日　程：2010年9月6日（月）～9月12日（日）　7日間
訪問先：（1）Colleges of the Fenway：Teaching and Learning Collaborative
（2）Simmons College
（3）Emmanuel College
（4）Massachusetts College of Pharmacy and Health Science
（5）Wheelock College
参加者：8名

Colleges of the Fenwayにて

Massachusetts College of Pharmacy and Health Sciencesにて

D. ICED2010参加

海外のFDネットワークとの情報交換・交流を目的としてFDネットワーク間の国際組織であるICED（国際教育開発コンソーシアム）のカンファレンスに3名の教職員を派遣した。

期　間：6月26日（土）～7月 2日（金）
開催日：6月28日（月）～6月30日（水）
会　場：ポンペウ・ファブラ大学（スペイン・バルセロナ）
参加者：3名
主　催：The International Consortium for Educational Development

E. 2010年度夏季海外研修・調査報告会

日　時：2010年10月14日（木）　18:00～20:00
場　所：キャンパスプラザ京都　2Fホール
報告者：オーストラリア・メルボルン：耳野健二氏　（京都産業大学　教授）
　　　　アメリカ・ボストン：畑田　彩氏　（京都外国語大学　講師）・細井信造氏　（京都薬科大学　准教授）

F. PODカンファレンス参加

期　間：11月2日（火）～11月9日（火）
開催日：11月3日（水）～11月7日（日）
会　場：ハイアット・リージェンシー　セントルイス（アメリカ　ミズーリ州・セントルイス）
参加者：2名
主　催：Professional and Organizational Development Network in Higher Education

G. 自己設定型国内視察・調査《国内連携FDネットワーク》

国内において、大学連携を通してFD活動を実践している5つの組織、大学に連携大学職員を派遣し、活動内容や現在抱えている課題、今後のビジョンについてインタビューを実施した。また、補助金による活動組織の場合は、補助金事業終了後のビジョン等についても情報交換を行った。

・7月20日（火）　大学コンソーシアムやまがた／FDネットワーク“つばさ”（山形）
・7月21日（水）　FD・SDコンソーシアム名古屋　（愛知）
・7月23日（金）　大学コンソーシアム石川　（石川）
・8月 4日（水）　八王子未来学／大学コンソーシアム八王子　（東京）
・8月 9日（月）　四国地区大学教職員能力開発ネットワーク　（愛媛）

調査メンバー：6名

専門研究員・専門調査員の研修出張・行事参加

本センターの専門研究員と専門調査員が、以下の通り他大学等のFD行事や研修に参加した。それぞれの出張について連携運営委員会で承認を受け、全ての出張等について報告書が提出された。報告書の一部は本センターHPで公開している。

大学コンソーシアム八王子にて

大学コンソーシアム名古屋にて

1. 深野研究員･川面調査員　4月19日(月)　私学高等教育研究所第44回公開研究会　(東京)
2. 川面調査員　5月29日(土)･30日(日)　日本高等教育学会第13回大会　(兵庫)
3. 川面調査員　6月 5日(土)・6日(日)　大学教育学会第32回大会　(愛媛)
4. 深野研究員　6月26日(土)～ 7月2日(金)　ICED2010参加　(スペイン･バルセロナ)
5. 川面調査員　6月26日(土)　私大連「大学トップのリーダーシップの育み方」(福岡)
6. 川面調査員　7月 3日(土)　日本教育工学会研究会　(東京)
7. 深野研究員･川面調査員　自己設定型国内視察
   ・7月20日(火)　大学コンソーシアムやまがた／FDネットワーク"つばさ"　(山形)
   ・7月21日(水)　FD･SDコンソーシアム名古屋　(愛知)
   ・7月23日(金)　大学コンソーシアム石川　(石川)
   ・8月 4日(水)　八王子未来学／大学コンソーシアム八王子　(東京)
   ・8月 9日(月)　四国地区大学教職員能力開発ネットワーク　(愛媛)
8. 川面調査員　8月21日(土)～29日(日)　オーストラリア･メルボルンFD研修
9. 深野研究員　8月25日(水)～28日(土)　SPODフォーラム2010　(愛媛)
10. 深野研究員･川面調査員　9月6日(月)～12日(日)　アメリカ･ボストンFD研修
11. 川面調査員　9月29日(水)　国立教育政策研究所「新任教員研修プログラムの戦略的構築」(東京)
12. 川面調査員　10月23日(土)　私大連「大学マネジメントを担うプロフェッショナルの育成」(宮城)
13. 川面調査員　11月 2日(火)～ 9日(火)　POD2010参加　(アメリカ　ミズーリ州･セントルイス)
14. 川面調査員　11月23日(火)　国立教育政策研究所FD国際セミナー　(東京)
15. 川面調査員　11月25日(木)　SPODシンポジウム　(愛媛)
16. 川面研究員　12月 2日(木)　関西学院大学第1回高等教育推進センターFD講演会　(兵庫)
17. 川面研究員　12月8日(水)　日本･オーストラリア高等教育質保証セミナー　(東京)
18. 川面研究員　12月18日(土)　北陸三県合同フォーラム　(石川)
19. 川面研究員　1月24日(月)　大学教育改革プログラム合同フォーラム　(東京)
20. 川面研究員　2月 7日(月)　公開シンポジウム　なんたっす?「大学コンソーシアム」(山形)
21. 川面研究員　2月19日(土)～25日(金)　(オーストラリア･メルボルン)
22. 川面研究員　3月8日(火)　シンポジウム「大学教育におけるポートフォリオシステムの導入と今後の展望」(長崎)
23. 川面研究員　3月17日(木)～18日(金)　第17回大学教育研究フォーラム　(京都)
24. 川面研究員　3月19日(土)　教育の質を保証する教員職能開発と大学連携　最終報告会　(京都)

連携大学教職員の他大学等の行事･研修への派遣支援

連携大学･連携機関の教職員がFDの知識をさらに深めるため、本センターが推奨するFD関連のセミナー等へ派遣費用支援を行った。2010年度は以下の通り、延べ10名の利用があり、それぞれ参加報告書が提出され、その一部を本センターHP上で公開している。

1. 4月19日（月） 私学高等教育研究所第44回公開研究会 （東京） 2名
2. 8月25日（水）･26日（木） SDODフォーラム （愛媛） 1名
3. 9月11日（土）･12日（日） 初年次教育学会第3回大会 （東京） 2名
4. 9月14日（火） 短期大学FDフォーラム （石川） 2名
5. 9月21日（火） 社会人基礎力育成事例研究セミナー （愛知） 1名
6. 12月18日（土） 日本教育工学会研究会「ICTを活用したFDと大学」（大分） 1名
7. 2月19日（土） Q-Conference 2010 Q-Links活動報告会 （福岡） 1名

広報活動

連携大学･連携機関の教職員に対して、本センター事業の活動内容を紹介するとともに、全国の大学関係者に対して、本センター事業によるFD連携活動の広報と普及を行った。

『まんがFDハンドブック おしえて！ FDマン』第2巻を刊行した際には、大学関係メーリングリストや学会HP等への投稿･記事提供を重点的に行ったことにより、全国の大学教職員から大きな反響があり、連携大学以外から600通以上の送付申し込みを受けた。

・センターWEBサイト（http://www.kyoto-fd.jp/）を運営
・京えふでブログ（http://blogs.dion.ne.jp/kyoto_fd/）を運営
・Newsletterの季刊発行：各号12,000部で8回発行
・2010年度夏季FD研修･調査報告書：2,000部発行 （2010年12月）
・『まんがFDハンドブック おしえて！ FDマン【成績評価編】』初版：5,000冊発行 （2010年11月）
・デジタルブック版『まんがFDハンドブック おしえて！ FDマン【成績評価編】』公開 （2011年3月）

FDコンサルテーション活動

連携大学および連携大学･連携機関の教職員から寄せられる質問、支援要請に対応するため、FDコンサルテーションに対応する仕組みを作った。対応件数はまだ少ないが、さらに広報活動を強め、本センターによる対応実績を積むことによって、より効果的なFDコンサルテーションを実施する体制を作り上げることとする。

1）FDQA

2007年度から大学コンソーシアム京都 京都高等教育研究センターがweb掲示板を開設し、試行的に質問等を受け付け、対応してきたものを、2009年度より本センターが引き継いでHPを整備し、FDQAを運用している。

対応実績：2件

FDに関する基本的な質問に回答するとともに、各大学等が抱える個別の質問等を把握し、可能な限り回答した。

2) 授業コンサルテーション

連携大学の授業に関わる個別相談に対応できるよう、授業コンサルテーションを受け付けている。連携大学教員の授業の組み立てや授業運営上の悩み等に応じるとともに、当該教員の要望により授業を参観し、カウンセリングを行ったり、授業ビデオの収録や受講学生への聞き取り、授業検討会等を行うことによって、経験豊かな教員等からアドバイスしている。

問い合わせ実績：2件

対応実績：0件

所属する大学の同僚教員には相談しにくいことでも、他大学の専門家からアドバイスを受けることができる仕組みとしており、場合によっては外部専門家にも参加していただいて、対応実績を重ねることを重視していきたい。

3) 研修会講師紹介

連携大学・短期大学のFD活動を支援するため、FDに関する相談、情報提供の窓口を設けている。FDに関する講演会・研修会・シンポジウムやワークショップを企画する際に、そのテーマに詳しい講師を紹介したり、プログラムに関する相談等に応じたりするものである。

対応実績：3件（1件は連携大学、2件は連携大学以外の大学）

京都FD開発推進センター会議・FD連携運営委員会記録

第1回FD連携運営委員会

2010年4月27日（火）　18：30〜19：45　キャンパスプラザ京都　第3会議室

〈報告事項〉

2010年度プロジェクトメンバー表確認

1. センター活動報告／今後の行事予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 2009年度決算報告

〈協議事項〉

1. 2009年度事業報告書「FD連携活動総括」「センター活動記録」
2. 2010年度行事予定
3. 2010年度海外調査・研修企画案
4. 海外講師の招聘について
5. 外部評価委員の委嘱

第1回京都FD開発推進センター会議・第2回FD連携運営委員会（合同会議）

2010年5月28日（金）　19：05〜20：20　キャンパスプラザ京都　第1会議室

〈報告事項〉

1. センター活動報告／今後の行事予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況

4. 2010年度補助金交付決定（通知）
〈協議事項〉
1. 2009年度決算報告
2. ICED（スペイン・バルセロナ）カンファレンスの参加者
3. 海外調査・研修（オーストラリア、アメリカ）の企画案、募集要項
4. 第1回FDセミナー（7/31）企画案
5. 京都FD執行部塾（6/19）への学長出席要請
6. 学会発表等の申請（2件）

第3回FD連携運営委員会

2010年6月25日（金）　18：30～20:15　キャンパスプラザ京都　第3会議室
〈報告事項〉
1. センター活動報告／今後の活動予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 京都FD執行部塾（6/19）実施報告
5. 第2回連携大学教員意識調査の結果分析報告
〈協議事項〉
1. 自己設定型研修（国内）企画案について
2. 事業評価について
3. 第3回連携大学教員意識調査について
4. 財団法人大学コンソーシアム京都への事業継続の申し入れについて

第4回FD連携運営委員会

2010年7月29日（木）　18：30～19：55　キャンパスプラザ京都　第1会議室
〈報告事項〉
1. センター活動報告／今後の活動予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 新任教員合同研修参加者募集
5. 自己設定型国内研修経過報告
6. センター事務室の移転
〈協議事項〉
1. 夏季海外FD研修について
2. FD活動ポスターの作成依頼について
3. 事業評価について
4. 第3回連携大学教員意識調査について

第5回FD連携運営委員会

2010年9月24日(金)　18:30～19:40　キャンパスプラザ京都　第3会議室

〈報告事項〉

1. センター活動報告／今後の活動予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 第1回FDセミナー(7/31)報告
5. 夏季海外FD研修報告(メルボルン、ボストン)
6. 新任教員合同研修報告
7. ポスターセッションの依頼

〈協議事項〉

1. POD(アメリカ)への派遣について
2. 第2回FDセミナーと連携事業最終報告会の実施について
3. FDフォーラム・ミニシンポジウムの企画担当について

第2回京都FD開発推進センター会議・第6回FD連携運営委員会(合同会議)

2010年10月28日(木)　18:30～20:00　キャンパスプラザ京都　第1会議室

〈報告事項〉

1. センター活動報告／今後の行事予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 海外FD会議(アメリカ)参加について
5. 第2回FDセミナー(1/23)について
6. FDフォーラム・ミニシンポジウムの企画について
7. GPポータル登録について

〈協議事項〉

1. 2010年度上半期の決算について
2. 補助金終了後の方針について
3. 事業評価の依頼について
4. 人事について

第7回FD連携運営委員会

2010年11月30日(火)　18:30～19:50　キャンパスプラザ京都　第1会議室

〈報告事項〉

1. センター活動報告／今後の活動予定
2. 専門研究員・調査員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 第9回京都FDer塾ポスターセッションの進捗状況
5. 文部科学省主催大学教育改革プログラム合同フォーラムへの出展について

〈協議事項〉
1. センターおよびWGの活動報告について
2. 事業評価（内部評価）の依頼について
3. 第4回教員意識調査の依頼について
4. 第2回FDセミナー（連携事業最終報告会）について
5. FDフォーラム・ミニシンポジウムについて

第8回FD連携運営委員会

2011年1月27日（木）　18：30〜20：20　キャンパスプラザ京都　第2会議室
〈報告事項〉
1. センター活動報告／今後の活動予定
2. 専門研究員の出張／研修派遣支援
3. 各WG活動進捗状況
4. 第2回FDセミナー（連携事業最終報告会）実施報告
5. 文部科学省主催大学教育改革プログラム合同フォーラム出展報告
6. 新任教員合同研修　参加者募集について
〈協議事項〉
1. 第3回WEBアンケート調査「教員職務意識調査」結果報告の公表について
2. 平成22年度第4四半期の予算執行について
　① 未執行金額の確認
　② 余剰金返還の方針について
　③ 未執行分の活用方法について
3. 2011年度以降の事業継続について

第9回FD連携運営委員会

2011年3月1日（火）　18：30〜19：15　キャンパスプラザ京都　第2会議室
〈報告事項〉
1. センター活動報告／今後の活動予定
2. 専門研究員の出張
3. 各WG活動進捗状況（FDシステム検討WG）
4. メルボルン出張（2/19〜25）について
5. 国内派遣支援利用について
6. 新任教員合同研修参加者募集について（再）
7. 今後の大学コンソーシアム京都の事業継続体制について
〈協議事項〉
1. 専門研究員による学会発表申請について

第3回京都FD開発推進センター会議・第10回FD連携運営委員会（合同会議）

2011年3月16日（水）　18：30～20：00　キャンパスプラザ京都　ホール

〈報告事項〉

1. センター活動報告／専門研究員の出張予定
2. 各WG活動進捗状況
3. FD連携プロジェクト最終事業報告会実施報告
4. FDフォーラム・第4ミニシンポジウム実施報告
5. 2010年度の決算見込みについて
6. 事業評価について
7. 補助金事業終了後の方針について

〈検討事項〉

1. 第4回教育意識調査（ICT活用）結果報告の公表について

2010年度活動カレンダー

日程	行事･会議
	4月
4月15日（木）	eポートフォリオ実態調査報告会
4月15日（木）	第1回FDシステム検討WG
4月16日（金）	第1回FD研修プログラム検討WG
4月19日（月）	〔研修出張･派遣支援〕私学高等教育研究所　第44回公開研究会（私学会館　東京都千代田区）
4月21日（水）	第1回FDer養成WG
4月27日（火）	第1回FD連携運営委員会
	5月
5月20日（木）	第2回FDシステム検討WG
5月21日（金）	第2回FD研修プログラム検討WG
5月24日（月）	第4回京都FDer塾「授業公開」成功法を考えよう!～組織的な取組にするために～
5月26日（水）	第2回FDer養成WG
5月28日（金）	第1回センター会議･第2回FD連携運営委員会
5月29日（土）～30日（日）	〔研修出張〕日本高等教育学会第13回大会（関西国際大学　兵庫県尼崎市）
	6月
6月　5日（土）～ 6日（日）	〔研修出張〕大学教育学会第32回大会（愛媛大学　愛媛県松山市）
6月17日（木）	第3回FDシステム検討WG
6月18日（金）	第3回FD研修プログラム検討WG
6月19日（土）	京都FD執行部塾「組織的な大学教育改善と大学執行部の役割」
6月23日（水）	第3回FDer養成WG
6月25日（金）	第3回FD連携運営委員会
6月26日（土）	〔研修出張〕私立大学フォーラム（西南学院大学）
6月26日（土）～7月 2日（金）	ICED（The International Consortium for Educational Development）2010参加（スペイン･バルセロナ）
6月28日（月）	第5回京都FDer塾「授業活性化へのヒント～ファシリテーションとは～」
	7月
7月　3日（土）	〔研修出張〕日本教育工学会研究会（電気通信大学　東京都調布市）
7月14日（水）	第4回FDer養成WG
7月16日（金）	第4回FD研修プログラム検討WG
7月20日（火）	自己設定型国内視察･調査《国内連携FDネットワーク》　FDネットワーク“つばさ”（山形）
7月21日（水）	自己設定型国内視察･調査《国内連携FDネットワーク》　FD･SDコンソーシアム名古屋（愛知）
7月22日（木）	第4回FDシステム検討WG
7月23日（金）	自己設定型国内視察･調査《国内連携FDネットワーク》　大学コンソーシアム石川（石川）
7月29日（木）	第4回FD連携運営委員会
7月31日（土）	第1回FDセミナー･第6回京都FDer塾「授業技術を考える～多人数授業の工夫～」
	8月
8月　4日（水）	メルボルンFD研修･調査事前学習会「オーストラリアの教育システムについて／訪問先紹介」
8月　4日（水）	自己設定型国内視察･調査《国内連携FDネットワーク》大学コンソーシアム八王子（東京）
8月　9日（月）	自己設定型国内視察･調査《国内連携FDネットワーク》　四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（愛媛）
8月10日（火）	ボストンFD研修･調査事前学習会「Colleges of the Fenwayについて／訪問先紹介」
8月21日（土）～29日（日）	メルボルンFD研修･調査
8月25日（水）～28日（土）	〔研修出張･派遣支援〕SPODフォーラム2010（愛媛大学　愛媛県松山市）
	9月
9月　3日（金）	第5回FD研修プログラム検討WG
9月　6日（月）～12日（日）	ボストンFD研修･調査
9月11日（土）～12日（日）	〔派遣支援〕初年次教育学会第3回大会（高千穂大学　東京都杉並区）
9月14日（火）	〔派遣支援〕短期大学FDフォーラム（石川県金沢市）
9月14日（火）	第5回FDer養成WG
9月17日（金）	第5回FDシステム検討WG
9月17日（金）～10月13日（水）	第3回連携大学教員職務意識調査

9月18日(土)～19日(日)	新任教員合同研修≪プログラムA≫
9月21日(火)	〔派遣支援〕社会人基礎力育成事例研究セミナー(名古屋市)
9月24日(金)	第5回FD連携運営委員会
9月25日(土)	第7回京都FDer塾「イギリスのFD～レスター大学の取組み～」
9月29日(水)	〔研修出張〕国立教育政策研究所　国際セミナー&ワークショップ(東京都千代田区)
10月	
10月　1日(金)	第6回FD研修プログラム検討WG
10月14日(木)	海外研修・調査報告会(ボストン・メルボルン)
10月20日(水)	第6回FDer養成WG
10月21日(木)	第6回FDシステム検討WG
10月23日(土)	〔研修出張〕私立大学フォーラム(宮城県仙台市)
10月25日(月)	第8回京都FDer塾「授業連携の視点と方法」
10月28日(木)	第2回センター会議・第6回FD連携運営委員会
11月	
11月　2日(火)～ 9日(火)	POD(Professional and Organizational Development Network)参加 (アメリカ ミズーリ州・セントルイス)
11月19日(金)	REAS学習会
11月19日(金)	第7回FDシステム検討WG
11月23日(火)	〔研修出張〕国立教育政策研究所　FD国際セミナー(文部科学省　東京都港区)
11月24日(水)	第7回FDer養成WG
11月25日(木)	〔研修出張〕SPOD 次世代リーダー養成研修 (愛媛大学 愛媛県松山市)
11月26日(金)	第7回FD研修プログラム検討WG
11月30日(火)	第7回FD連携運営委員会
11月30日(火)	まんがFDハンドブック おしえて! FDマン〈成績評価編〉刊行
12月	
12月　2日(木)	〔研修出張〕関西学院大学第1回高等教育推進センターFD講演会(兵庫県西宮市)
12月　3日(金)～22日(水)	第4回連携大学教員意識調査「教育改善に向けたICTシステムの活用」
12月　4日(土)	第9回京都FDer塾　ポスターセッション「連携大学・短期大学のFD活動から学ぶ」
12月　8日(水)	〔研修出張〕大学評価・学位授与機構　日本・オーストラリア高等教育質保証セミナー (東京都千代田区)
12月16日(木)	第8回FDシステム検討WG
12月17日(金)	第8回FD研修プログラム検討WG
12月18日(土)	〔研修出張〕北陸三県合同フォーラム(石川県金沢市)
12月18日(土)	〔派遣支援〕日本教育工学会研究会「ICTを活用したFDと大学」(大分大学)
1月	
1月19日(水)	第8回FDer養成WG
1月20日(木)	第9回FDシステム検討WG
1月21日(金)	第9回FD研修プログラム検討WG
1月23日(日)	第1回FD連携運営幹事会
1月23日(日)	第2回FDセミナー「FD連携事業～3年間の活動報告と今後の展望～」
1月24日(月)	平成22年度大学教育改革プログラム合同フォーラム　ポスターセッション参加
1月27日(木)	第8回FD連携運営委員会
2月	
2月　7日(月)	〔研修出張〕公開シンポジウム　なんたっす?「大学コンソーシアム」(山形市)
2月10日(木)	第10回FDシステム検討WG
2月19日(土)	〔派遣支援〕Q-Conference 2010　Q-Links活動報告会(西南学院大学)
2月19日(土)～25日(金)	メルボルン出張(モナッシュ大学、スインバーン大学、メルボルン大学、ディーキン大学)
3月	
3月　1日(火)	第9回FD連携運営委員会
3月　4日(金)	第10回FD研修プログラム検討WG
3月　6日(日)	第16回FDフォーラム：第4ミニシンポジウム企画　「新任教員研修プログラムの構築と実践」
3月　8日(火)	〔研修出張〕シンポジウム「大学教育におけるポートフォリオシステムの導入と今後の展望」(長崎市)
3月11日(金)	第11回FDシステム検討WG
3月12日(土)～13日(日)	新任教員合同研修≪プログラムB≫
3月16日(水)	事業評価委員会
3月16日(水)	第3回センター会議・第10回FD連携運営委員会
3月31日(木)	デジタル版FDハンドブックII公開

FDer養成ワーキンググループ　2010年度活動記録

WGメンバー

松本　真治	佛教大学	文学部　准教授［WGリーダー］
榎本　正明	華頂短期大学	准教授
河原地英武	京都産業大学	外国語学部　教授・教育支援研究開発センター　副センター長
平山　弓月	京都外国語大学	外国語学部　教授
村上　正行	京都外国語大学	マルチメディア教育研究センター　准教授

［事務局］

深野　政之	京都FD開発推進センター	専門研究員　※2010年11月30日退職
川面　きよ	京都FD開発推進センター	専門調査員　※2010年12月1日より専門研究員
中島　弘喜	大学コンソーシアム京都	次長
北山　広喜	大学コンソーシアム京都	主幹

2010年度の活動方針

《研修プログラムの実施とモニタリング》

2009年度に固めたFDer養成プログラムを実施するとともに、内容の調整と評価・フィードバックを重ね、補助事業終了後に向けて最終的な体系化を行う。

・連携大学のFD担当者を主な対象とした「京都FDer塾」の定期開催、連携大学の学長・副学長を主な対象とした「京都FD執行部塾」を、補助事業終了後にも定例開催していけるよう、プログラム化を図る。

2010年度の活動報告

1）京都FDer塾の開催（6回）

連携大学においてFD活動のリーダーとなる教職員を養成するため、新たに学内のFD委員会メンバーやFD事務担当者になった教職員を主な対象として、2009年度に引き続きセミナー形式とワークショップ形式を組み合わせた定例研修会を行うこととした。2010年度には以下の通り6回にわたり「京都FDer塾」を開催した。

京都FDer塾の詳細な開催報告は別添の報告書が作成されている。第4回・第5回・第8回は昨年度から引き続き、いずれも連携大学内の講師による報告とワークショップの組み合わせで実施した。WGメンバーがグループワークの中に入り、またFD行事の運営を多く経験することによって、参加者ばかりでなくWGメンバーにとってもファシリテーションの手法を習得する機会となった。

第6回、第7回は特別公開講座としてセミナー形式で実施した。第9回はポスターセッションとし、連携大学・短期大学に自大学のFD活動を紹介するポスターの制作を依頼し、作製されたポスターをもとに紹介、質疑応答を行う機会をもった。

2010年度京都FDer塾開催日程

回数	開催日	時間	テーマ	講師	参加者数
第4回	5月24日(月)	18：00～20：00	「授業公開」成功法を考えよう！ ～組織的な取組にするために～	松本真治氏 (佛教大学) 村上正行氏 (京都外国語大学)	25名
第5回	6月28日(月)	18：00～20：00	授業活性化へのヒント～ファシリテーションとは～	鬼塚哲郎氏 北村広美氏 (京都産業大学)	10名
第6回	7月31日(土)	15：00～17：30	【第1回FDセミナー】 授業技術を考える～多人数授業の工夫～	梶川裕司氏 (京都外国語大学) 宮田　仁氏 (滋賀大学)	151名
第7回	9月25日(土)	13：00～17：00	イギリスのFD～レスター大学の取組み～	D. Cox氏 (イギリス･レスター大学) 加藤かおり氏 (新潟大学)	22名
第8回	10月25日(月)	18：00～20：00	授業連携の視点と方法	田中智子氏 (佛教大学)	14名
第9回	12月4日(土)	15：00～17：30	ポスターセッション ～連携大学･短期大学のFD活動から学ぶ～		55名

2）京都FD執行部塾の実施

各大学でFD活動を進めていくにあたって、学長をはじめとする大学執行部がFDを推進、支援する役割は欠かすことができないとの共通認識のもと、2010年度より定期的に大学執行部FD研修を行う企画を立てた。

京都FD執行部塾

日　時：2010年6月19日(土)10時40分~12時00分
場　所：京都ガーデンパレス(京都市上京区)
講　師：小松親次郎氏(文部科学省大臣官房審議官　高等教育局担当)
テーマ：組織的な大学教育改善と大学執行部の役割

当日は、連携大学だけでなく、大学コンソーシアム京都加盟大学･短期大学の学長18名、副学長7名、研究科長･学部長6名をあわせ、33名の大学執行部教員が出席され、文部科学省の小松審議官より、各大学が進めているFD活動における大学執行部の役割について、期待を込めてお話いただいた。

大学執行部を対象としたFD研修は全国に先駆けての実施となり、当日夕方のテレビニュースでも取り上げられた。

来年度以降も公益財団法人 大学コンソーシアム京都の主催行事として継続実施していく方針である。

WG議題

第1回FDer養成WG

2010年4月21日（水）　18：30〜20：00　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【報告事項】

1. 2009年度第9回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告

【検討事項】

2. 京都FD執行部塾の開催について
3. 第1･2回京都FDer塾の開催内容について
4. 2010年度京都FDer塾（後期）のプログラム内容について
5. 2009年度FDer養成ワーキンググループ活動記録について
6. 海外講師の招聘について

第2回FDer養成WG

2010年5月26日（水）　18：30〜20：30　キャンパスプラザ京都　役員室

【報告事項】

1. 第1回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第1回FD連携運営委員会議事録確認
3. 第1回京都FDer塾の開催報告について

【検討事項】

4. FD執行部塾の開催について
5. 第5回京都FDer塾の開催について
6. 第1回FDセミナーの開催について
7. 京都FDer塾（後半）の内容について（継続）
8. 海外講師の招聘について
9. 京都FDer塾実施報告書について

第3回FDer養成WG

2010年6月23日（水）　18：30〜20：30　キャンパスプラザ京都　役員室

【報告事項】

1. 第2回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第1回京都FD開発推進センター会議･第2回連携運営委員会（合同会議）議事録確認
3. 第4回京都FDer塾の開催報告書について
4. 京都FD執行部塾の開催報告について

【検討事項】

5. 第5回京都FDer塾の開催について
6. FDセミナー＆第6回京都FDer塾の開催について

7. 京都FDer塾（第7回～）のプログラムについて
・第7回京都FDer塾について
・第8回京都FDer塾（10／25予定）について
・第9回京都FDer塾について
8. 海外講師の招聘について

第4回FDer養成WG

2010年7月14日（水）　18：30～20：30　キャンパスプラザ京都　役員室
【報告事項】
1. 第3回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第3回FD連携運営委員会議事録確認
3. 第5回京都FDer塾報告書について
【検討事項】
4. FDセミナー＆第6回京都FDer塾（7／31開催）について
5. 第7回京都FDer塾（9／25開催）の当日スケジュールについて
6. 第8回京都FDer塾（10／25開催）の内容･開催方法について
7. 各大学へのポスターセッション依頼について（第9回京都FDer塾）

第5回FDer養成WG

2010年9月14日（火）　14：00～16：30　キャンパスプラザ京都　役員室
【報告事項】
1. 第4回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第4回FD連携運営委員会議事録確認
3. 第5回京都FDer塾報告書について
4. 第1回FDセミナー＆第6回京都FDer塾報告書について
【検討事項】
5. 第7回京都FDer塾（9／25開催）の当日スケジュールについて
6. 第8回京都FDer塾（10／25開催）の内容･開催方法について
7. 各大学へのポスターセッション依頼について（第9回京都FDer塾）

第6回FDer養成WG

2010年10月20日（水）　18：30～19：40　キャンパスプラザ京都　役員室
【報告事項】
1. 第5回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第5回FD連携運営委員会議事録確認
3. 第7回京都FDer塾報告書について
【検討事項】
4. 第8回京都FDer塾（10／25開催）の当日スケジュールについて
5. 第9回京都FDer塾（12／4開催）ポスターセッションについて

第7回FDer養成WG

2010年11月24日(水)　18:30〜20:00　キャンパスプラザ京都　役員室

【報告事項】

1. 第6回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第2回京都FD開発推進センター会議・第6回FD連携運営委員会(合同会議)議事録確認

【検討事項】

3. 第8回京都FDer塾報告書について
4. 第9回京都FDer塾ポスターセッション進捗状況および当日運営について
5. FDer養成ワーキンググループ　2010年度活動記録について
6. 第2回FDセミナー(事業最終報告会)の報告内容について

第8回FDer養成WG

2011年1月19日(水)　18:30〜20:00　キャンパスプラザ京都　役員室

【報告事項】

1. 第7回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第7回FD連携運営委員会議事録確認

【検討事項】

3. 第8回京都FDer塾報告書について
4. 第9回京都FDer塾(ポスターセッション)報告書について
5. 第2回FDセミナー(事業最終報告会)の報告内容について
6. FDQAについて

第9回FDer養成WG

2011年3月25日(金)　18:30〜20:00　キャンパスプラザ京都　役員室

【報告事項】

1. 第8回FDer養成WG記録、他WG進捗状況報告
2. 第8回、第9回FD連携運営委員会議事録確認
3. 第3回京都FD開発推進センター会議・第10回FD連携運営委員会(合同会議)議事録確認

【検討事項】

4. 2011年度FDer塾および京都FD執行部塾の方向性について

第4回　京都FDer塾

【開　催　日】　2010年5月24日（月）　18:00～20:00

【場　　　所】　池坊短期大学　洗心館　第1会議室

【テ　ー　マ】　「授業公開」成功法を考えよう！
～組織的な取組にするために～

【受講者数】　25名

【プログラム】　話題提供：村上正行氏　（京都外国語大学　マルチメディア教育研究センター　准教授）
松本真治氏　（佛教大学　文学部　准教授）

ワークショップ：

①グループワーク

課題1. 授業公開の取り組みで、難しいと思われる点を考える。

課題2. 授業公開の参加者（見学者）を増やすためのアイデアを考える。

②発表（グループごとの成果発表）

村上正行氏

◆　開催報告（まとめ）

今年度の「京都FDer塾」はFaculty Developerの養成に重点を置き、事例紹介による答えの提供ではなく、課題を解決するプロセスを通してFaculty Developerとしてのスキル習得を目指します。

今回は「授業公開」をいかに成功させるか、その方法を考えるという課題でした。授業公開を組織的に行うにあたっては、京都外国語大学、佛教大学からの報告や各テーブルでの議論にも出てきたとおり、様々な解決すべき問題があります。①他人の授業や他の分野の授業には興味はない、また、自分の授業を他者に見せるこ

松本真治氏

とへの抵抗感といった意識の問題があります。②逆に、授業公開に行きたくても業務や授業の都合で行けないといった物理的な問題もあるでしょう。③そして根本的な問題ですが、授業公開を実際にどのように効果的に活用することができるのかということが考えられます。

今回の塾を通して新たに気づいたことが二つあります。一つは授業を公開にしなくてもよいという理由がどこにあるのだろうかという点です。昨今は「説明責任」が重要視されていますが、大学教育の根本である授業が非公開ということでは、やはり「説明責任」という点では許されないのではないでしょうか。どのような授業を行っているかは、当然公開されてしかるべきでしょう。まずこの意識改革が必要だと思われます。

もう一つは、せっかく18大学で連携しているわけですから、連携大学間で授業公開をすることはできないものでしょうか。自分の大学では物理的に見ることのできない科目の授業を他大学で見ることができ、その意味での効果が期待できます。また、同僚がお互いの授業を参観しあうのがはばかられる場合でも、他大学の授業であれば、気がねなしに見ることができるのではないでしょうか。

効果的な運用についての名案があるわけではありませんが、少なくとも教師が「良い授業をしたい」と思っている限りは、授業公開がまったく無意味な結果に終わることはないでしょう（そうでないとすれば、むしろ原因は別のところにあるのでは）。

話題提供者：松本真治氏

◆ グループワーク報告

Aグループ（ファシリテーター：平山弓月氏）

今回のテーマが「授業参観の成功法を考える」である事から、まず各大学での取り組み状況について意見交換をおこなった。

池坊短期大学では授業参観ウィークを設け、全教職員を対象に実施しているが参加者数は伸びず、制度化はされているものの成果につながっていないことが報告された。

次に京都光華女子大学からは、現在「授業参観」は制度化されておらず、各教員の判断で個々に実施しているレベルであり、今後組織的に授業参観を実施することを検討していることが報告された。

佛教大学では、昨年、一昨年と実施していたが、参加者がほとんど無い状況なので、学内的に開催方法を抜本的に見直すか廃止してはどうか、という意見が出されている。

最後に種智院大学においては、現在授業参観は実施していない事が報告された。

次に各大学で授業参観が、FDの取り組みとして活性化しない理由について意見交換をおこなった。

⇒その時出された意見をまとめると

- 教員が授業を見学する場合、申込み手続きや報告書の作成等の負担が大きいのではないか。
- 一番中立な立場である職員も参加してはどうか。見られる教員からすれば、利害関係のある同僚や上司の先生より、その評価を素直に受け入れられる。
- 学科長や主任、FD委員などが参観してきた場合、「評価されているのではないか?」といった恐怖感を持つからではないか。

などの意見が出された。

⇒種々議論を重ね、授業参観が成功する鍵は、

①現行の授業参観は目的も不明確であり、「観る側」と「観られる側」のどちらが主役かも示されておらず、そのプログラム自体が曖昧である。

まず、開催の目的・対象を明確に企画することが重要である。

②手続きや報告書の作成など煩雑な手続きを必要とするのであれば、多忙な教員は参加しない。

教員がもっと気軽に参加できるような制度にすべきである。

との結論に至った。

Bグループ（ファシリテーター：榎本正明氏）

授業公開の在り方として、そもそも大学の講義は公開されているもので、誰もが自由に聴講し、廊下から見聞きできるものであり、敢えて大上段に構えて公開を行うべきものかを中心に議論した。

◎演習などの一部の非公開授業を除き、教員同士がすべての授業を自由に聴講できる体制ができれば良いのではないか。

◎教員はFDの名の下で授業の検討・改善に忙殺され、授業公開を準備するまでの余裕がない。自分の授業をチェックしてもらったり、他人の授業を参考にさせてもらう必要はある。

◎シラバス・カリキュラム調整のためにも授業公開は必要である。

◎非常勤講師の授業公開、授業聴講も検討する必要がある。

◎公式の授業公開となると、担当教員や学生も緊張し、通常の授業ができない恐れもあり、客観的資料とならないのではないか。

◎さりげなく公開された授業の方が、通常授業の内実を把握できる。

◎佛教大学の松本先生の発表からヒントを得て、自分の授業をビデオ収録してもらい、先ず自分だけで見て自己評価・分析・改善をする経験を経て、収録ビデオ公開、授業公開へと移行する方法はどうか。

Cグループ（ファシリテーター：村上正行氏）

Cグループのディスカッションは、教員2名、職員2名で行われた。1名の教員は授業公開を取り組んでいる大学に所属しており、職員2名はどちらも今年度からFD担当の職についたところであった。このような状況から教員の経験に基づく意見、職員の大学人としての素朴、率直な意見を中心に議論が展開された。

問題点として、

・時間的な制約によって授業に行けない（見に行きたい授業の時に空いていない、忙しい）
・意見を言いにくい
・情報共有がうまく行われない
・教員にとって公開授業を行うメリットはなにか
・授業公開に向く内容、向かない内容があるのでは

といった点があげられた。

特に内容については、理系の専門基礎科目や初年次教育などスキルに近い内容のもの、ある程度統一された内

容のものなどは実施しやすいと思われるが、人文科学系（特に専門科目）などは授業内容に解釈が含まれることもあり、なかなか難しい、といった意見が出された。

解決策については、十分議論できなかったが、
・少人数の教員で始めてみる
・公開されたあとの情報共有の仕組みを考える
・仲間同士で公開授業を実践する際の支援を行う
といった意見が出された。

大規模ではなく、仲間や学科単位など小さなコミュニティで授業公開を行うことから始めることが重要なのではないか、という結論となった。

Dグループ（ファシリテーター：深野政之）

Dグループのディスカッションは、教員4名、研究員1名で行われた。

授業公開の取り組みで難しいと思われる点を出し合ったところ、以下のような意見が出された。

1.（授業公開以前に授業改善･FDそのものに対する関心が薄い）
・授業改善に関心のない教員がいる。
・そもそも学内のFDはFD委員以外への広がりがなく、授業公開以前の問題。
2. 授業公開することの意味、利点、必要性を理解してもらうこと。
3. 強制力がないと参加（見学）しない人がいる。
4.（授業公開が普通のことだという意識をもってもらう）
S大学の場合、学長が「先生方の授業を参観させてもらいます」と教授会で宣言した。
5. 時間が合わない。
6. 公開する教員の抵抗感。
公開する教員をいかに増やすかを考えることが必要。
7.（授業者と見学者の人間関係）
公開授業をする先生が、他学部等のよく知らない先生だと見学に行きにくい。反面全く知らない非常勤の先生だと、むしろ行きやすいかもしれない。
8.（その他）
・15回授業のうちの1回だけを見学して、その授業の流れや目的を理解できるのか。
・授業公開によって学生の様子がいつもと変わってしまい、普段の授業の様子を見てもらえない、ということはないか。

次に授業公開の参加者（見学者）を増やすためのアイデアを出し合ったところ、以下のようなアイデアと意見が出された。（番号は前問の番号に対応している）

2. ・取り組みの意義の共有化。
 ・評価の高い授業を公開して、それを見学すると役に立つことをアピールする。
 ・公開した後の評価・フィードバック
 ・公開のポイントを絞る。特に、授業の方法・ツールなど。例えば、パワーポイント、大講義での学生参加。
 ・授業改善の実例ビデオ（短時間のもの）を教授会などで強制的に見せると、自分の授業を改善する必要性を感じる人が増えるのではないか。
3. ・授業公開を含め、FD活動への年間を通じての参加を各教員の義務とする（年間目標・年間計画の評価など）。
 ・授業見学後のレポート提出を義務づける（提出させた後の扱いをどうするかは決めがたいが）。
4. FDとしての公開ではないが、受験生向け（学校見学に来た高校生や保護者など）に日常の授業を見学可能にする。授業を見られることに対する教員の敷居を低くする方法になる。
5. ・時間が合わない場合、ビデオを撮ったものを公開する。
 ・より多くの教員が参加出来る時間の設定。
 ・ビデオ収録して編集する。
6. 公開に抵抗がある教員に理解を求めるために、集団的取り組みを行う。
7. ・学科・研究室単位で相互参観。公開教員と参観教員の人間関係。
 ・小グループでの授業検討会
8. 授業についてのスーパーバイザーを付ける。他の授業にも普遍化できる内容になる。

⇒種々議論を重ねた結果、参観授業をする側と参観する側の両方への負担軽減策と抵抗感の除去が必要であること、学科単位など身近な小グループでの取り組みが有効であること、の2点については概ね賛同が得られた。

◆ アンケート結果

回答者数 ／ 13名

Q1 職種

教員 ／ 8名 ・ 職員 ／ 5名

Q2 この企画を何で知りましたか？ （複数回答可）

FD連携プロジェクトからの案内	7名
学内のHP／メールでの案内	2名
学内の会議での案内	1名
学内配布のチラシ	1名
FD担当部署からの案内	1名
その他	2名

Q3　参加したきっかけは?　（複数回答可）

興味があったから	8名
FD担当者なので	5名
上司のすすめ	2名
その他	4名

Q4　京都外国語大学（村上正行氏）の内容について満足しましたか?

たいへん満足した	6名
満足した	5名
やや不満である	1名
無回答	1名

Q5　「やや不満」、「不満」と回答した方のみご回答ください。

参考になるところ・再確認できたところは色々あったが、実際に授業公開を行ったことのある大学の人の話を聴きたかった（実際には人選が難しいと思いつつ書いています。ご容赦ください。）。

Q6　佛教大学（松本真治氏）の内容について満足しましたか?

たいへん満足した	5名
満足した	7名
無回答	1名

Q7　「やや不満」、「不満」と回答した方のみご回答ください。

「満足した」と回答したが書きます。具体的な取り組みが聴けた。特に授業公開したゼミのビデオを見ることが出来たのは有意義であった。

Q8　ワークショップの内容は、今後のFD活動に役立つと思いましたか?

とても有益だった	5名
ある程度有益だった	8名

Q9　今回参加して得た「有益な情報」「体験」を教えてください。

・授業参観等のFD活動において、職員も積極的に参加すべきだとの意見が聞けたこと。
・FDの一環であるから授業公開が必要だという単純なことではなく、なぜ授業公開するのか?　その「意義・意味」について考えるきっかけ（ホンの少しですが）を貰えた。
・課題1と課題2　特に課題2についてさまざまな意見を伺うことができたので。
・授業公開による授業改善という文言自体が、授業に難があるということが前提となっているのではないか、と危惧される点
・授業公開自体を文化として捉え、そのコミュニティを徐々に広げていくという点
・公開する側、見学に行く側両方の“メリット”と“目的”を明示する点
・効果の検証が困難な点
・教員の視点や職員に期待される部分が把握できよかった。

・自分が思いついていなかった他の先生のアイデアを知ることができた。学長が授業参観をすると宣言したという話は印象に残った。
・授業公開の意味を再確認することができた。
・他大学の状況を知ることができたこと
・「教員」が、自分の授業に対して意見を求めているという点。
・教員の性質に関するアドバイス等
・他学の教員、職員の意見を直接聞き、FDの方向性を確認できたこと。
・授業公開が問題となるのは、授業は非公開なものであるという前提に立っているが、実は授業は元々非公開なものではないのではないかという発想を得た。現在の授業公開に関する取組は少し考え方が大げさ過ぎるのではないか。
・授業公開を行うにあたっての留意点や、公開授業をされた経験談を伺えたこと。

Q10　全体として今回の京都FDer塾に満足しましたか?

とても満足した	4名
まあ満足した	8名
あまり満足しなかった	1名

Q11　今回のような小規模の勉強会の場合に、有効だと思う開催形態をお答えください。

講演会のみ	1名
講演形式+ワークショップ (グループディスカッション)	11名
ワークショップ	1名

Q12　学内でFDを推進していくうえで、現在、学内での推進が難しいと感じている取り組みや、今後、ディスカッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えて下さい。

授業評価アンケートの活用	3名
教員研修会	2名
教員評価	1名
新任教員研修	1名
管理職FD研修	1名
授業コンサルテーション	2名
学生参画型FD	1名

Q13　今回の感想や、今後取り扱って欲しいテーマ、話を聞いてみたい講師等ご自由にご記入ください。

・身体や精神に「困難さ」を抱えた学生に対するサポートについて
・東京学芸大学　成田喜一郎氏。学生の主体的な学習をひきだすうえでの授業構成
・FD活動において、非常勤講師への対応、理解、協力をどの様に推し進めているのか知りたい。
・新しい参加者もあったが、講師と参加者の多くを見ていると、内輪でやっている感じがどうしてもしてしまう(次回、所属大学からは新しい人が参加するように努力してみます)。

・グループディスカッションのやり方がやや不徹底で、グループディスカッションを取り入れたことの成果・意味が十分にあったとは言いにくい。
・7月に実施される「黒板の使い方、話し方」のセミナーは大変楽しみです。
このような授業テクニック（PowerPointの有効的な利用方法や、携帯電話の授業への活用方法など）のセミナーを希望します。
・今回の講演の内容は、私の中で「ボトムアップ型」と位置づけたのですが、「トップダウン型」FD活動の状況・現状等を聞いてみたいと感じております。
・ワークショップに時間的ゆとりが欲しい。講演はお一人で良いのではないか。
・他学の取り組みの事例。うまくいっていることよりも、苦労していること、失敗したことも聞きたい。

第5回　京都FDer塾

【開　催　日】　2010年6月28日（月）　18:00～20:00

【場　　　所】　池坊短期大学　洗心館　第1会議室

【テ　ー　マ】　授業活性化へのヒント～ファシリテーションとは～
第1部「京都産業大学　F工房沿革」
第2部「実際の授業を題材にした支援案作成のワークショップ」

【受講者数】　10名（教員7名、職員3名）

【講　　　師】　鬼塚哲郎氏　（京都産業大学　文化学部　教授
キャリア教育研究開発センター運営委員）
北村広美氏　（京都産業大学　全学共通教育センター
准教授　F工房担当コーディネーター）

◆　開催報告（まとめ）

6月28日の第5回京都FDer塾では、京都産業大学F工房の鬼塚哲郎教授、北村広美准教授、さらにF工房職員と数名のF工房サポート学生を招いて、F工房の取組みを学ぶとともに、その授業改善への適用例を実地に体験した。

まず、第1部では鬼塚教授が「京都産業大学F工房沿革」と題して約30分の講演を行い、F工房設立の経緯と運営方法を説明した上で質疑応答が行われた。F工房のFは「ファシリテーション」の頭文字であり、この工房の主目的はファシリテーションの有効活用により授業その他における学生支援を行うものであることが説明された。第2部では北村准教授の指導のもとに、F工房の職員やサポート学生の協力を得て、「実際の授業を題材にした支援案作成のワークショップ」が実施された。参加者たちはそれぞれにファシリテーションの実際を体験し、各人の授業運営に活かすノウハウを会得したようである。　〈河原地英武氏〉

鬼塚哲郎氏

◆　グループワーク報告

我々のワークショップでは、京都光華女子大学の森井先生の『異文化交流』という講義を題材として、授業運営改善案を考えた。

方法としては、京都産業大学F工房の学生がファシリテーターとなって、まず森井先生から講義の概要とその問題点を聞き、グループの参加者が意見交換を行った。当初、議論は多岐に亘ったが、京都光華女子大学の阿部先生の提言により、森井先生の目標（講義とグループワークを織り交ぜた授業形態）を伺い、それに沿った意見を各自が付箋に書き、それをホワイトボードに関連性を考慮しつつ分類しながら貼り付け、意見交換を行った。最終的に結論に値するものに到達する時間がなかったのが残念だった。　〈榎本正明氏〉

◆ アンケート結果

回答者数　／　8名

Q1　職種

教員　／　6名　・　職員　／　2名

Q2　この企画を何で知りましたか?　（複数回答可）

FD連携プロジェクトからの案内	2名
学内のHP／メールでの案内	5名
学内の会議での案内	1名
京都FD開発推進センターのHP	1名
その他	1名

Q3　参加したきっかけは?　（複数回答可）

興味があったから	5名
FD担当者なので	1名
上司のすすめ	1名
その他	2名

Q4　「京都産業大学F工房沿革」（鬼塚哲郎氏）の内容について満足しましたか?

満足した	7名
やや不満である	1名

Q5　「やや不満」、「不満」と回答した方のみご回答ください。

その理由はなんですか?

・お話そのものは面白いですが、学生の有能感を生みだすことと、ファシリテータがどのように結びつくのかがわかりにくかったです。

Q6　「実際の授業を題材にした支援案作成のワークショップ」（北村広美氏）の内容について満足しましたか?

たいへん満足した	1名
満足した	4名
やや不満	2名
無回答	1名

Q7　「やや不満」、「不満」と回答した方のみご回答ください。

・北村先生のお話自体は大変興味深かったのですが、ファシリテーターの育成が不十分だと感じました。

・アットホームな雰囲気のもと、話し合いができたのはとてもよかったです。けれども時間がたらず、内容を深めることができないまま、ファシリテーターの積極的関与によって作業が進んでしまった感じがします。このテーマであれば、授業改善案を各自提案する前に、方向づけを絞る必要があったと思います。

Q8　ワークショップの内容は、今後のFD活動に役立つと思いましたか?

とても有益だった	1名
ある程度有益だった	5名
あまり有益でなかった	2名

Q9　「とても有益」、「ある程度有益」と回答した方のみご回答ください。
今回参加して得た「有益な情報」「体験」を教えてください。

- 他学の先生方の意見を聞くことができるよい機会だった。自分自身の考え方も整理できた。学生ファシリテーターの活動を直接体験できた。
- 近年の薬学部は初年次教育に注目が集まっています。今回色々な学部の先生方の話をお伺いする事ができ、今後の本学での初年次教育の在り方に関して、考えることが出来ました。
- 一部の方から意見が集中する場合のファシリテーションの方法について検討する材料を頂いたこと。
- 自分の担当している科目(講義)を取り上げていただきたき、授業目標の具体化、各回授業のテーマの充実化、授業方法の改善(学生参加型を取り入れること)に向けて有益なご意見が出て、今後の授業に向けて(個人的には)大変参考になった。
- ポストイットを利用する方法があることを知り、今後の授業で使えることを知ることができた。
- 授業の組み立て方に関し、先生によって大きく考え方が異なることを再認識した。
- 短い時間で討論することの難しさを知った。またファシリテータの役割の難しさも推し量ることができた。

Q10　「あまり有益でなかった」「全く有益でなかった」と回答した方のみご回答ください。

- 私自身の理解不足のために「あまり有益でなかった」となりました。初めの動機との関連がもう少し明確化していたらよかったです。
- 参加者からの意見が活発に出すぎた(?)せいか、ファシリテーターの役割が分かりづらかった。

Q11　全体として今回の京都FDer塾に満足しましたか?

とても満足した	1名
まあ満足した	7名

Q12　今回のような小規模の勉強会の場合に、有効だと思う開催形態をお答えください。

講演形式+ワークショップ (グループディスカッション)	7名

Q13　学内でFDを推進していくうえで、現在、学内での推進が難しいと感じている取り組みや、今後、ディスカッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

授業評価アンケートの活用	2名
教員研修会	1名
ICTの活用	1名
FDネットワークの構築	1名
授業コンサルテーション	2名
学生参画型FD	1名

Q14　今回の感想や、今後取り扱って欲しいテーマ、話を聞いてみたい講師等ご自由にご記入ください。

- ディスカッションメンバーの問題意識、背景の共通理解には少し時間が不足だった。もう少し時間があれば更に深い議論ができた気がする（これからというところで時間がきてしまった）。いろいろなことを考えさせられる貴重な場を提供いただきありがとうございました。
- 学生の出席率を上げるためには?
- 早くから医療人としての自覚を持ってもらうためには?
- 授業のコンサルテーション、学生参加型FDについてもっと知りたい。
- ファシリテーションという方法があることを初めて知った。十分理解できたとは言えないが、振り返りをする点など授業改善に役立つと思う。配布資料をもう一度読ませていただいて、もっとよくこの方法を知りたいと思っている。

ワークショップの様子

第1回 FDセミナー & 第6回 京都FDer塾

【開 催 日】　2010年7月31日(土)　15:00～17:30
【場　　所】　大谷大学　1号館　1209教室
【テ ー マ】　授業技術を考える　～多人数授業の工夫～
【講　　師】　梶川裕司氏　(京都外国語大学　外国語学部　教授・マルチメディア教育研究センター長)
　　　　　　　宮田　仁氏　(滋賀大学　教育学部　教育実践総合センター　教授)
【コーディネーター】村上正行氏　(京都外国語大学　マルチメディア教育研究センター　准教授)
【参 加 者】　151名
　　　　　　　(内訳:教員118名、職員31名、学生1名、会社員1名)

◆　開催報告(まとめ)

今回のFDセミナーは「授業技術」をテーマに、梶川氏からは黒板の使い方をはじめとする多人数授業における講義の手法、宮田氏からは携帯電話等のICTを使った双方向型授業の実践について、両氏の理論・実践例の報告をしていただいた。

また、大学の授業には「内発的動機づけ」が最も重要であるという提言があり、参加者のアンケートにおいても同調する意見が多かったのは印象的であった。

村上氏のコーディネートによるディスカッションでは、滋賀大学が導入する携帯電話対応コメントカードシステムの実演紹介や、3～4人の少人数グループディスカッションの能動的な質疑応答に向けた仕掛けもあり、151名の参加者からの多くの意見を聴取したにも関わらず、効率的な応答が可能となり、盛況のうちに終えることができた。

◆　ディスカッションの意見内容

★梶川氏への質問

●板書の方法、出席の取り方について

・黒板の使い方について、もう少し考え方を知りたいです。とくにパワーポイントと併用するとすればどういうことに注意をすれば良いでしょうか。

・450人の講義で黒板を利用するとき、全員が黒板の字などが見えるのでしょうか。どのようにして黒板を使われているのですか。

・板書のメリットをお話されていましたが、ノートをとるだけで先生の話を聞かない学生がいるのではないでしょうか。どう対処されていますか。

・梶川先生の出欠カードのはんこを押すタイミングはいつですか?

・出席のとり方について、スタンプ方式を紹介してくださったが、出席をとるのに時間がかかるのではないか。どのようにされているのですか。授業の途中で入ってくる学生や途中で抜ける学生もいると思います。そのような学生の対応はどうされていますか。

【回答】

板書については後列の受講生が見える字の大きさ、パワーポイントではポイントに気を遣っている。きれいな字ならなおよいが、少なくとも丁寧に板書する心掛けをしている。板書については書き写す必要がある場所と、書き写す必要がない場所を分ける工夫をしている。色分けは基本的にせず、ホワイトを使用している。

授業に遅刻または早退する学生については、特に気にしていない。それよりも受講している学生に集中している。「雑談」はしないといっていたが、「雑談」とは授業にまったく関係のない話のことであり、学生の知的好奇心を沸かせるようなものは雑談と考えていない。出席スタンプは端の学生から順番に学生が任意で捺すことにしている。出席した学生が欠席している学生のスタンプを捺すことが考えられるが、特に規制しない。講義ごとにスタンプの種類を変更する工夫はしている。さらに評価に関して、3分の2以上の出席を基準として、出席点を加算することにしている。

黒板とパワーポイントの併用については、これまで動画の閲覧以外にはパワーポイントは使用していない。パワーポイントは円滑な授業に効果的であるが、画面の移り変わりが早く、学習理解に直結しがたいと考えられるため、その場合はレジュメを作成することで学習理解が深まるような工夫をしている。

多人数授業ならではのメリットについては、互いの学生が意見を出し合い共有することで、自分の意見に論理性が欠けていることに気づいたりできる「きっかけ」の場が提供されることに価値があると考える。

★宮田氏への質問

●パケット使用料について

・学生は皆、パケ放題などに加入しているのでしょうか?

・携帯からのアクセスにはパケット通信料がかかると思うのですが、それに対して学生から批判等は出ませんか?

・学生から通信費に関するクレームはありましたか。またその際はどのように対応されましたか。

【回答】

滋賀大学では、全学共通教養科目でこのシステムを利用している。

経済学部が彦根、教育学部が石山にあり、合計400名の学生を対象に遠隔講義システムを利用し、テレビ会議機能を使用して講義を行い、ケータイシステムを利用し質問を受け付けている（彦根の経済学部生から石山の教育学部で講義する宮田氏のもとへ質問が送られる）。教育学部では、約9割の学生が携帯を使用して受講することに抵抗がないと回答している。大学側でもパケット圧縮をサーバーにかけて、800文字あたり1.9円の低料金にて、提供できるように工夫している（仮に10回の送信で19円）。受講生は、19～40円程度の負担なら抵抗なく受講できると回答している。また学生自身が携帯会社の提供する所謂「パケ放題」等のサービスに加入することで、学生負担は軽減されている。しかしながら経済学部生の中には、授業料を支払っているのに受講の際にそのような料金がかかることに抵抗を感じる学生もある。そのような学生にはPDAやSONY Play Station等を貸出用として、常に5台準備して、無線LANを経由して質問できるように工夫している。経済学部では、ほぼ毎回5台貸し出しているが、教育学部では携帯のバッテリー切れ、または忘れた等の理由がない限り、ほとんど貸出履歴がない。

●システム導入に必要な経費や知識について

・積極的に情報機器を授業等で活用していきたいと考えておりますが、具体的にどのようにしてその知識や技術を習得したらよいのか分かりません。よいお知恵があればお教え下さい。

・宮田先生の方法は非常に興味深かったのですが、仮に導入する場合、コスト（経費）はどの程度かかるのでしょうか。他大学導入の事例をお聞かせください。

【回答】

機材については、大学で準備するものは特にない。大学のwebサーバーにシステムを導入するだけでよい。

利用する教員の知識については、滋賀大学においては38科目の講義で導入するために、4月と9月に講習会を実施している。また、オーサリングシステムを構築し、ワープロが使用できれば簡単に学生への発問ができるようになっている。その他にe-learning推進室から教務補佐員と事務補佐員を、経済学部と教育学部へ各2名をパートタイムにて採用することで教員サポートにあてていた。ところが、人件費は補助金によって負担していたが、2010年3月に補助金事業期間が終了し、現在は主に院生によってサポートすることになっている。機材導入費は特に必要ないが、システムの運用をサポートする人件費の確保は必要である。

●教育効果について

・仮に9割の学生に興味を持たせたとしても、基礎学力が不足していたり、遅刻や私語をする学生にどのように対応すべきか。

・パソコン教室で同様のe-learningシステムを使用した授業と、このケータイシステムの授業との教育効果や運用面での違い（メリット、デメリット）は何だとお考えでしょうか?

【回答】

基礎学力の足りない学生はいるが、知的好奇心をくすぐる題材と発問を工夫することで、かなりの学生の興味を授業に向けさせることができる。

発問については、最初から自由記述の発問にせず、選択制にするなどの工夫をしている（たとえば圧縮容量の発問では、元の容量より1.大きいか、2.小さいか、3.同じなのか?）。その後、4択、5択と学生の力量を図りながら工夫している（最後の授業で自由記述）。また企業サイトを題材にとりいれることも有効である。

パソコンによるe-learningと携帯を利用した講義との違いは、パソコン教室の場合は、パソコンが必要・持ち歩きが必要・ネット環境が必要・サイトにアクセスするまで電源入力から3分以上の時間がかかるといった不便が生じ、それを理由に学習意欲をなくす傾向があるが、ケータイにおいては通学等の3分程度の空き時間にポートフォリオを見ることが可能であり、所謂、隙間時間を埋める学習ができることが特徴である。

●学力レベルの差について

・優秀な学生のコメントだけ取り上げられるのではないか。学生の学力レベルに差がある場合はどのような対応をすればいいのか。

・授業運営を円滑に行うために、優秀な学生のコメントが中心に抽出されたものになると思われます。多様な学生（とくに学力低下）の場合は、切り捨てられてしまわないかと思うのですが、実際の授業ではそのような学生はどのように授業に参加しているのでしょうか。また、教育してフォローしていらっしゃるのでしょうか。（誤字、脱字、文章表現力の低い学生を含む）

・「分かりません」の回答をどう解釈されていますか。

【回答】

何を発問されているのかわからない場合と、答えがわからない場合の2通りがあることを認識している。学力が低い学生は圧倒的に前者が多い傾向にある。わからないことを肯定的に伝えることで、答えにつながるアイデアや疑問について、何か書くように意図づける工夫をしている。

優秀な解答（1割程度）に対しては、わざと紹介しない。不完全な解答例を取り上げることで、学生のインタラクティブな意見交換によって、正しい答えに導く工夫をしている。おもに紹介する解答例は、中間レベルを対象にしている。

★梶川氏、宮田氏への質問

●効果的な発問の方法について

・発問力のある教員とそうでない教員がいると思うが、どのように工夫すればよいか。

【回答】

「YES」or「NO」の2択から「5W1H」の発問に変えていく工夫をしている。なぜ「YES」なのか、どのような場面で「NO」なのか、というふうに発問する。

その他に学生同士が教え合う「Teaching Others」を用い、学生の学習意欲向上を促す工夫もときどきしている。（宮田　仁氏）

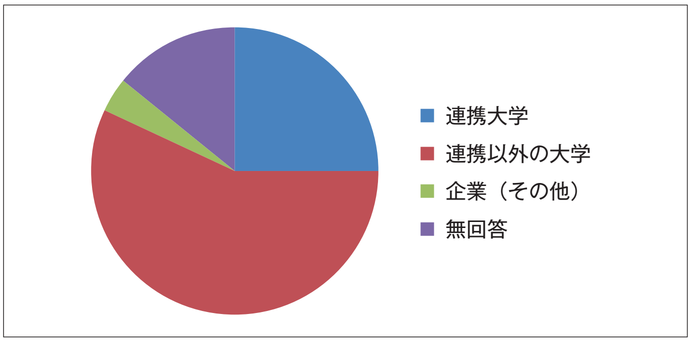
●発問しない理由について

多人数の授業において、あてられる学生とあてられない学生に不公平感が生ずる可能性がある。また、ある一部（前列に座る学生）の学生に偏った講義体系になりがちとなり、その他の学生に対応できないこともある。また、あてられた後はその後の授業に集中しない傾向もある。（梶川裕司氏）

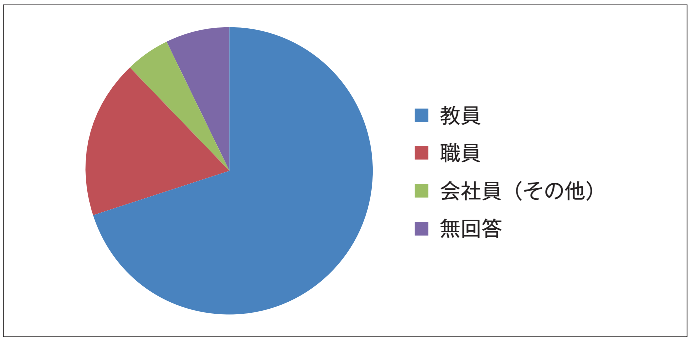
◆　アンケート結果

回答者数　／　100名

Q1　所属種別	連携大学	／　25名	・	その他の大学	／	57名
	企業（その他）	／　4名	・	無回答	／	14名



職　種	教員	／　70名	・	職員	／	18名
	会社員（その他）	／　5名	・	無回答	／	7名



Q2　今回のセミナーはどのようにしてお知りになりましたか。（複数回答可）

所属大学･団体からの案内	35名
京都FD開発推進センターのHP	6名
京都FD開発推進センターからの案内メール	54名
京都FD開発推進センターからの案内チラシ	5名
その他	7名

・他大学教員が個人で作成しているブログ
・学内の回覧
・asagaoメーリングリストからの案内
・本学職員からの紹介
・ココロマナビさんの大学職員ブログ

Q3　梶川裕司氏のご講演の内容に満足しましたか。

4. 満足した	69名
3. ↑	29名
2. ↓	1名
1. 不満である	0名
（無回答）	1名

梶川裕司氏の報告へのご感想を記入して下さい。（自由記述内容）
満足度【4】梶川裕司氏の報告
基礎的な考え方は理解できました
黒板使用の再確認
黒板は優れた教具というのは目からうろこでした。大学教員のほとんどが教職免許を持っていない中、基礎的なことから再確認させてもらう、とてもいい機会でした。
私語の問題で原因が一方的な講義とか、ホワイトボードが見えにくい等で、本学で旬な話題で非常に参考になりました。
教育心理学の観点から丁寧にご説明頂いたので大変わかりやすかったです。個人的には先生が実際に授業でされている取組について、もう少しじっくりお話を伺いたかったです。
黒板、エコチョーク、レジュメ、動画の有用性、同意します。パワーポイントもどのように使ってよいのか全く分かりません。講義のベースが似ているように感じましたので大変参考になりました。
所業の工夫は今まで手さぐりで進めていましたが、方向がやっと見えたように思えます。
もっと時間をとってケースバイケースのお話が聞きたかったです。
大学の授業は、内発的動機付けの喚起だけ（知識の内容はどうでもいい）ということには感銘を受けました。そして、雑談はしないというのも勇気づけられました。
黒板の有用性について改めて認識できた。
私の担当している科目は講義形式ではないのですが、黒板の使い方など、大変参考になりました。
今までパワーポイントを主に使っていましたが、黒板の使用も考えていきたいと思った。
黒板を使った講義形式については、批判的な意見が一般的に多いように思うが、先生の報告にあったような工夫によって魅力的な授業に変わるのだと感じた。
板書が注目をあつめる行動であるということが実感的にわかりました。ただ、学生が書きながら、聞きながらということができないことも多いので、書く時間と聞く時間を作らないといけないのでしょうか。
大変参考になった。授業内容を如何に学生の脳裏に定着させるかに苦心する身にとって、工夫の余地があることが分かり、励みになります。
とてもわかりやすく、“温故知新”の授業方法に大変関心しました。とくに板書の仕方は大変参考になりました。今後の参考にさせていただきます。
板書で流れを作る方法と知識の枠組を示す方法が参考になった。
パワーポイント資料も見やすく、論点も明確でわかりやすい話でした。
実際の講義に役立つ内容ですぐに取り入れることができそうである。
今後の授業の参考になった。
講義に「板書」というゆっくり言葉がしみこむ感じがとても良い。パワーポイントは相当の知識や処理速度が必要ですね。
課題を70コも出されるというのに圧倒されました。
板書の重要性を再認識しました。
講義の有効性を今一度考え直す機会となりました。
早口でいそがしかったが、ポイントは分かった。
経験から感じていた事を系統的に説明していただき、今後の参考になりました。
90分間の時間を密度の高いものにするため、どのように工夫されているか大変参考になりました。
とても勉強になりました。参考になりました。有難うございました。
授業の真の目的は、知的好奇心の喚起。同感です。今後、小生の講義では喚起できるように工夫したいと思います。
宮田先生のご講演の内容はすぐには利用できないですが、梶川先生のお話の内容はひとつひとつ、すぐに役立つように感じました。

理論やポリシーに基づいた授業方法や改善が必要であることがわかりました。これは、職員の研修や学生指導にも役立つと感じました。ありがとうございました。
教職課程の授業で言われる「授業の基本」どおりのご指摘で、しかもそれを実践されている点に敬服致しました。
「内発的動機づけ」という言葉で、今までなんとなく「おもしろくないとみんなついてこないよね」と思っていたことがスッキリしました。「学び方の学習」とか自分たちが学生の時に知らずに身についていたようなことを学ぶようにもっていく必要があるんだなと思いました。
黒板の使い方（法則性のある板書）が参考になりました。ついつい熱中してあちこちに書いてしまうので、ルールを決めておくのがよいと思いました。この頃黒板をホワイトボードに替える学校があり、正直困っています。
黒板の効用を見直した。講義とはこんなものとあきらめていたことが間違いだったと分かった。実際に授業に取り込むのは難しいが努力したい。
従来より私が感じていた「少人数教育礼讃」への疑念を晴らされた様に思います。また、経験的に把んでいた授業方法についても裏付けをいただいた様に感じ、自信を持てました。
板書の方法に関する内容は自分自身振り返る事が多いと感じました。私も板書を多用するのですが、自分の方法を思い返すに、興味を引く力に欠けていると思われます。以後参考にさせて頂こうと思います。
教員になって3年ですが、まともに教育心理学のことを勉強したことがないので、大変勉強になりました。心理を理解した上で授業を改善していくことの大切さを知りました。
内発的動機付けが大切だというのはわかっていましたが具体的にうまくできていなかったと思います。特に「客をいじる」など、やってはいけないことをいっぱいやっているということに気づきました。大変勉強になりました。
古典的な話になるのだと思われますが「デールの経験の円錐に学ぶ」が参考になりました。黒板の使い方に関しても、学生のことをあまり考えずに、思うがままに書くことが多いので、法則性を持たせて使用しなければと痛感しました。
教員歴がまだ浅くどのように多人数に対して授業を行っていけば良いか試行錯誤しておりましたが、梶川先生のお話を聞かせて頂き、板書の素晴らしさを再認識致しました。今、私はパワーポイントと板書の2方法で授業を行っておりますが、再度考えさせられる良い機会となりました。本日は、誠にありがとうございました。
板書の方がパワーポイントより優れている点が多いのは実感しているだけによく理解できました。そもそもパワーポイントを正しく使っていない人が多いため、そのようなことになる気もします。
・「板書の書き方に法則性をもたせる。」このような方法があることを知り、参考にしてみようと思った。 ・知的好奇心をかきたてる。さらに調べてみようと思わせることが大事であること…同感であるが、多数の教科をもち、さらに15回の講義のなかで1つでもそのような気をおこさせるのがむずかしい。 ・多くの課題を提示してその中から選ぶのは面白い。
黒板とチョークで充分教育効果の挙がる授業ができるということ、チョークの大きなメリットについての説明等、大変勇気づけられるご講演ありがとうございました。
内発的動機づけ喚起のためのレポート課題等、すぐにやってみようと思うアイデアが満載であると同時に講義の内容や仕方といった、より教育の確信にかかわる内容もあり、とても参考になりました。ありがとうございました。
FDで板書の大切さを強調して下さることに強く共感した。FDイコールPPTや最新機器の使用ではないと常々思うのだが、世の風潮からずれているのではないかと内心心配だった。「講義型」授業のメリットを声を大にしてFDの場で初めて聞けてこれもよかった。
板書について本学でも、字が見えないと問題になっていました。ヒントになりました。学生の動機づけ喚起が難しい課題だと思います。今日のご講演をヒントに大学で話し合いたいと思います。
学生参加型の欠点等について、とても共感しましたが、一方で授業を面白くさせるために講義のむつかしさには、いつもなやんでいます。黒板を使うのが、効果的ということについては、全くその通りと思います。
内発的動機づけの大切さが古くから主張されており、具体的な方策も示されていることを知ることができました。梶川先生の工夫が示されていましたが、分かりやすく参考になりました。どんなツールであれ、工夫を行おうとする気持ちが大切だと思いました。
教職課程の私の授業でも実践したいと思います。勉強になりました。毎日課題を出すということですが発見機会につながるような課題を出すポイントを教えていただきたいと思いました。

冒頭のお話の中で"温故知新"とおっしゃいましたが、例えば黒板という教育の中では不動の地位たるツールをもっと有効に使うことで学習・教育の質を高めることは可能だと思います。(それ程、大学の教員の板書には酷いものが多い。)もう少し講演時間を確保していただいて、可能な範囲で実例等を提示して説明してほしかったと思いました。
教育心理学が専門であるので講義において、その知見が活かされているように思われた。私自身、講義を行っているが、動機付けなど不十分であったと反省する点が多い。
講義型と参加型は対立項目ではないと感じています。参加型授業が増えると講義型も変化を迫られるのではないかと思います。
満足度【3】 梶川裕司氏の報告
基本的なこと(古典的ではあっても)が重要であることがよくわかった。心理学の原理がFDでも役立つ(効果がある)ことがわかった。
「教育学」を学んでいない私にとって、大変役に立ちました。出来れば、先生の実例をもう少しお聞きしたかったです。
板書の大切さを改めて認識した。1対1の質問をしない、という発想が新鮮だった。しかし、学生が「一方向」と感じないようにするためには教員の力量が問われると思われた。
「教育」の原点にもどり、板書と授業のみの形態での効果について考えさせられた。学力の剥落現象、実感しています。
講義の具体例をもう少し紹介いただけたらと思った。
黒板の使い方に対して、有用であった。
黒板の使い方等にもう少し時間をかけてほしいと思いました。
講義の復権は同感です。
基本的なスタンスは私とは異なりますが、説得力は感じました。
大学の講義(古いタイプ)の整理がされた。
出席カードなど、授業運営に資するツールについて教えていただき参考になりました。
後半部分、もう少し詳しく聞きたかった。しかし、参考になりました。授業に生かしたいと思います。
・知識の構造づくり　・Learn how to learn　心がけていますが難しいです。参考になりました。
PowerPointではなく黒板が良いという意見を初めて聞いたのでびっくりしました。
①何故、演習より講義の授業評価が高かったのか。その検証的なコメントをお聞きしたかった。 ②時間的な制約があり、消化不良の感はぬぐえなかった…残念である。
もう少し具体的、一コマの授業の目標とそれに向かってどう進めていくかなどをお聞きしたかった。

Q4　宮田　仁氏のご講演の内容に満足しましたか。

4. 満足した	64名
3. ↑	30名
2. ↓	5名
1. 不満である	0名
（無回答）	1名

宮田　仁氏の報告へのご感想を記入して下さい。（自由記述内容）
満足度【4】宮田　仁氏の報告
労力がかかりそうですが、大変参考になりました。
【プラス面】学生とのインタラクションの方法として素晴らしいと思う。授業のコンテンツ、学生への発問が決定的に重要だと思いました。先生のお話は、インタラクショナルデザインの考え方に従っていると思いました。
インタラクティブのツール、使えると良いのですが
道具の使い方が重要。・使わす方の意図、目的　・使わされる方の認識
初めて聞いた方法で、勉強になりました。発問や「分からない」への具体的ですぐトライできそうだと感じた。本学に持ち帰って"おためし"でも出来るように働きかけようと思います。
所属大学で今年導入したシステムで、一部類似した作業ができるようです。活用してみます。
双方向、リアルタイム、というものに漠然としたイメージしか持てずにいました。結局、普通の授業をしっかりすることの延長にあることが理解出来ました。
先生の力量で授業が左右されそうです。
興味深く拝聴しました。コメントカードのシステム、自分の講義でぜひ使ってみたいです。
先進的な取り組みを聞かせて頂いて、大変参考になりました。
内的動機を高めるという質問ということはとても参考になりました。学生が、「先に言っといてよ」という発言にいつもがっかりしていますので、物の考え方を導いていくということが、自分にとっての課題です。Mailに関しては、学生の方が高度な技をもっているので、ワクワクしました。出来る範囲で活用させて頂きたいと思います。ありがとうございました。
多人数授業で学生の個人の意見を瞬時に視覚的に全体で共有出来ることは、学生の興味を引き、それをもとに考える事が出来ると思った。思考力を高めることに繋がると思った。
コメントカードシステムに関して、大変興味を持って聞かせて頂いた。システムも素晴らしいが、JPEGの説明でされたように、学生に考えさせる設問が素晴らしいと思った。もし可能なら、システムを使わせていただければと思った。
発問の重要性を改めて気づかされた。
「機械はつかう人間によって」という言葉が胸にひびきました。
先生の授業の様子が手にとるように伝えられ、また何を大切にされているかもよく理解できた。
同時進行でフィードバックすることが、力量を要するので、進行や手続きに熟練しないと思った。
質問の仕方について参考になった。
クイズ形式の発問の仕方が上手。自由記述の発問は字数が大事。
シラバスが大事、という御言葉が印象的でした。
授業の組み立て、シラバスの大事さを改めて認識しました。
授業内容によっては、効果的な新たな授業方法だと思う。
先生のシステム開発・利用の意図が、事前に予想していたものと異なっていて、有意義な講習を受けることができました。
ICT利用の目的が良く理解できました。
自分の能力を超えていて実際には使えないと感じましたが、ねらいは明確に伝わってきました。

この手法は、授業コミュニケーションの活性化には、非常に役に立ち学生も楽しく学べると思います。さて、多くの大学でこのシステムを導入できるのか疑問です。
非常に講演慣れしている印象を受けました。内容的にも興味深く聞かせていただきました。知人の中にも同じような試みをしている人がおり、今の時代にはフィットするやり方だと思います。
非常におもしろいし、携帯の授業活用が広がっていることに感心した。大学の授業も、小中高校での授業方法と同じだと思った。教員の発問と学習者の内発を一番に考えられ、相互コミュニケーションを重視されていることを再認識した。（大村はまさんの言葉を実践か）
学生の授業に対する理解度を瞬時に把握し、それを授業中にフィードバックするやり方に納得しました。今後の授業運営で参考にさせていただきます。
授業改善は、教職員の改善意欲がやはり必要であることを再認識しました。ぜひ本学でもご講演いただく機会をお願いできればと思います。
機械ものには全くうといので、「すごーい!」とびっくりしました。
感想等を紙に書いてもらって、次の週にフィードバックしても忘れてしまっている学生も多いので、リアルタイムで集計でき、フィードバックできるのがよいと思いました。
他にも授業活用した授業支援システムは多いが、これらは根本の発想が違い新鮮に感じた。発問が最重要であることが分った。
設問の順に関するご説明は大変参考になりました。授業で自由記述を行わせる場合に生じる差に困惑していましたが、順に考えさせる方法はいいと思いました。
授業に携帯を有効活用する一例をご紹介頂き、ありがとうございました。先生のシステムを前向きに導入したいと考えております。
当大学にも導入したいシステムと感じました。使用方法の研修を受けたうえで、自分の授業でも使ってみたいと感じました。費用や導入方法などが疑問でしたが、質疑応答である程度解決しました。
携帯端末の使用でここまで学生を引きつけ、楽しませる授業が出来ることに大変驚き、又、新しい方法に感動致しました。今後の授業の参考にさせて頂きたいと思います。
「設問のしかたが重要である」に納得。ただ単発的なく、設問の深さをあらかじめ考えておく必要がある。
講義型の授業の中に知的好奇心を喚起するQとしての手段として携帯電話を使い、学生とのインタラクティブな情報交換で効果的な授業のPDCAサイクルを回しておられる事や、やはり板書・授業構成が基本であることがよく分かり、内容がよく理解できなかった者にとっても大変参考になりました。
あくまでツールであって、基本は講義の構成をしっかり考えることだ、ということを聞けてホッとした。
携帯とパソコンでは立ちあげ時間もかかるのでやる気がなくなるのはその通りだと思いました。うまく大学で使いこなせれば、何か変化があるような気がします。先日、教員と職員とで話し合いをしたのですが、聞くだけの授業はイヤだという学生に、毎回コメント? 文章を書かせたら、9割が書かせるなというコメントだったということです。徐々に長い文章がかけるようになるなど違う面をみるのも1つ重要ですね。
システムの開発と、それを使った実際の授業の進め方について、なかなか自分ではできそうにありませんが、すばらしいと思いました。日々の授業であれだけのことをするには、かなりの労力を使っておられることと思います。
携帯はいつでもどこでも身につけており、手軽に利用できるものなので、学生のコメントがポートフォリオとして活用できる点は効果的だと思いました。
大学がOKなら、私の授業でも使ってみたいと思いました。貴重なお話をありがとうございました。一度、先生の授業に参加してみたいと思いました。多人数でも、自由で創造的な授業であるイメージを受けました。
システムを有効に活用する（できる）教員と、そうでない教員（抵抗する教員）との温度差が生じることのデメリットが発生しないか、少し気になりました。FDそのものへの理解がない教員も、現実にはどの大学にも存在すると思います。（特に理系の場合）
学生と授業で双方向の関係をうまく作り出している上、学生の考える力、意見を述べる力の向上にも役立っている。携帯を活用してこれらをうまく引き出すやり方がおもしろく興味を持ちました。携帯に不慣れな学生にどのように対応しているのか関心がある。
CCSの開発とともにその重要性、とても参考になりました。
大変な労力を注がれて、よいシステムを作られたと思います。ただ、これの活用度（役立ち度?）は、授業内容（科目）によるところも大きいと思いました。

満足度【3】 宮田　仁氏の報告
もの（モノ?）は使いよう、ということを改めて実感致しました。
携帯を利用したシステムは試したり、聞いたりしていましたが、重要なのは、発問の仕方である、というのがよくわかった。どのようなツールを使用するにしても、目標は知的好奇心をくすぐることなのだ、ということを知りました。
携帯電話やゲーム機を利用した授業は、私にとって無縁のものと思っておりましたが、今回のお話を伺い、それほど難しいものではなく発問次第で授業をよくするツールであることがよくわかりました。
発問の仕方で活用効果が変わることが分かった。しかし教員と学生のコミュニケーションが、大部分が携帯電話になりがちで、上手に活用しないと対人関係スキル不足の学生が育つ(促進される)不安も感じた。
興味深い話だったが、実践することが容易ではないと思った。
自分で作ったシステムは自分で自由に改論（即応的に）できるだろうと思うが、システム自体を把握できない文系人間には、使いづらい。
ケータイ利用はあまり賛成できませんでした。双方向というのは、マン―マンだと思います。（授業アンケートで学生の意見にもありましたが。）
先進的な内容であるが、その効果が未知であり、簡単に自分も利用してみようという気になれない。また、授業中に学生にメールを書かせることもあまり現実的でない。研究としてはおもしろい。
専門により利用可能性が異なるものなので、今後検討が必要であると考えております。
当大学も将来導入したいと考えています。その時は相談させていただきます。ソフトの使用について、サーバーの容量、個人情報保護等の問題はいかがですか。管理はどうされているのでしょうか。
最初の先生からのご説明のときには、たいへん興味は持ちましたが、実際には導入は難しいと思いました。また、参加者からの質問にお答え下さって説明される内容を聞かせて頂くことで、より理解が深まり、そのやりとりから携帯の利用の利点もより理解できました。
「最初はyes・no,　5択,　自由記述と進めていく」というお話は参考になりました。Step by step
技術的側面の話が多かった様に思いました。また、必ずしも多人数に特化した話題ではなく、多人数のもつ課題の解決に必ずしもつながる技術だとも感じませんでした。
大量の学生の自由記述に対してレスポンスするのは、難しいのではないかと思いました。自分にはできないかなと思いました。
現在使用中のLMS（Black Board）と連動させて使用できれば良いなと思いました。ただサポートのマンパワーが必要でしょうし、現実には困難かもしれません。
動機付けをとても工夫されていらっしゃると思いました。この先、ICT（ケータイなど）が「当たり前」になった時、この授業方法は通用しなくなっていくんでしょうか?それとも通用しつづけていくんでしょうか?
おもしろいですね。ただコミュニケーション不足の学生にとって、どういう影響を与えるか気になります。（コミュニケーション力という点で）効果のある学生もありますね。
テクニックだけでなく、結局はシラバス等にもきちんとしめせるような教育計画が大切という点が印象的でした。
満足度【2】 宮田　仁氏の報告
PowerPointが見づらかった。むしろPowerPoint無くても可。携帯電話のスキルより授業内容、発問、学生との双方向性に興味があった。
話題が飛躍しがちであったのと、パワーポイント資料と講演内で用いられた資料にずれがあり、わかりにくかった。ただし、後のディスカッションによってかなりよくわかってきた。
携帯の使い方そのものが分からない
うまく活用できるか不安が残ります。
技術的な話（特にJPEG圧縮）に終始したように感じた。この方法を個人として利用されているのか、大学として利用されようとしているのかなどについてもお聞かせ頂きたかった。

Q5　ディスカッションの内容は、役に立つと思いましたか。

4. 役に立つ	33名
3. ↑	30名
2. ↓	3名
1. 役に立たない	0名
（無回答）	34名

ディスカッションの中で、「役に立つ」と思った情報についてご記入下さい。（自由記述内容）
板書のコツ、雑談の定義、授業においてレベルの合わせ方、発問のコツ（テクニック）多人数講義の評価法
どのような人がどのような動機で参加されているのか聞けたこと。
他大学の実状をグループディスカッションで聞けた
それぞれの先生が、学生の必要というところから、工夫しておられることがわかりました。
発問する理由、しない理由が伺えて良かった。
少人数でのディスカッションの時間が短いので、長くするか省いてもよいのでは?
板書の仕方。学生の自信のつけ方。
1. 発問を次第に高次なものに変えていく　2. 未完成な学生の考えを吸い上げ、授業を展開していく　3. 発問をしない授業
携帯を使って学生の反応をみることによって、学生の学びに対する自信をつけさせるというやり方は役に立つと感じました。
ディスカッションの進め方も参考になりました。
発問について、学生に考えさせること、考えるくせをつける。
両先生の授業への想い　梶川先生の授業中に学生を当てない理由
学生に対する発問の技術（具体→抽象、択一式→記述式）についてはなるほどと思わされました。
・発問方法　・eラーニングを使用する際のコピペ対策　・1.2回生で考える力を身につけさせる事の重要性
・どの大学もかかえている問題が似ているなと確認できた　・ディスカッションすることで自身の理解が高まった気がする。
多人数授業が今日のテーマでしたが、少人数でも活用できる内容であるという共通した意見が出た。梶川先生が「温故知新」とおっしゃられていましたが、様々な授業方法の良い面を、うまく活用して自分の授業に入れていく必要があると感じました。
良い意見交換となりました。
それぞれの先生が、自分のやっていることに信念を持っていると感じられたこと。
考えるクセ、重要ですね。
板書のメリット　パワーポイントの使い方について
優秀な学生の意見は取り上げない
短い時間の中での意見交換となるので、グループ内の先生の授業内容をイメージしにくい。授業内容を共通する教員でグループを組む方が活発な意見交換ができそうだと思う。少し時間が短かった。
宮田先生の学生からの「分かりません」の扱い方は参考になった。
（1）評価法　（2）発問のコメント
時間が短い。
教員としての資質は明らかに有ると思った。（岡山大学の先生のコメント返却の資料を拝見して）、自分の担当授業への手のかけ方が私が日常目にする教員と違い過ぎる。この様な先生とお話しできて貴重な時間でした。
お二人の先生の授業観を知ることができ大変有意義でした。
学生に自信をもたせ、より学びを深めるプロセスがあることが分った。同様の悩みをもつ先生が多いのが分かった。
梶川先生の黒板、ハーバード話

評価についてもう少し知りたかった。
設問の仕方
評価の仕方
4人いれば4通りの質問が出た。それらの質問を共有してまとめていく過程が興味深かった。
時間が足りないと思いました。
マルチメディア（Twitter等）の利用も良いのですが、全体での質疑応答の方がディスカッションとしては実のあるものになるかなと思います。
携帯システムの利点がよくわかかった。インタラクティブな授業法のヒントを得た。
発問の仕方・易→難、スモールステップの重要性
他大学、他学部の教員と話ができたので、有意義であった。

Q6　今後のセミナーで取り上げてほしいテーマがございましたら、教えて下さい。
（複数回答可）

①授業評価アンケートの活用	38名
②教員研修会	18名
③教員評価	20名
④新任教員研修	14名
⑤管理職FD研修	5名
⑥連携／ネットワーク型	6名
⑦FDer養成	4名
⑧授業コンサルテーション	24名
⑨学生参画型FD	17名
⑩その他（自由記述）	6名

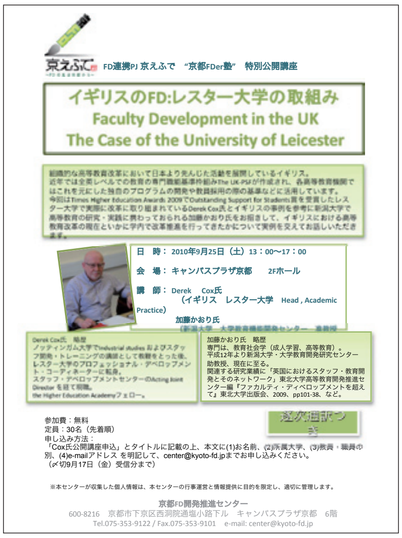
事務職員を対象としたFD
授業実践の紹介（今回のような）
授業評価アンケートの実施方法
e-learning
授業を展開する上で男子学生と女子学生との差異やそれぞれの性差を生かした授業法の工夫例
学生の自己評価（振り返り）を導く教育方法について

Q7　今回のFDセミナーの運営、その他について、ご意見がございましたら、自由に記入

とても良いテーマでした!! 定員だからと人数制限をしないで教室を広げてくださってありがとうございました。これからもこのような企画を楽しみにしています。
これまで学生の立場からFDに関わってきていたので、教員の方の情報を知ることができ、とても新鮮でした。私自身も教職課程を履修しているので、その時の知識や体験を合わせて考えることができました。
何故4人グループで質問をまとめることにされたのか、よくわかりませんでした。一人でゆっくり書きたかったですが。但し、内容は大変参考になりました。
デジタル、アナログの話どちらも非常にバランスが良かったです。
非常に参考になるセミナーでした。運営に当たられた皆様に感謝申し上げます。
大学の授業とはどうあるべきか考える契機となった。ありがとうございました。
社会関係能力の工夫
FDは教員の抵抗が強いテーマと感じているので、何とか広げたい。(学生への教育力は、本来大学が求められている柱と考えるので)
最後の総合討論が非常に役立った。
なかなか内容の濃いセミナーだったと思いますが、この内容ならあと1時間は長い設定の方がよかったのでは?
有意義なセミナーであった。次回も参加させて頂きたいと思います。もう少し時間をかけたディスカッションが欲しい。
いつも有益な学習機会を与えていただき有難うございます。今後ともよろしくお願いします。
今後もこのようなセミナーが開催されることを期待しております。
今回のような授業内容もしくは技術等に関する内容をして頂けると大変参考になります。宜しくお願い致します。
質問に対して丁寧な説明がよかった。
本学の教室設定の問題かと存じますが、ディスカッションのできる移動机のある部屋の方が話しやすかったのかもしれません(が、今回は短時間だったので大丈夫でしたが…)。
一見、対照的な2名の先生方の話のようで、実は根っこは同じ発想(生徒に対するスタンス)というのが興味深かった。支援ツール(講義や演習)を用いた授業に個人的には興味がある。今回の携帯を用いた双方向の授業の発想は参考になった。(携帯を用いなくても、学生の意見を尊重して授業に主体的に参加させていく発想・方法です)
FDにあまり関心を抱いていない方に聞いていただきたい内容でした。大変参考になりました。
参加して大変勉強になりました。

第7回　京都FDer塾（特別公開講座）

【開　催　日】　2010年9月25日（土）　13:00～17:00
【場　　　所】　キャンパスプラザ京都　2Fホール
【テ　ー　マ】　イギリスのFD～レスター大学の取組み～
　　Faculty Development in the UK
　　The Case of the University of Leicester
【内容･講師】　第1部「イギリスの高等教育改革および教員のキャリア開発」
　　　加藤かおり氏
　　　（新潟大学　大学教育機能開発センター　准教授）
　　第2部「イギリスの高等教育概略」
　　第3部「イギリスのファカルティ･ディベロップメント
　　　～レスター大学の取組～」
　　　Derek Cox氏
　　　（イギリス･レスター大学　Head, Academic Practice）
【コーディネーター】松本真治氏　（佛教大学　文学部　准教授）
【受講者数】　22名（教員13名、職員9名）



◆　開催報告（まとめ）

第7回京都FDer塾はイギリス･レスター大学のDerek Cox氏（Head of Academic Practice）と新潟大学の加藤かおり氏をお招きし、公開セミナーを実施した。

第1部は加藤氏より「イギリスの高等教育改革および教員のキャリア開発」という演題のもとに、イギリスにおける高等教育の基礎情報を提供していただいた。内容としては①高等教育改革に関して、ここ20年間の背景･改革の方向性･教員の職能開発の課題、②大学教員の職能開発に関して、その三つの領域（教育･研究･管理運営）と支援構造、③大学教授職に関して、一般的なキャリアパス･新任教員の地位と教授資格（PGCHE）の取得義務、等であった。

第2部と第3部はCox氏の講演で、それぞれにおいてレスター大学で現在実施されているFD活動について、FD活動の今後の課題についてお話しいただいた。レスター大学は研究指向型の大学であり、その観点からFD活動も行われ、教育･研究･管理運営の三つが独立したものではなく、それぞれが一つに結びついた形のFDが展開されている。教育に関しては、イギリス全国レベルでの統一基準であるThe UKPSF（The UK Professional Standards Framework for Teaching and supporting learning in higher education）に基づきPostgraduate Certificate in Academic Practice in Higher Educationコース（60単位）が展開されている。新任教員の正式採用にあたっては、仮採用期間にこのコースのModule A（40単位）を修了することが求められている。このモジュールのタイトルは「教えることと学ぶことの理論と実践」となっており、よい授業は教え方と学生の学びに関する理論をしっ

加藤かおり氏

かりと理解するところから生じるという考え方に基づく。なお、コースは理論の学習だけではなく、授業実践とその振り返りも含まれている。研究については統計や質的調査の方法といった汎用的なスキルから、個々の分野に固有の研究スキルを支援している。管理運営では学部長や上級管理者を対象とした支援や、下級管理者の養成も行っている。研修方式としてはレスター大学内だけにとどまるのではなく、他大学の同じポジションにいる者とワークショップ形式で行う研修(Action Learning Set)も行われている。今後のFDの課題としては、専任教員のみならず大学院生や非常勤講師を含めた職能開発や、教員としての生涯全般にわたる職能開発で、個々の教員のレベルだけではなく学部や大学全体レベルをも含んだContinuing Professional Development (CPD)のデザインが必要であるということである。

講演ののち、フロアとの活発な質疑応答が展開された。質問の一つに「管理運営は管理職に就く者だけで十分であり、全教員に必要ないのではないか」というものがあったが、それに対しCox氏は「管理運営の研修は学部長になるためのものだけではなく、研究グループをどのようにまとめるのかといった普通の教員の仕事にも必要な研修である」との応答がなされた。

〈松本真治氏〉

◆ アンケート結果

回答者数 ／ 13名

Q1 所属

- 連携大学／7名 ・ その他の大学／2名 ・ その他(無回答)／4名
- 教員 ／ 8名 ・ 職員 ／ 5名

Q2 今回のセミナーはどのようにお知りになりましたか? (複数回答可)

所属大学・団体からの案内	6名
京都FD開発推進センターからの案内メール	3名
京都FD開発推進センターからの案内チラシ	3名

その他
- 教員・職員から
- 大学メール
- 同僚からの案内

Q3 講義の内容はあなたにとって役立つものでしたか?

①「イギリスの高等教育改革および教員のキャリア開発」(加藤かおり氏)

←役立つ 4(8名) 3(3名) 2(0名) 1(0名) 役立たない→

※講演への感想

- イギリスの大学教授職に関する基本情報がよくわかりました。
- Cox氏の話を理解するのに役だった。

・基礎的な教養になりました。
・これまで欧米が日本よりもFD/SDに先んじていることは存じ上げていましたが、今日の講演で具体的に聞くことができました。良し悪しの議論とは別にして、日本の将来イメージが少し見えたように思います。
・イギリスの組織構成が詳しくわかりました。帰ってもう一度復習したいと思います。
・FD入門者にとっては、話の内容にすぐついていけなかった。
・本学においても執行部に対し、教養のキャリア開発の必要性をご講演していただきたいと思いました。
・第2部以降の前提知識として助かった。
・次の講演の基礎知識として役だった。

②「Faculty Development at the University of Leicester 2010」（Cox氏）
←役立つ　4（13名）　3（0名）　2（0名）　1（0名）　役立たない→
※講演への感想
・イギリスにおいても教員に求められる役割が多いことがわかりました。役割というか、仕事の中身の整理ができました。
・日本でのFDは教授法に偏っていて違和感が大きかったが、研究と管理を3つの領域として連携的に考えるあり方、また初任者研修だけでなく「大学人」の生涯にわたって、それぞれのステージに必要なのかを提供する、という考え方を教えていただき大変勉強になった。
・学部横断的、上下関係のないFD活動にいつ日本の大学がいきつくのか、また、それに技術的裏付けを与えられるかは、大きなハードルだと感じる。
・イギリス全体の高等教育改革事後のホットな状況をご講演された。先生のようなプラス発想が大学改革に必要なのでしょう。
・細かく難しい内容もあったが、加藤先生のイントロがあったので助かった。Cox先生と、とてもよい構成であった。
・はじめのうちは、通訳の方の声とCox氏の声とが、耳でうまく入れ替えて聞けなかった。といいますか、聞きづらくて集中が途切れるもったいない時間（ロスタイム）が正直ありました。ですが、次第にCoxさんの魅力に引き込まれ、英語にも慣れていき、とても興味深く聞き入らせていただきました。私にとっては、なかでもReward and Recognition for Teachingのあたりが、非常に日本における今後の課題とし、役に立ちました。
・日々考えていたことをチェックするための参照点として、大変有益なお話でした。CPRという考え方は目からウロコが落ちる思いでした。
・実際に改革されている先生のお話ということで、印象的でした。
・イギリス レスター大学アカデミックプラクティスの内容がよくわかりました。
・Academic Leadership,Action Learning Set等興味深いお話を伺えてよかったです。

Q4　今回のセミナーの運営、その他について
・アメリカの高等教育に関する情報に比べると、イギリスに関しては少ない気がしています。本日は貴重なお話が伺えてよかったです。
・他国の状況についてもっと知りたいです。今後もこのような（通訳付きの）企画をお願いしたいです。
・FD委員となって慌てて参加したが、社会的意義や必要性がよく理解でき、とても有意義であった。やはり本場の話を聞けばすぐに理解できる。大学教員の多くが私のように無知な人が多くいるのではないか。

第8回　京都FDer塾

【開　催　日】　2010年10月25日（月）　18:00～20:00
【場　　　所】　池坊短期大学　洗心館　第1会議室
【テ　ー　マ】　授業連携　～授業連携の視点と方法～
【受講者数】　14名（教員9名、職員5名）
【内容･講師】　田中智子氏　（佛教大学　社会福祉学部　講師）
【ファシリテーター】　藤松素子氏　（佛教大学　社会福祉学部　教授）
FDer養成WGメンバー

◆　開催報告（まとめ）

第8回京都FDer塾は、2010年後期の開催テーマ「組織的なFDの課題」の中で、連携大学の中から「チーム･ティーチング」を題材として話題提供をいただいて、それをもとにグループで話し合いをしたいと企画を立てた。教室内に複数の先生がいるという意味のチーム･ティーチングではなく、一科目･複数授業を共同運用したり、学科内でシラバスを調整したりする例として、文系の中でもチーム･ティーチングの色彩の強い「資格」に関連する分野として、佛教大学社会福祉学部の事例をご紹介いただくこととした。

佛教大学社会福祉学部では、授業連携という視点から「共通シラバス」や「授業内容･運営の共有化」に向けた準備が進められている。どのような問題意識のもと、どのような方法で授業連携を進めようとしているのかについて、以下の通りご報告いただいた。

田中智子氏

・社会福祉士（国家試験受験資格）に関わる実習･前後の指導を行う「社会福祉援助技術現場実習指導」において、複数の教員（非常勤講師も含め約20名）が共同してテキスト開発を行い、本学の教育理念を反映した授業の方向性と、教授の視点を確立していることが報告された。
・2010年春学期「実習指導1」では、同じ科目を持つ教員約20名に対する事前説明会と事後アンケートを実施し、同じ時間帯に授業を持つ教員間（非常勤3名を含む5名）で合同授業を行った。
・ゼミ形式の授業において共同で開発したワークシートを活用したことにより、論点を絞っての深い議論をすることができたこと、教員側が到達点を明確に意識することができたことなどの効果があり、学生からも「議論をすることがこんなに面白いとは思わなかった」との感想が寄せられた。

授業連携の問題点として、これまでの授業スタイルに慣れている教員から①画一的な授業になってしまう危険性②授業内容･到達点（評価）のすり合わせをどの範囲で行うのか?　などの意見が出されているとのことである。

今後の課題として（1）補助教材の作成（視聴覚教材･補助教材･ワークシートなどの開発）（2）社会福祉現場との

授業連携(共同の実習プログラム開発や、実習に関するFD活動)(3)卒業後も視野に入れた専門職としてのキャリア教育、等が挙げられた。

最後にグループディスカッションのテーマとして、“統一した評価基準と、学生状況の引き継ぎ”、“大学独自の教育理念・教育方針と、社会福祉現場の持つ理念、専門職養成の方針とのすり合わせ”、の2点が提起された。

◆ グループディスカッション報告

Aグループ 【ファシリテーター:田中智子氏】

当グループでは第8回京都FDer塾のテーマである「授業連携の視点と方法」に関する話題提供者である佛教大学の田中先生にもお入りいただき、総勢10名でグループディスカッションを行った。

まず、授業連携に関して他にどのようなものがあるか、というテーマで初年次教育科目・大学の理念科目(仏教系の大学での仏教学など)・語学教育科目・初年次から行う専門教育科目・キャリアゼミ等を題材として検討した。その中で共通テキスト作成での問題点・共通のレベル教育の問題点・理念科目の共通化への問題点・資格科目での落ちこぼれ対策等に関して議論した。

授業連携での教員の裁量権の問題については、大学側が学生を強制的にクラス分けしたような科目や、シラバスでの到達目標等では裁量権は認めない方向が望ましいとの意見も出たが、授業連携の次に出てくる問題でもあり、踏み込んだ議論までには至らなかった。 〈榎本正明氏〉

Bグループ 【ファシリテーター:藤松素子氏】

ファシリテーターに佛教大学社会福祉学部の藤松素子教授に入っていただき、8名のグループで話し合いを持った。当初テキストの構成や受講人数、クラス編成等の質疑応答があり、その後概ね以下のような意見が出された。

・文系の一般的な授業に、どのように応用できるだろうか。
・外国語科目では同じ科目を複数教員が担当するが、なかなかこのような取組ができていない。
・外国語でも外国人教員は当たり前のように科目コーディネートをしている。
・非常に良いFDの取り組みである
・資格試験のための課程というと「国の言うなり」というイメージがあったが、大学独自の教育理念や方針を取り入れようとしていて、とても良い取り組みだと思う。
・学生にとって選択できない科目では、同じ内容・同じ評価基準でないと不公平に映る。

さらに「学生状況の引き継ぎ」に話題が進み、学習の進展状況や生活状況等の教員が得た情報を、「次の授業担当者・指導教員に引き継ぐ必要があるとの認識ではほぼ一致したが、どのように他の教員に伝えていくかが課題として挙げられた。ある大学では学生状況をコンピュータで管理して、必要な教職員がアクセスできるシステムを作っていることが紹介された。 〈深野政之〉

◆ アンケート結果

回答者数 ／ 11名

Q1 職種

教員 ／ 8名 ・ 職員 ／ 3名

Q2 この企画を何で知りましたか? （複数回答可）

1. FD連携プロジェクトからの案内	5名
2. 学内のHP／メールでの案内	2名
3. 学内の会議での案内	2名
4. 学内配布のチラシ	1名
5. 上司からの案内	1名

Q3 参加したきっかけは? （複数回答可）

1. 興味があったから	5名
2. FD担当者なので	3名

Q4 「授業連携の視点と方法」(田中智子氏)の内容について満足しましたか?

1. たいへん満足した	1名
2. 満足した	9名
3. やや不満である	1名
4. 不満	0名

Q5 「やや不満」、「不満」と回答した方のみご回答ください。

その理由はなんですか?

・田中先生の話の範囲では「不満」はないのですが、学部･学科全体の連携を期待していたので、話の範囲が少し狭いとの印象を持ちました。

Q6 グループディスカッションの内容は、今後のFD活動に役立つと思いましたか?

1. とても有益だった	2名
2. ある程度有益だった	8名
3. あまり有益でなかった	1名
4. まったく有益でなかった	0名

Q7 1･2と回答した方のみご回答ください。今回参加して得た「有益な情報」「体験」を教えてください。

・評価基準についての必要性と共に、その設定の困難性を再認識できた。

・普段はあまり考えることがない問題点等について気付くヒントが、グループメンバーとの話の中で見出せた。

・各教員の裁量をどこまで認めるかということが、授業の性質などからその都度考えないといけない重要な点

であることを共有できたと思います。
- 他校の教職員との意見交換
- 他大学の状況が聞けた。
- 共通テキストの使用状況について、他大学の状況を伺えたのは有益であった。ある大学では「科目の平均が○○点になるように」と教授会で指示されたということが紹介され、それについて教員のご意見が伺えてよかったと思う。
- 授業連携は、導入期教育だけでなく、専門課程においても活用できる手法であることを知ったから。
- 共通科目の各教員の講義内容裁量権について、改めて考えさせられた。
- 他領域（分野）と他大学のチームティーチングの取り組みを聴けたこと
（私が直面している）問題に,コメントをもらえたこと
- 有益な情報については、意見を述べ合う基礎と人数が多いところでは、テキスト作りなど通じて合同授業が有益であるということが確認できたこと

Q8　3･4と回答した方のみご回答ください。その理由はなんですか?
- 焦点が不鮮明。

Q9　全体として今回の京都FDer塾に満足しましたか?

1. とても満足した	4名
2. まあ満足した	6名
3. あまり満足しなかった	1名
4. 不満である	0名

Q10　今回のような小規模の勉強会の場合に、有益だと思う開催形態をお答えください。

1. 講演会のみ	0名
2. 講演形式+ワークショップ（グループディスカッション）	11名
3. ワークショップ	0名

Q11　学内でFDを推進していくうえで、現在、学内での推進が難しいと感じている取り組みや、今後、ディスカッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えて下さい。

1. 授業評価アンケートの活用	3名
2. 教員研修会	1名
3. 教員評価	3名
4. 新任教員研修	0名
5. 管理職FD研修	0名
6. ICTの活用	0名
7. FDネットワークの構築	1名
8. 授業コンサルテーション	1名
9. 学生参画型FD	2名

Q12　今回の感想や、今後取り扱って欲しいテーマ、話を聞いてみたい講師等ご自由にご記入ください。

・組織的なFD活動推進はいかにして可能か?!
一般的なことは承知しているが、実際には非常に困難であるので、有効な手立てを試みておられる事例を紹介していただきたい。
授業評価アンケートの効果的活用、授業コンサルテーション、新任教員研修、教員研修の効果的な実施方法、および人材の紹介等々
・いつも多くの参考となるお話が聞けます。今回も参加して良かったと思います。なかなか得られたことを実践する場がないのが実状ですが、少しでも改善につなげていきたいと思います。
・身体的・精神的に「障害」や問題をかかえた学生への、学習・大学生活への支援

第9回　京都FDer塾（ポスターセッション）

【開　催　日】　2010年12月4日（土）　15:00～17:15
【場　　　所】　メルパルク京都　会議室D
【テ　ー　マ】　連携大学･短期大学のFD活動から学ぶ
【参　加　者】　55名（内訳：教員33名、職員22名）

◆　開催報告（まとめ）

2010年12月4日（土）にメルパルク京都にて第9回京都FDer塾ポスターセッション「連携大学･短期大学のFD活動から学ぶ」を開催しました。本連携事業「地域内大学連携によるFDの包括研究と共通プログラム開発･組織的運用システムの確立」に参加している18大学･短期大学が、自大学のFDの取組をポスター形式で発表し、情報交換や議論を行った。

まず、各大学が2分間のミニプレゼンテーションを行い、参加者全員が各大学･短期大学におけるFDの取組に関する全般的な情報を得た上で、ポスターセッションを行った。各大学･短期大学で取り組んでいるFDの実践は大学によってそれぞれ特徴があり、ポスターの前では熱心な議論が行われた。特に比較的規模の小さな大学の場合、FDに関する情報が手に入りにくいこともあると考えられるが、このような大学連携を通じて様々な情報を共有できたことは有意義であり、小さい大学だからこそできる実践も多いと感じた。

また、「組織的なFD活動はできていないが、教育改善には熱心に取り組んでおり、これもFDだと考えるようになった」というコメントも多く聞かれた。何をFDとして考えるか、ということは重要なことであるとともに、本連携事業を通して、意識が変わったことは大きな成果であると感じた。

今年度で本連携事業は終了するが、ここで得られたネットワークを活用しながら、今後も各大学･短期大学のFD活動が活性化していくことを期待する。

◆ 参加者からのアンケート結果

回答数　29件　（内訳：教員　16名・職員　13名）

Q1. この企画を何で知りましたか?　（複数回答可）

1. FD連携プロジェクトからの案内	17件
2. 学内のHP／メールでの案内	8件
3. FD担当部署からの案内	5件
4. 上司からの案内	3件
5. 学内の会議での案内	1件
6. 学内配布のチラシ	1件

Q2. 参加したきっかけは?(複数回答可)

1. 興味があったから	16件
2. FD担当者なので	12件
3. 上司のすすめ	3件

Q3. 各連携校によるプレゼンテーションの内容について満足しましたか。

1. たいへん満足した	10名
2. 満足した	17名
3. やや不満である	1名
4. 無回答	1名

※プレゼンテーションで得た「有益な情報」を教えてください。

・それぞれ特色のあるものを実施している。
・他校での授業公開の実態、授業評価アンケートの活用例。
・詳細な情報はポスターセッションでということになりましたが、どこの大学にどんな情報があるのかポスターセッションの前にざっと知るにはプレゼンテーションが有益でした。
・各大学の組織的FDについて。
・佛教大学の入学前教育の学力別課題。京都薬科大学の「深海魚問題」。
・京都産業大学のFD専属部署の存在と取組は刺激を受けました。
・他大学の授業アンケート結果の取扱いに興味もちました。
・各校の取り組み概要がわかり、次のポスターセッションへの興味につながった。
・小規模校における日常的な実践。
・他大学の取組内容や方法等を具体的に聞くことができた。
・ポスターを含めての全体で、いろいろな大学の教育に対する取組み方や実情を知ることができた。
・学内の各種FD活動を連携させて、取り組んでいる点。
・京都薬科大学のリフレクションペーパー。
・参加大学すべて特色があり、勉強になりました。また、各大学担当者によるプレゼンも大変勉強になりました。
・学生の退学傾向と小規模大学の危機感。

・他大学の授業アンケートの活用法、公開授業のあり方。
・短時間でのプレゼンテーションテクニックをいろいろ見せていただき、参考になりました。
・各大学のFDに関する取り組みがわかったこと。
・広義なFD活動、初年次教育について。
・各大学の工夫やFD活動。
・小規模校での大学の帰属意識を高める取り組み。

※3･4と回答した方のみご回答ください。その理由は何ですか。
・発表時間が短い。

Q4. ポスターセッションの内容について満足しましたか。

1. たいへん満足した	15名
2. 満足した	10名
3. やや不満である	2名
4. 無回答	2名

※ポスターセッションに参加して得た「有益な情報」「体験」を教えてください。
・直接、説明が聞けて理解が進んだ。
・他校での授業公開の実態、授業評価アンケートの方法について。
・所属校で懸案事項となっていることに関連した他大学の取り組み状況が、いくつか情報として得られた。
・ポスターとなることで、FD活動がより分かりやすかった。
・①佛教大学の入学前教育の学力別課題の具体的取組･中間アンケートのフィードバックの実際。②京都薬科大学の「深海魚問題」の実際。③池坊短期大学のプチウィークの具体的取組。④大谷大学のTA･SAを使った初年次教育の具体的取組。⑤京都橘大学の授業開発補助の実際。
・京都外国語大学のFDに関して、10年前から実施されている一泊合宿の取組は、参考にしたいと思いました。
・授業アンケートや時期についての情報･授業公開の利点と問題点について。
・プレゼンテーションでは聞けなかった具体的内容（苦労した点など）がよくわかった。
・ゼミ単位での大学祭への参加。
・プレゼンテーションやポスターには盛り込まれていない担当者の本音を聞くことができた。インタラクティブに意見交換を行うことができた。
・ポスター数と参加者の関係でうまくディスカッションができていた。ポスターのデザインなども勉強になった。
・入学前教育、導入期教育等を専門に取り組む部署を大学内に設けている取り組みが聞けた点。
・京都薬科大学のリフレクションペーパーの実物を確認できたこと。
・京都薬科大学のリフレクションペーパー、池坊短期大学の「プチウイーク」、佛教大学「入学前教育プログラム」等々、各大学多々工夫されており、新鮮で勉強になりました。
・他大学の事業を実施する学内のプロセスを聞けたこと。
・具体的に質問できるポスターセッションそのものが良かった。やり取りをさせていただいている中で、自分の周囲で抱えるいくつかの小さな問題の解決への道筋が見えたり、参考になることが多く得られました。
・各大学で行われている取り組みが理解できた。大学で発表されていた深海魚問題は非常に興味ある内容であった。

・他学の様々なFDの活動状況はもちろんのこと、実用化する点で一長一短があることはいたし方ないことを再認識しました。議論、検討も必要なことだが、いつまでも机上論だけで終わらせるのではなく、試行錯誤を繰り返しながらでも地道に実質的な活動を続けていくことが、FDの根幹であることを実感させられました。非常に勇気付けられたイベントでした。
・各大学で直面している問題が、同質の問題であることを認識できた。
・トップダウンでシビアな教員評価を実施している大学の現状。

※3･4と回答した方のみご回答ください。その理由は何ですか。
・偶数番･奇数番で分けられたため、一方のパートに聞きたい大学があったが聞けなかったから。
・配布資料の文字が小さく読み辛かった。具体的なFDの内容を知りたかったが、単に自大学のFD組織の紹介にとどまる資料が多かった。

Q5. ポスターセッションの内容は、今後のFD活動に役立つと思いましたか?

1. とても役立った	15名
2. ある程度役だった	12名
3. あまり役立たなかった	1名
4. 無回答	1名

Q6. 全体として今回の京都FDer塾に満足しましたか?

1. とても満足した	16名
2. まあ満足した	11名
3. あまり満足しなかった	2名

Q7. 小規模の勉強会の場合に、有効だと思う開催形態をお答えください。

・講演形式+ワークショップ(グループディスカッション)	26名
・ワークショップ	1名

その他の意見
・内容によると思います。
・講演会とコメンテーター、指定討論者の設定。

Q8. 学内でFDを推進していくうえで、現在、学内での推進が難しいと感じている取り組みや、今後、ディスカッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えて下さい。

1. 教員評価	6名
2. 授業コンサルテーション	5名
3. FDネットワークの構築	4名
4. 授業評価アンケートの活用	3名
5. 新任教員研修	3名
6. 学生参加型FD	2名
7. 教員研修会	1名

その他の意見

・FDの推進には、SDの支えが必要と感じている。
・教員と職員とが意見交換できるような場があれば、高等教育の質も向上するのではないだろうか。
・教員意識改革

Q9. 今回の感想や、話を聞いてみたい講師等ご自由にご記入ください。

・近所の大学での多くの具体的な取組みと進み具合について知り、顔をつきあわせて意見交換できたことが、自分の大学での今後のFD活動への刺激になった。
・京都FDer塾活動の集大成として各大学の取り組みを本音ベースで聞くことが出来て大変貴重な機会でした。隣の芝生は青い的なところもありますが、自大学でもあきらめることなく出来るところから取り組んでいきたいという決意を新たにしました。
・参加しているメンバーが毎回同じことに大いに疑問を感じる。各大学で、やりたい人だけやれば…、という雰囲気ではないのか?
・報告者として(半ば強制的に)参加したが、他大学の取り組みが具体的に聞けたのは、大きな収穫であった。
・冒頭のプレゼンテーションの2分間アピールはダラダラ聞くよりも遥かに有意義であった。
・苅谷剛彦氏等、社会学的視点から高等教育をどう捉えるか。
・各大学、2分間という短い発表だが、分かりやすく端的にまとまっていた。
・学習の動機づけが低い学生に対して、動機づけを高めて学習目標を達成させる運営法、大学での学習をキャリア育成へと結びつける指導法。

京えふでFD
～FDの風は京都から～

学生間の繋がりの中で学習意欲を向上させる

入学前教育プログラム

佛教大学が実践するFDの全体像とその特徴

教育の整備 実態把握
① 入学前教育
② 基礎学力調査
③ 初年次教育
④ 授業アンケート

教員のスキルアップ
① FD研修会参加支援
② 授業公開

研究活動 他大学との連携 情報発信
① 教授法開発室によるFD開発
② 戦略的大学連携支援事業
③ FD研究会
④ FD報告書の発行

特徴

- 基礎学力調査結果の動向と連動させた入学前教育プログラム。
- 全学統一の初年次教育。（1回生入門ゼミ）
- 学生からの意見を、即時にフィードバックするため“中間アンケート”も実施。

- 教授法開発室が全国で開催されるFD研修会の情報を全教員に提供・参加支援。
- 教員による自己啓発活動の支援。
- 全国のFD動向についての情報収集。

- 9名の教員から構成される教授法開発室を設置。
- 教授法開発室によるFD開発。
- 18大学によるFD連携。
- FD報告書「FD Review」を発行し学内外へ情報発信。

入学前教育の全体図

既存の入学前教育

- 授業体験 or リポート作成を選択。
- 対象者全てに統一課題を課す。
- 低学力層の参加率の低下。
- 低学力層へのフォロー。
- 教員や先輩、生徒間の交流は授業体験当日のみ。

今年度からの新たな取り組み

- 授業体験＋課題学習に変更。
- 学力別プログラムを用意。
- 高等学校の担任等との連携。
- 2種類の難易度の教材を用意。
- 学内SNSを活用し継続的な生徒間コミュニケーションの実現。

入学前教育対象者層	主な実施目的	課題	学習支援体制
学力高 A グループ	●学部学科に対する理解の向上。 ●学習への不安緩和 ●学習意欲の向上	レポート作成2設題 ＋ 授業体験2日	●SNS上によるコミュニケーション
B グループ 学力低	●基礎学力の修得 ●学習習慣の修得 ●学習意欲の向上 ●学生間ネットワークによるモチベーションの維持。	リメディアル学習教材 （初級or上級を設定） ＋ 授業体験3日	●高等学校の担任等との連携 ●SNSによるコミュニケーション ●電話で進捗状況の確認&激励!

SINCE 1912 100th Anniversary
BUKKYO UNIVERSITY

Bukkyo University 佛教大学

京えふで
〜FDの風は京都から〜

京都工芸繊維大学のFDへの取組

第9回 京都ＦＤｅｒ塾企画ポスターセッション
日程：２０１０年１２月４日（土）15:00 ～ 17:30
場所：キャンパスプラザ京都２階ホール
パネル作成：京都工芸繊維大学学務課　075-724-7123

京都工芸繊維大学では、総合教育センター教育評価・FD部会が中心となり、教育実態及び教育成果を調査・分析した上で、改善(対応)策などを検討してきました。それらのFD活動内容を実施対象(目的別)に整理すると次の⑴～⑸になります。

⑴学生(教育を受ける当事者の意見の聴取)

① 授業評価アンケート
本学では、平成15年から個々の教員ならびに課程(学科)、学部としての教育内容・方法等を改善し、教育力を向上させるために、また、学生の学習意欲を喚起する目的で、毎学期、全授業科目について学生による授業評価アンケートを実施しています。

② 卒業(修了)予定者へのアンケート
平成18年度から、本学の教育プログラムの改善に資するため、その年度に本学学部を卒業予定、本学大学院博士前期課程および後期課程を修了予定の学生から、年度末に忌憚のない意見を聴取しています。

③ 学士力向上アンケート
中央教育審議会が示した「学士力」は、「知識」「技能」「態度」「創造的思考力」の4分野13項目からなります。それに対し本学では、学生と教員の共同プロジェクトの参加者や、ＧＰ関連科目の受講者に対し、学士力向上アンケートを実施しています。

⑵卒業生・修了生(学生が社会に出た後の意見の聴取)

④ 卒業生・修了生調査協力者会議
平成18年度から、学部卒業生・大学院修了生を秋の学園祭(松ヶ崎祭)にあわせて招聘し、本学の授業内容・方法や学生生活に関することなどについて、体験に基づいた意見を聞き、助言を得ています。

⑶企業等学外者(卒業生等を受け入れている社会の意見の聴取)

⑤ 外部有識者による教育プログラムの検証
科学技術の動向や産業界等社会からのニーズを踏まえ、より充実したカリキュラムに改善するため、産業界を含めた外部有識者による評価・検証を平成20年～21年度に行いました。

⑥ ＧＰ関連の教育プログラム対する企業による評価
本学が今までに競争的資金として採択された(現代ＧＰ２件、特色ＧＰ１件、学部ＧＰ(テーマA)１件、大学院ＧＰ１件、産学連携による実践型人材育成事業１件、戦略的大学連携支援プログラム１件)教育事業については、学外委員を含む評価委員会による教育プログラムの評価を受け、改善を行っています。

⑷保護者(学生をサポートする父母兄姉等の意見の聴取)

⑦ 教育懇談会
学部学生をサポートする保証人等(実質上の授業負担である者父母兄姉等)を大学に招いて、教育事業と就職状況の説明、また学生に関する相談、本学に関する意見を聞くために、毎年11月に教育懇談会を実施しています。

⑸教員(学生を教育する者の意見の聴取)

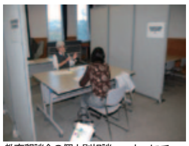
⑧ 教員の担当授業科目アンケート
平成19年度から、教員の担当授業科目への取組状況を問うことでＦＤへの意識を高めることを目指して、「教員の担当授業評価アンケート」を実施しています。

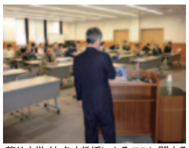
⑨ 授業公開の実施(参観教員レポート及び被参観教員レポート)
授業公開は、参観する、あるいは参観される教員双方にとって、自らの授業方法を改めて見つめ直す端緒となり、また、関連する授業科目間の連携や補完関係を深めるための契機として実施しています。

⑩ 教員研修会
上述した①～⑧のアンケート等で得られた分析結果などを基にして、教育の質の向上や授業の改善を図ることを目的として教員研修会を毎年開催してきました。

卒業生・修了生調査協力者会議にて、意見交換等を行う様子

教育懇談会の全体会にて、熱心に話を聞くご父兄の皆様

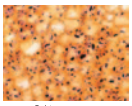

教育懇談会の個人別相談コーナーにて、ご父兄からの相談に対応する担当教員の様子

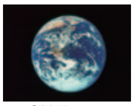

龍谷大学 林 久夫教授によるＦＤに関する講演を実施(2010年3月)

本学独自の取組　２１世紀知識基盤社会におけるＫＩＴスタンダードと達成度標準 －理工系教育におけるスタンダード修得のためのＫＩＴ検定－

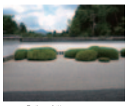
本学では社会が求める人材を輩出することが大学の使命であると考え、本学を卒業した学生が２１世紀知識基盤社会を担う専門技術者として備えておくべき知識と技能を【ＫＩＴスタンダード】として体系付けて整理し、修得できる教育プログラムを平成22年度から本格的にスタートさせました。

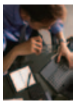
具体的なテーマについては、現在、社会的ニーズとなっている研究主題と、本学が就職先企業に対して独自に行ったアンケート調査により判明した社会から本学学生に求められている分野と、更には、本学の個性あるいは理念を具現化するための能力とを勘案して、次の五つのリテラシーを２１世紀理工系学生の備えるべきリテラシー（事象を理解・整理し、活用する能力）として抽出しました。


①遺伝子リテラシー


②環境科学リテラシー

③ものづくりリテラシー


④造形感覚リテラシー


⑤知的財産リテラシー

リテラシーに関しては、大学独自の検定試験（ＫＩＴ検定）を行い、達成標準に対する習熟度を検証するために、次の(1)～(5)のシステムを確立しました。

(1) 学生は、携帯電話を利用してＫＩＴ検定を申込みます。
(2) 受検者の携帯電話メールへ検定実施情報の提供を行います。
(3) 携帯電話、クリッカー、個人情報による本人確認システムを構築しました。（特許申請中）
(4) クリッカーによる回答集計、それをデータベースに記録し、講評を行うための各種資料を表示します。
(5) 受検者の成績に応じて単位化を行います。

［合格基準］
１つのリテラシーで２０題を選出して検定を行い、１２問以上正解したものを合格とする。

［単位認定及び評価基準］
＊ ３つのリテラシーを合格した場合、その者に１単位を付与する。
＊ ５つのリテラシーを合格した場合、その者に２単位を付与する。
＊ 与えた単位には成績の優劣をつけるものとし、３つのリテラシーを１６問以上正解した場合「Ｓ」評価、１４問以上正解した場合「A+」評価、その他は「A」評価とする。

(6) ＫＩＴスタンダードを自学自習するための環境を整備しました。

① 自学自習ＷＥＢシステムの構築
学生個人のＷｅｂページを開設し、その中で、過去に実施したＫＩＴ検定問題を試し受検できる自学自習システムをＷｅｂ上に構築し、運用しています。

② 附属図書館に設置した「ＫＩＴスタンダードコーナー」
各リテラシー担当教員から推薦された教科書や参考書を配架し、自学自習環境を整備しました。

ＫＩＴ検定試行実施の様子

クリッカーを使用し回答を行う学生

ＫＩＴ検定の過去問を模試することで、事前学習を可能にする自学自習システム

問題ごとに受検者の正解率等を集計したデータ

本学の附属図書館に設置した「ＫＩＴスタンダードコーナー」

Kyoto Institute of Technology 京都工芸繊維大学

京えふでFD
～FDの風は京都から～

大谷大学における初年次教育「学びの発見」

～学生･TA／SA･教育職員･事務職員の取り組み～

2005年度からスタートした「学びの発見」は、多くのスタッフの協働作業で成り立っています。
授業の概要と協働･連携の模索について報告します。

「大学導入：学びの発見」とは?

- 第1学年前期の必修科目のひとつ
- 週1回180分の時間枠
- ねらい：主体的に学ぶ楽しさを知り、学ぶことへの意欲を喚起すること、および学び方（スタディ・スキル他）を学ぶこと。
- 体験型授業：ブレーンストーミング、KJ法、資料探し、ワープロ操作、レポート作成など、大学における主体的な学びに必要な作業を一通り経験する。総合研究室や情報処理室を実際に使ってみる。
- 大クラスでの教員による全体レクチャー、小クラスでのTA／SAのアドバイスを受けながらのグループワーク、個人作業を組合せる。

●第1学年の必修科目群

「人間学」「外国語」「大学導入」:学びの発見（前期）
「学科演習I」「学科導入」：専門の技法（後期）

①第1学年全員（850名前後）を相手に、少数の多様な人的スタッフ（教員9名･TA／SA約40名+図書館職員･情報A+教務課職員）で、どのような形で体験型授業を行なっているか?
②授業内容の統一性と臨機応変性をどのような工夫で確保しようとしているか?

移動：小クラス（20名前後）にて、班（5名前後）で作業（170分）。各小クラスにTA／SA1名配置。

ブレーンストーミング

TA／SAが各班にアドバイス。教員は黒子。各教室を巡回し、気を配る。必要事項はTA／SAに指示。

KJ法：カードを系統的に整理

図書館職員による図書館利用に関するレクチャー、情報アシスタントによるワード・エクセル指導も織り込む。

浮かび上がったテーマから着想し、総合研究室のPCを使ってレポート作成。他者のレポートを読み、コメントする作業や成果口頭発表も。

連携の課題

大クラス9つの連携・大クラス担当教員（1名）と小クラス担当のTA／SA（4名前後）との連携・図書館や情報処理室との連携

連携の工夫

●学期前
担当教員・TA／SA向けの指導要領「極意之書」の作成と改訂
TA／SAの募集（大学院担当教員への呼びかけも）
事前打ち合わせ会（担当教員・TA／SA・教務職員他）

●毎回授業の前後
TA準備室にて、担当教員とTA／SAのミーティング。教材の準備。

●学期末
意見交換会：担当教員、TA／SA、教務・図書博物館・教育研究支援の各課職員・文学部長・各学科主任・FD部会員等が参加。その後、食事付きの懇談会開催。

初年次教育として機能しているかどうか?

検証の試み

履修学生が学期後半に履修授業について行なう通常の授業評価アンケートに加えて、学生（第2～4学年）・教員へのアンケートを実施。
今に活かされていると答えた学生の声の例

- 話し合いの場で物怖じせず積極的に意見を言えている。（哲2）
- ブレイン･ストーミングの考え方は現在も活用している。（哲2）
- 視野が広がった。（真2）
- グループで作業することにより、友人作りなど、人のつながりが増えた。（社3）
- 文章を書くとき、自分の言いたいことの整理するヒントになった。（国際3）
- 授業の中でグループ作業があるときなどにスムーズに進めることができた。（国際3）
- レポート製作や、教職のグループディスカッションでよく利用した。（史4）
- 今のグループ発表の授業で、レポート作成の手順などがみんな分かっているので進めやすい（哲4）

効果と問題：それぞれの立場の声などから

学生
- 居場所作り、仲間作りに効果。
- 図書貸し出し数、総合研究室利用などの数値増。

教員
- 第1学年の個性や問題をつかむ機会のひとつ。
- 初年次教育として機能しているかどうかは即断しにくい。

TA／SA
- 大学院生にとって教える経験の貴重な機会。教えることで学ぶ。自信と意欲が芽生えた。
- 人に教えることの大変さや難しさを経験できた。
- レポート評価をすることにより、自分のレポートの書き方も意識するようになった。

Otani University 大谷大学

京えふで FD
〜FDの風は京都から〜

年間を通した有機的な連携を目指したFD

宿泊FD（9月）

- 9月中旬（秋学期が始まる1週間前）に、1泊2日でホテルにて実施
- 教員は基本的に全員参加

初日の午後…●外部講師による基調講演（質保証,カリキュラムデザインetc.）
●学内教員によるパネルディスカッション（学内プロジェクトの進捗状況の報告による情報共有,議論）

初日の夜……●ラウンドテーブル（教員がテーマを決めて自由に議論できる場を提供）

2日目………●5つの分科会を設定
●3名程度の教職員による報告、自由討論（到達目標・情報コンテンツ・入学前教育・学生参加型活動・授業評価の活用etc.）

学内FD（2月）

- 2月下旬に、大学内で実施
- 発表+グループディスカッション
- 9月の宿泊FDから継続的に議論されるテーマも多い（授業評価アンケートを活用した授業改善、メンタルヘルス、授業映像による授業改善）

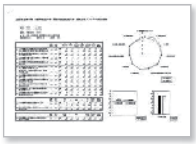
授業担当者打合せ会議（3月）

- 3月上旬に、大学内で実施
- 専任教員に加え、非常勤講師も参加
- 大学全体の授業の問題について考える

午前…●学科毎のFD（問題点の共有・議論など）
午後…●全体会
夕方…●講演会など

授業評価アンケート（6月・12月）

- 年2回、10回目前後の授業で実施
- 14項目（5件法）+自由記述
- 集計結果は最終授業までに教員に返却
- 受講生にWebで結果を公開



授業改善・教育改革へ!

Kyoto University of Foreign Studies 京都外国語大学

Kyoto Junior College of Foreign Languages 京都外国語短期大学

京えふでFD
～FDの風は京都から～

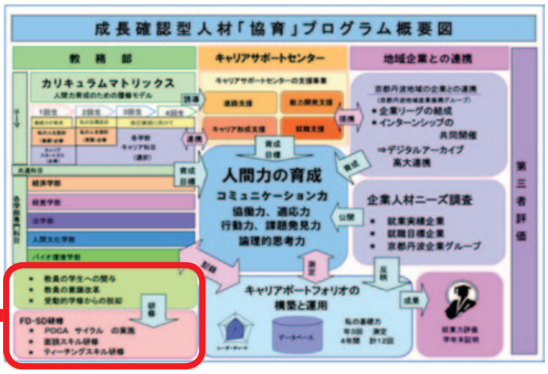
大学生の就業力育成支援事業『成長確認型人材「協育」プログラムの展開』

このプロジェクトを通して
教職員の「協育」体制の構築を目指す!

共通の目的は「人間力の育成」にあり

FD・SDの活性化
教員の講義手法や意識改革と同時に職員の学生への指導・相談・助言をより有効なものにするため、FD･SD研修を定期的に開催し、常にPDCAサイクルを循環させる。

教員の学生関与の増強
実質的な効果を発揮するために、教員の学生への関与が増強されることが必要。教員が学生の学習状況や生活状態を把握できる小集団指導体制の拡充を行う。



新たなチャレンジ

教学改革実行中!!

本学の教育目標:「人間力の育成」

その基礎となる6つの力を正課内外で身につける

「コミュニケーション力」「協働力」「適応性」「行動力」「課題発見力」「論理的思考力」

継続的な改善の取組

全学・学部FD研修会のテーマ

- 新入生の大学適応とキャリア支援
- アカデミック・ハラスメントのない大学つくり
- 就業力育成論
- 学生対応・こんな時どうする
  ～学生とのコミュニケーションを広げるヒント～
- 学生相談の基本的考え方と方法
- 導入期教育の教育内容と課題の共有

全学･学部FD研修会、授業アンケート、
授業公開によるピアレビューなど

実施方法をリニューアル!

無記名アンケート用紙

学部FD推進委員会アンケート

1.実施目的の再確認
①授業の質の向上、②教員の教育技術の向上、③学生の満足度アップのための手法の修得、④新しい試みの評価

2.実施手法の見直し
- 順番制として全教員は、5年で必ず1度は授業公開する。
- 公開対象者…専任教員(+非常勤科目も評価が高ければ協力願うことも考慮する)
- 公開対象科目…基本的に全科目を対象とする。
- 全教員は、2つ以上の授業を参観する。
- 科目担当者は、参観した教員への無記名アンケートを実施(当日回収)する。

3.フィードバック方法の変更
- 学部FD研修会での意見交換 → 学部FD推進委員会のよる議事録の提出 → 教員および全学FD推進委員会へ報告

概ね積極的な反応

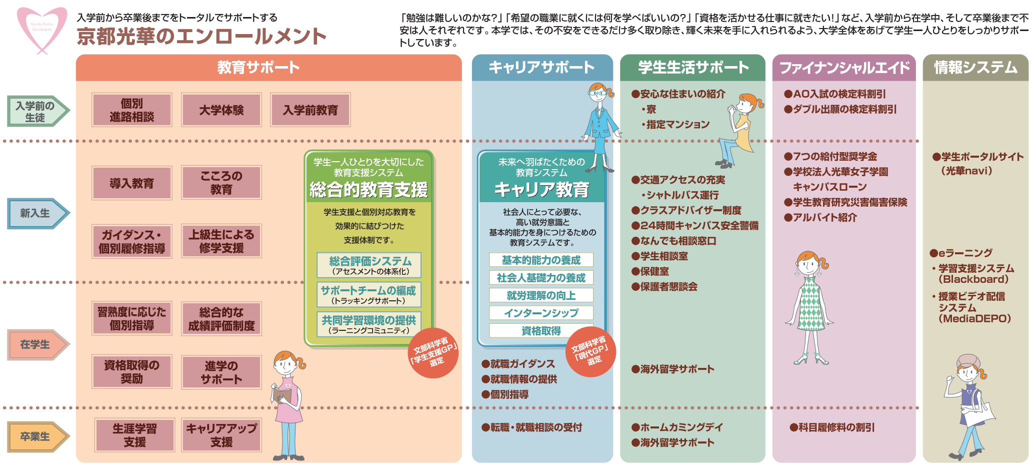
教員の声
- 教員全員が順番に行なうのが良い。良い点、悪い点それぞれ参考になるのでは
- 公開授業参観者が自身の授業を改善する余地は大きいため、しばらく(数年)は評価の高い授業を公開授業の対象にしてほしい
- フィードバックの内容について、もっと教員からのメッセージ性が強く出るフォーマットにしてはどうか
- いずれ教員査定に使われるのではないかと危惧する
- 参加回数の義務を2回以上に増やしてもいいのでは

Kyoto Gakuen University　京都学園大学

京えふでFD
～FD の 風 は 京 都 か ら～

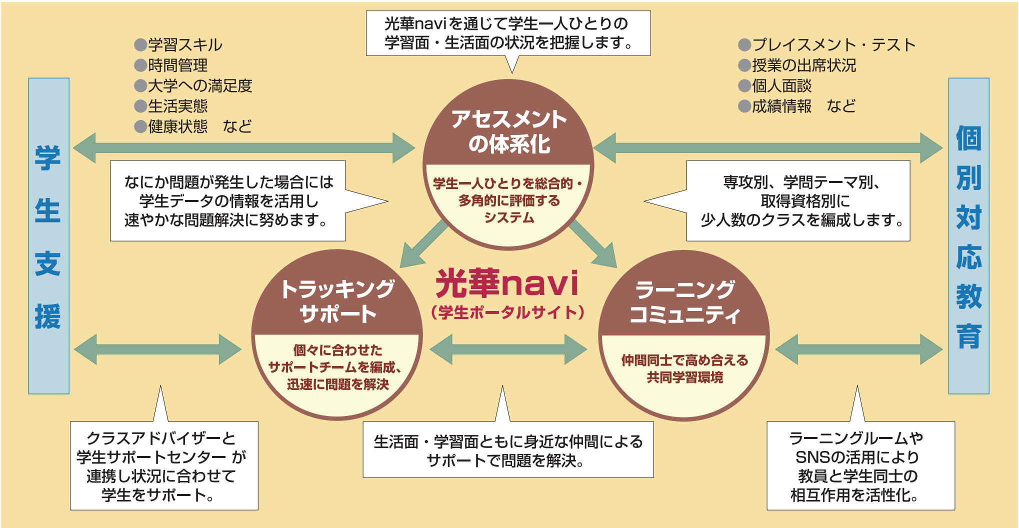
FDとしての エンロールメント・マネジメントの政策

EMの具体的政策



総合的な学生支援

平成20年度文部科学省　学生支援GP／「学生個人を大切にした総合的支援の推進」選定



Kyoto Koka Women's University 京都光華女子大学・短期大学部

京えふでFD
～FD の 風 は 京 都 か ら～

京都産業大学における教員評価制度

1 2006年 3月10日 京都新聞

2006. 3. 10 京都新聞(朝刊・30面)

学生も教員評価

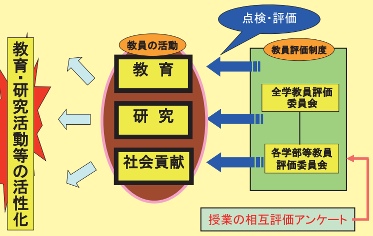
京産大が独自制度

新年度から

2 教員評価制度の導入（導入の経緯）

平成13年	理事会「京都産業大学教職員人事制度改革の基本方針」 新田政則前学長「本学の教員評価制度について」諮問 「教員評価制度検討委員会」の設置
平成14年9月	教員評価制度検討委員会「中間答申」
10月	坂井東洋男学長のもとで各教授会構成員の意見を聴取しながら検討を継続
平成15年9月	教員評価制度検討委員会「最終答申」 制度導入の全学的なコンセンサスを得た後、実施に至る 規程類を整備
平成16年	「全学教員評価委員会」を設置
平成17年	「 教員評価制度の試行実施」 （平成16年度の教育、研究、学内・社会貢献の3領域についての個々の教員の活動に対する評価を全学的に試行実施）
平成18年	「教員評価制度の本格実施」

3 京都産業大学の教員評価制度の目的



4 京都産業大学の教員制度の実施

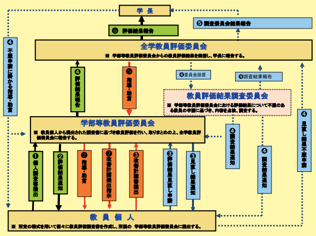
評価の対象 専任の教授・准教授・講師・助教

評価期間 評価は、3年に1度、過去3年度分について行う。

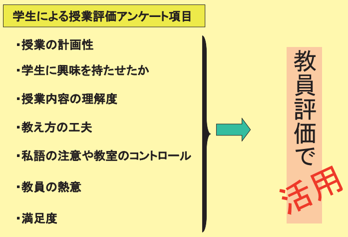
※ただし、評価のための資料は、毎年「教員評価調査票」の様式に従い各教員が作成し、各学部等の教員評価委員会へ提出する。

各学部長及び教育研究センター長は、評価実施年以外の年でも、必要に応じ、「教員評価調査票」の一部を評価し、教員に対し指導助言を行うことができる。

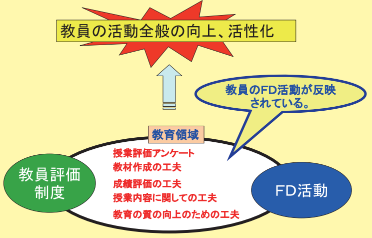
5 教員評価制度　組織および関係図・評価手順



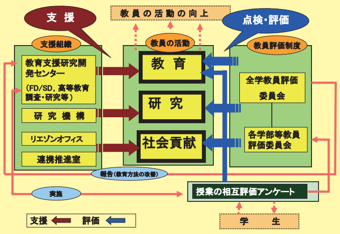
6 授業評価アンケート結果の教員評価への利用



7 教員評価制度とFD活動の接合



8 教員の質向上の取り組み図



Kyoto Sangyo University 京都産業大学

京えふでFD
～FDの風は京都から～

「表現の大学」の戦略的FD

京都精華大学では、2008年度から基本戦略
「教学改革2012～時代を牽引する表現の大学へ～」(Kyoto-Seika Strategy-2012【KSS-12】)を策定し、
2012年までの戦略構想を基に、ビジョンの実現に向けてFD活動に取り組んでいる。

【ミッション・ステートメント】
常に新しいことに
チャレンジし続ける表現の冒険者を
社会に送り出す

【ビジョン】
創造を追求する芸術・デザイン・マンガと
人間の総合学である人文学部が融合した
「表現の大学」を目指す

【表現とは?】
自己の思想・感情・思考を他者に投げかけ、
新しい文化や社会、
人間存在を作り上げていく行為

戦略の骨子

「表現の総合大学」を実現するための重点課題

共通教育の改革

共通教育センターの2つのmission

①4学部(芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、人文学部)が存在するメリットを最大限に発揮するとともに、効率的な組織運営をはかるために共通教育(教養含)の開発とカリキュラムの総合化・融合化をおこなう
②学部を融合した教育プロジェクトを企画・運営する

教育推進センターを改組し、
『共通教育センター』の設立 (2009.4)
●導入教育部門　●日本語リテラシー教育部門
●語学教育部門　●資格課程教育部門

課題

センター自身による体質・機能改善
前身である教育推進センターの、人文学部開講科目の分担運営という特命遂行的性格から、4学部の組織的な教育改善をサポートするFD推進支援組織ならびに「共通教育」カリキュラムを担う教学組織への自己機能改善

課題解決のポイント

1.ロードマップ

2009年度~2011年度:
2つのmissionを実現させる「教学組織」へ向かう移行期(3年間)

◎2009年度“継続的フェーズ”
●教育推進センターの枠組みと体質を継承
新体制による人文学部開講科目の分担運営
自己点検のための年報(『教育年報』)発行

◎2010年度“見直し的フェーズ”
●共通教育センター業務の2つの観点(「共通教育」と「FDサポート」)からの見直し
●人文学部開講科目分担運営の役割から、初年次教学をサポートする組織への機能改善

〔共通教育センターと人文学部との分担運営〕

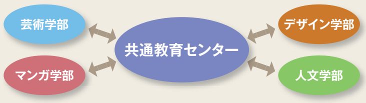
共通教育センター ⇔ 連携・協働 ⇔ 人文学部

初年次教育コア科目 運営
●導入教育部門
●語学教育部門
●日本語リテラシー教育部門
教務課案件対応
学生課案件対応

◎2011年度“展開的フェーズ”
●4学部の教学サポート体制確立と共通教育カリキュラムの策定
名称変更予定:導入教育部門 ⇒ 導入教育支援部門

2.組織側面

組織的触媒性のUP



3.部門側面

◎導入教育部門
●4学部のユニバーサル化に伴う教育改善への連携サポート
●共通教育カリキュラムとしてのFYEの教育内容の検討と開発

◎日本語リテラシー教育部門
●日本語リテラシー教育の共通教育カリキュラムとしての教育内容の開発

◎語学教育部門
●語学教育の共通教育カリキュラムとしての教育内容の開発

4.センタースタッフ(教員・職員)のFD側面

◎Partner-ship
●信頼関係を構築するためのコミュニケーション能力の涵養

◎Supporter-ship
●積極的に「支援」を行える行動力の涵養

◎Professional-ship
●問題解決のベースとなる専門性の獲得

Kyoto Seika University 京都精華大学

京えふでFD
～FDの風は京都から～

「教育開発支援助成制度」の運用と成果

1. 目的

授業内容・授業方法の改善や検討、分析、記録・公開、ツール開発などの事業を助成し、本学の教育力の向上を図る。個人または複数の科目担当者レベルのみではなく、学部・学科・コース等での取り組みについても助成の対象とし、組織的な教育開発の推進を図ることも目的としている。

2. 応募資格

本学専任教員とする。申請は、個人または複数の科目担当者、及び学部・学科・コース単位でも可能。

3. 応募条件

①授業内容・授業方法等の改善を行い、教育力の向上に寄与する取り組みであること。
②単年度申請を基本とする。
③助成費の使途は、図書費、資料費、印刷製本費、複写費、通信費、消耗品費、旅費交通費、講師料とする。

4. 助成予算および助成額

助成費総額は年間200万円とし、1件あたりの助成費は年間20万円を上限とする。

5. 応募方法

教育開発計画書を担当事務局（企画広報課）に提出する。応募締切は、助成を受ける前年度12月末日とする。

6. 選考方法

自己点検・評価委員会で審議の上、学長が決定する。

7. 報告書の提出

助成費を受給した者は、助成を受けた次年度4月15日までに報告書を学長に提出するものとする。また、公開授業や報告会等の方法により、事業の成果を公開することができる。

8. 実績

2008年度より実施し、過去3年間に28件が採択された。

教育開発支援助成費採択テーマ一覧

2008
【9件】
- 多読を通しての英語力の増強
- JSL国語科の観点を取り入れた国語概論の授業のための映像補助教材の開発
- 研究入門ゼミIの学科教材の作成
- 世界史コースにおける基礎的歴史理解のための教育開発（2回生の基礎ゼミを中心に）
- 陶芸のプロからほんものを学ぶ―「土で作る」―
- 自然と社会に対する科学的な認識の内容と方法の基礎を育てる教科教育法のプログラム開発
- 講義「経済学概論I」および「経済学概論II」の教科書づくり
- 新カリキュラム用看護学部創作事例教材作成―『橘 薫（たちばなかおる）の一生』
- 看護学部　新カリキュラムにおける初年次教育のあり方検討会（学部FD）活動成果報告作成

2009
【9件】
- 学生の学科志望理由と学力―学生の期待に応える教育課程の開発をめざして―
- ワークシートを活用した初年次教育　基礎演習I（マ）における初年次教育の開発
- 現代ビジネス学部都市環境デザイン学科授業「京都の歴史と文化」の教材製作
- まちづくりの専門学習やフィールドワーク調査のための、基礎学習教材の作成（「専門演習」等での専門研究やフィールドワーク調査活動をする学生のための事前学習教材）
- 1回生と3回生との共同作業による新入生を対象とした「学びのガイドブック」の作成
- オープンソース・ソフトウェアを利用した教材作成システム（配布資料・提示資料・Web資料の統一的作成）の開発
- 1回生を対象とした建築およびインテリアデザイン入門のための補助教材作成
- 看護学部　新カリキュラム科目の運営方法の検討（学部FD）活動成果報告作成
- 国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究―多文化共生社会型看護教育―

2010
【10件】
- 「日本語表現I・II」の教材開発
- 教育演習I・II・III・IVでの3、4回生合同教育プログラム開発
- ワークシートを活用した初年次教育
- 多読を通しての英語力の増強
- 演習で学ぶマーケティングリサーチの教材の制作
- 学部・学科・回生横断の相互交流によるボトムアップ型キャリア教育開発
- 救急救命実習における臨床観察能力の向上を目的とした教材開発
- 看護学部オリジナル教材「橘 薫（たちばなかおる）の一生」の可視化
- 新カリキュラム科目の運営方法の検討（学部FD）活動成果報告書作成
- 看護実践力向上のための看護学技術演習の評価

3年間の成果物の一部

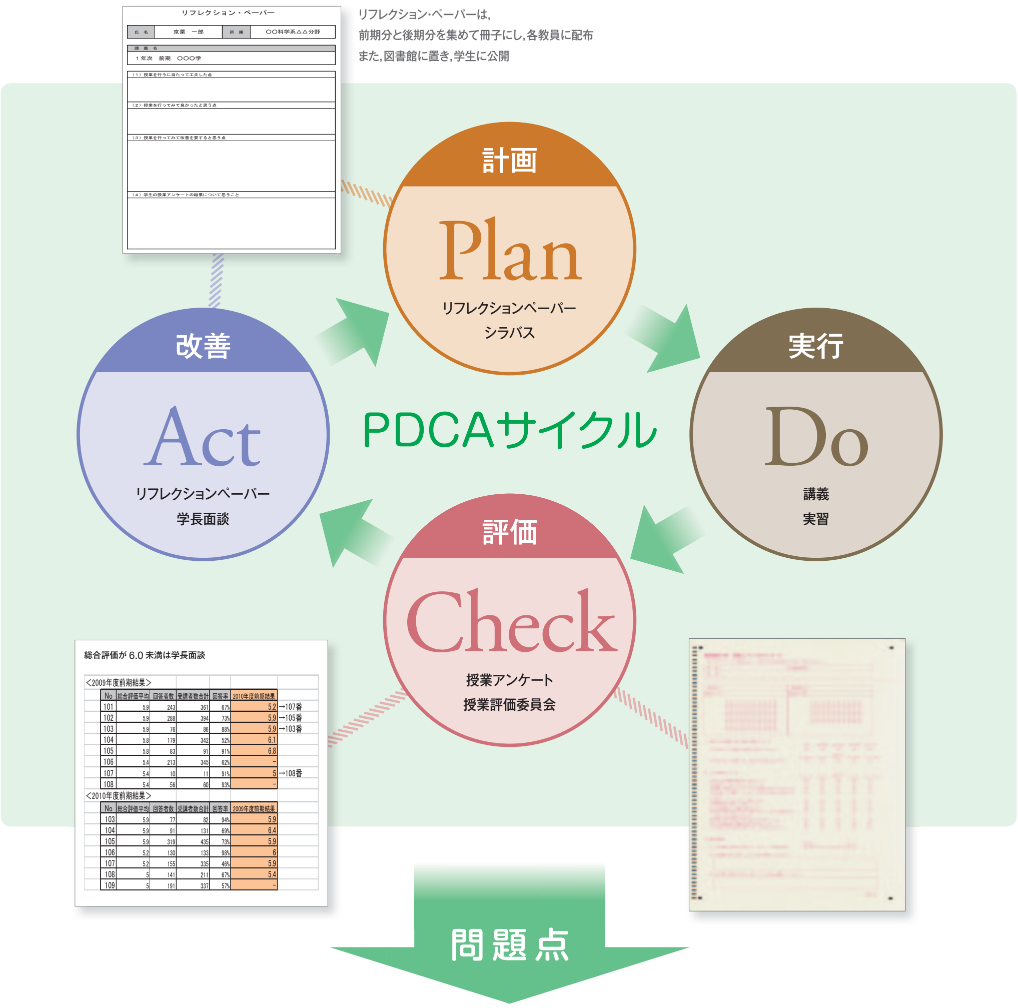
今後の課題

3年間蓄積してきた成果を、全学で共有化し、活かす方法を検討していきたい。

Kyoto Tachibana University 京都橘大学

京えふで
～FDの風は京都から～

京都薬科大学におけるFDの取り組み



総合評価が 6.0 未満は学長面談

<2009年度前期結果>

No	総合評価平均	回答者数	受講者数合計	回答率	2010年度前期結果	
101	5.9	243	361	67%	5.2	→107番
102	5.9	288	394	73%	5.9	→105番
103	5.9	76	86	88%	5.9	→103番
104	5.8	179	342	52%	6.1	
105	5.8	83	91	91%	6.8	
106	5.4	213	345	62%	－	
107	5.4	10	11	91%	5	→108番
108	5.4	56	60	93%	－	

<2010年度前期結果>

No	総合評価平均	回答者数	受講者数合計	回答率	2009年度前期結果
103	5.9	77	82	94%	5.9
104	5.9	91	131	69%	6.4
105	5.9	319	435	73%	5.9
106	5.2	130	133	98%	6
107	5.2	155	335	46%	5.9
108	5	141	211	67%	5.4
109	5	191	337	57%	－

●信頼性の問題

アンケートの回数を重ねるごとに，回答率が落ちる。

●深海魚問題

総合評価の悪い教員は，学長面談があっても，改善が見受けられない傾向にある。2009年度と2010年度で，違う学生がアンケートに記入しているにもかかわらず，改善要望点に全く同じ文言が並んでいた。

●情報公開の問題

個人情報等の理由から，授業評価アンケート集計結果などの書類を公表できない。

Kyoto Pharmaceutical University 京都薬科大学

京えふでFD
～FDの風は京都から～

学生

【学生:235人(男199人、女36人)】

人文学部

●仏教学科
●社会福祉学科

特色
少人数運営だから
顔と名前が一致する!
⬇
きめ細かな
対応が可能

特色
社会人の
在籍比率が高い!
⬇
大学側への要望が
具体的で直接的

教員

【専任:23人(非常勤50人)】

教員間での情報の共有化

教員間の情報共有により、履修指導等に全教員が対応可能
授業では「ふるいおとす」のではなく
「救いあげる」というスタンス
⬇
個々の学生の個性を尊重しながら、
学生の学びを支える

職員

【職員:13人】

事務職員間での情報の共有化

「部署割」ではなく事務室全体で窓口対応
学生の履修状況や出欠状況など
学生個々の情報を全職員が把握
⬇
適切なタイミング・方法での
学生生活全般のサポートを実施

教員と事務の細かな相互連携により、学生の学修の質向上を目指す!

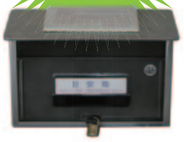
FD

学生からの相談や意見に素早く的確に
対応することを常に心がける
⬇
教職員としてのスキルアップにつなげる

SD

直接、相談や意見が言えない学生の増加 ➡ より多くの学生の声を反映させた学習環境や教育環境の改善を目指そう!

さらに一歩進んで
目安箱の設置



投かんされた内容を部署毎に分別
⬇
公式の会議(教授会など)で議論
⬇
内容を選別し、掲示板で学内に発信

具体的には

【6月下旬】　図書館開館時間を延長して欲しい
⬇
【9月下旬】　開館時間の改正
9:00~17:00 → 9:00~18:00

今後の展望

「超」がつくほどの小規模大学の特徴である「学内みんなが顔見知り」という環境を生かしたFD。学生の学修や生活状況の情報、教授法についての情報などについてFDに関する規則や委員会での活動にこだわらず、教職員間で日常的に話題とする「いつでも、誰でもFD」が種智院大学のFD文化として育つことを目指す。

Shuchiin University　種智院大学

京えふで FD
～FDの風は京都から～

龍谷大学 大学教育開発センター「自己応募研究プロジェクト」「指定研究プロジェクト」について

大学教育開発センターとは

龍谷大学では、さらなる教育活動の充実を図るため、「大学教育開発センター」をFD活動の中枢機関として位置づけている。センターは「教育活動支援機能」「教育活動交流研修機能」「教育活動研究・開発機能」の3つの機能を有し、本学の教育活動の向上に資するFD事業を推進している。

●龍谷大学のFDの定義

各教学責任主体※が掲げる、建学の精神にもとづいた教育理念･目標を達成するための組織的･継続的な教育の質及び教育力の向上を目指したすべての取り組み。

具体的には、

① 各教学責任主体が主体的・組織的に行う教育改善活動
② 教員集団・教員個々が日常的に行う授業方法や内容の改善のための活動
③ 大学教育開発センターが全学的に行う教育改善活動及び各教学責任主体や教員個々人の教育改善 活動の支援などのことであり、これらの活動は教員と職員が協働し、学生の協力を得て多面的かつ総合的に行うものである。

※学部・学科・研究科・課程・コース等の教学に責任を負う主体のこと

自己応募研究プロジェクトとは

自己応募研究プロジェクトは、学部･大学院の教育改革を推進する一環として、学内の個人またはグループに対し、教育全般、及び授業・教材等の研究開発を奨励し、その結果を公開することを目的とするプロジェクトで、1998年度から始まっている。

年　度	2006	2007	2008	2009	2010
PJ選択件数	10件	6件	9件	5件	7件

2010年度自己応募研究プロジェクトテーマ一覧

●学部FD関連：6件

テーマ	代表者（所属学部）
① テキスト『超入門メディア・ライティング』の作成	小黒純（社会学部）
② 客観式・主観式採点方法差異による成績評価関連性検証	角岡賢一（経営学部）
③ 高校から大学への情報教育の効果的接合を目指して	寺島和夫（経営学部）
④ 本学でのe-ラーニングの普及と革新	李洙任（経営学部）
⑤ 精度の高いテストの研究	樋口三郎（理工学部）
⑥ 宗教文化教育の充実化を目指して ～その方策の一つとしての宗教文化士メニューの可能性～	高田信良（文学部）

●大学院FD関連：1件

テーマ	代表者（所属学部）
① 臨床心理学訓練におけるスーパービジョンの効用	森田喜治（文学部）

教員グループ ← 募集 ― 大学教育開発センター（応募内容の審査）
教員グループ ― 応募 → 大学教育開発センター

↓ 採択、経費の支援

各プロジェクトによる研究の推進

指定研究プロジェクトとは

指定研究プロジェクトは、より教育効果の高い教育を実践するための基盤づくりを進めることを目的とし、本センターが指定する教育活動に関するテーマについて研究開発を行うプロジェクトで、2004年度から始まっている。その成果については、学内教学政策の実現に向けて活用している。

年　度	2006	2007	2008	2009	2010
PJ選択件数	2件	3件	3件	5件	3件

2010年度指定研究プロジェクトテーマ一覧

テーマ	代表者（所属学部）
① 学生の自習を促進するための方策の研究（継続2年目）	岩本太郎（理工学部）
② FDとSDの支援と開発 ～教職協働モデル、プログラムの開発～（継続2年目）	林久夫（理工学部）
③ 学習意欲喚起や動機付けへの提言（継続2年目）	吉川悟（文学部）

大学教育開発センター　研究テーマの検討・設定

↓ 研究者の選定・依頼

各プロジェクトによる研究の推進

学内政策実現に向けた研究成果の活用

研究成果を学内外へ発信

自己応募、及び指定研究プロジェクトの研究成果は、3月に開催する研究発表会で報告するとともに、報告書として冊子にまとめている。冊子については学内教職員に配付するとともに、他大学・機関へ送付している。

自己応募・指定研究プロジェクト研究発表会の様子
（2010年3月5日開催）

Ryukoku University 龍谷大学

京えふでFD ～FDの風は京都から～

池坊短期大学 FD活動

新制度「プチウィーク」を導入

■従来の「FD公開授業制度」の問題点

- ●授業見学までの手続きや申請が煩雑
- ●授業見学時間（90分または180分）の確保が困難
- ●見学報告後のレポート提出義務付けによる負担
- ●原則随時授業公開をしているが、制度自体が形骸化

問題点を精査し、2009年4月から公開授業制度の強化期間として

新制度『プチウィーク』を導入

■プチウィーク制度の概略

1.制度開始
2009年4月～

2.目的
- ●教学内容の改善・充実をはかるため
- ●教職員相互での情報共有化に努めるため
- ●教学に関する広く客観的な意見を聴取するため
- ●フィードバックによる自己点検

3.公開対象科目
全科目

4.見学可能者
本学に勤務する全教職員（非常勤講師含む）

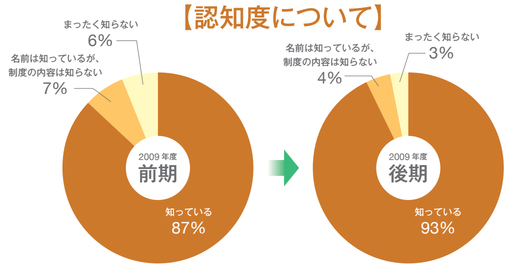
5.公開期間
半期ごとに3週間

6.公開時間および見学時間
見学時間の制限は設けない

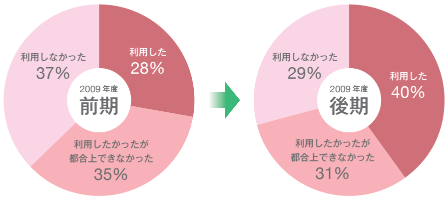
7.その他
- ●プチウィークの期間中は、授業見学の事前申請は不要で自由に出入り可
- ●授業見学後は、簡単なアンケートにて、参加状況や感想およびコメントを報告
- ●授業見学後の感想は、科目担当者へフィードバック

プチウィーク実施後のアンケート調査結果

【認知度について】



【利用状況】



実施を試みて（自由記述式アンケート調査からみたFD委員会の見解）

- ・全学的授業傾向の把握に効果がある
- ・授業研究の相互効果が期待できる
- ・空いている時間を利用しやすい
- ・気兼ねなく見学にいける
- ・授業に関する悩みを軽減できる
- ・教学内容の改善・充実をはかることができる
- ・教職員間で温度差がある
- ・授業の一部のみを見学することで生じる誤解や理解不足に関する懸念
- ・見学者入室による学生の集中力の低下（注意散漫になる）

今後の展開と課題

- ・プチウィーク制度の実施1年目は、制度を全学的に周知することが目標であったため、その点では概ね達成できたといえるが、新任教職員含め、非常勤講師のさらなる周知の徹底が必要
- ・2年目以降は、授業評価アンケート結果との検証が必要
- ・制度導入後による効果の検証と実証が必要
- ・授業評価アンケート結果が低評価の教員に対する制度利用の働きかけ

※半期ごとに課題点の把握・検討・実施・評価・改善を繰り返しつつ、抜本的な制度改革は行わず、概ね現行の制度で3年間は継続して実施する予定。

Ikenobo Junior College 池坊短期大学

京えふでFD
～FDの風は京都から～

総合基礎演習を通じた学びのサポート

建学の精神

生命の尊さを深く理解し、素直に感謝のできる社会人を育成する。

1年生の顔が見えない
↓
休・退学者を減らしたい

教員団共通の問題意識

2年生（最終年度）の学びを
より深いものにするには
↓
充実した学生生活を
提供したい

総合科目

「建学の精神」を実現するためのプロローグ

人間と佛教 I・II

総合基礎演習 I・II

人類に共通する諸課題を任意に設定し、学生の課題探求に対する主体性・創造性を育むとともに、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力当の向上を目指す。

導入教育として担当教員と受講学生相互の親密な交流の元に、興味・関心・課題をもって学習すること、学生生活を送ることへの動機づけを図る。

教員が共有する6つのポイント!

- 少人数制
- 課題は教員の任意
- 討論 フィールドワーク中心
- 2年時 演習への STEP
- 能動的な学習
- 担当教員は学生生活全般のアドバイザー

成果
教員と学生との接点が増加、
2年間を通じてのきめ細かい指導が可能に。

課題
ミスマッチの解消。
授業内容の教員間でのリフレクション。

Kacho Junior College 華頂短期大学

FDシステム検討ワーキンググループ　2010年度活動記録

WGメンバー

深田　　守	京都薬科大学	情報処理教育研究センター　教授［WGリーダー］
行廣　隆次	京都学園大学	人間文化学部　准教授
髙井　康弘	大谷大学･同短期大学部	文学部　教授
酒井　浩二	京都光華女子大学	キャリア形成学部　准教授
坂井美也子	池坊短期大学	環境文化学科　専任講師
大塚　雄作	京都大学（大学コンソーシアム京都）	高等教育研究開発推進センター　教授
［事務局］		
深野　政之	京都FD開発推進センター	専門研究員 ※2010年11月30日退職
川面　きよ	京都FD開発推進センター	専門調査員 ※2010年12月1日より専門研究員
中島　弘喜	大学コンソーシアム京都	次長
北山　広喜	大学コンソーシアム京都	主幹

2010年度の活動方針

《FDシステムの最終構築と保守方針決定》

・クリッカー、WEBアンケートシステム等の様々なICT技術を、連携大学が共通して利用できるシステムとして紹介し、活用事例を広げていく。

・補助事業終了後の運営方法および機器リプレイスを含めた保守方針を決定する。

2010年度の活動報告

1）連携大学全教員意識調査の実施（2回のWEBアンケートとアンケート回答分析）

放送大学ICT活用･遠隔教育センター（旧メディア教育開発センター）のWEBアンケートシステム REAS（リアルタイム評価支援システム）を利用して、昨年度の2回に引き続き、2010年9月に第3回、2010年12月に第4回の2回の教員意識調査を行った。

教員意識調査の集計結果と本WGによる分析については別添資料を参照していただきたいが、第3回は職務全般に対する教員の意識を問うもので194名（回答率約8%）から回答を得た。第4回には「教育改善に向けたICTシステムの活用」をテーマに意識調査を行い134名（回答率約6%）から回答を得ることができた。

① REASシステムの検証、REAS学習会の開催

WEBアンケートシステムの試用によるシステム検証という本WGの第一の目的は、4回の意識調査によって達することができた。REASシステムはアンケートの作成と回答依頼・集計機能に秀でており、さらに回答者にとっても分かりやすいシステムである。2010年11月19日にはREASシステムの開発・運用を担当している放送大学ICT活用・遠隔教育センターの芝崎順司氏を講師に迎え、WG主催の学習会を実施した。

本WGによるREASシステムの紹介により、連携大学での授業や大学コンソーシアム京都における行事の参加者アンケートに活用する事例も見られた。

② テキストマイニングによる分析

自由記述回答の分析には、野村総研のTrue Tellerというテキストマイニングシステムを利用した。頻出単語の抽出と係り受けの表示により、回答のおおまかな傾向と特徴的な意見分布を把握することができる。

回答者数が200～300名であり、さらに自由記述回答は記入実数が少ないためにTrue Tellerの本来の性能を生かしきれてはいないが、ICT技術の活用による連携大学教員のFDに関する意識把握という、本WGの第2の目的を果たすことができた。

2）クリッカー・授業収録装置による授業支援の実践

2008年度に導入したPF-NOTEシステムと、その簡易版であるEduClickシステムを利用して、2010年度は2大学の3つの授業において授業実践（試用）が行われた。

具体的な使用方法・成果については、2名の授業担当者による報告に詳述されている。

3）SNSの開発と活用

2010年3月よりシステム運用会社に委託して、毎日の大学関連ニュース配信とコミュニティー活性化支援、「はじめてページ」の作成を行った。はじめてページは、「SNSって何?」「日記を公開する」「写真を共有する」「マイページを持てる」などのコンテンツを、動画を使って分かりやすく解説しており、SNSを使ったことの無い教職員の参加者増を期待している。

補助金事業終了後の大学コンソーシアム京都に加盟する50大学へのFD連携活動拡大を契機として、広く京都の大学教職員に「京えふでSNS」を活用してもらえるよう、さらなるコンテンツの充実と豊富な情報提供が必要である。

4）eポートフォリオ実態調査

2010年3月、京都大学でMOSTの運営に携わっている大山牧子氏（京都大学教育学研究科）に「eポートフォリオ実態調査」を委嘱した。3月末に報告書が提出され、WGに先立って調査結果の報告会を行った。WGメンバー以外にも4名の連携大学教職員の参加があり、充実した内容の報告が行われた。質疑応答では計20名の出席者から、自大学でのeポートフォリオ活用の報告や、イギリスで使われている事例紹介も出され、有意義な学習の場となった。

WG議題

第1回FDシステム検討WG

2010年4月15日(木)18:30〜20:40　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【調査報告会】

「eポートフォリオ実態調査」　報告者:大山牧子氏　京都大学教育学研究科・大学院修士課程院生

【報告事項】

1. センター活動報告・活動予定
2. 京都FDer塾、執行部塾予定

【検討事項】

1. 2009年度事業報告書のWG活動記録(案)
2. 第2回連携校全教員対象アンケート結果分析
3. 連携校全教員対象アンケート結果分析の学会報告
4. SNS運用支援について

第2回FDシステム検討WG

2010年5月20日(木)18:30〜20:05　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告・活動予定
2. 第1回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. 海外FD研修の募集
5. TRUE TELLER個別分析相談会(5/26)

【検討事項】

1. 第2回連携校全教員対象アンケート結果分析
2. 連携校全教員対象アンケート結果分析の学会報告
3. 次回の連携校全教員対象アンケートについて
4. SNSはじめてページ
5. クリッカー授業実践の募集

第3回FDシステム検討WG

2010年6月17日（木）18：30～20：00　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第1回センター会議･第2回FD連携運営委員会（合同会議）報告
3. 他WG進捗状況報告
4. クリッカー授業実践報告（京都光華女子大学）

【検討事項】

1. 第2回連携校全教員対象アンケート結果分析
2. 第3回連携校全教員対象アンケート〔教員満足度〕
   ・設問案の検討、連携校への依頼状、参考資料

第4回FDシステム検討WG

2010年7月22日（木）18：30～20：15　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第3回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. 日本教育工学会発表の延期について
5. センター事務室の移転（5階⇒6階）

【検討事項】

1. 第3回連携校全教員対象アンケート〔職務全般〕について
   ・連携校への依頼状、設問案の検討
2. クリッカー授業実践（貸出）について

第5回FDシステム検討WG

2010年9月17日（金）18：30～19：40　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第4回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. 第3回連携校全教員対象アンケート〔職務全般〕の依頼

【検討事項】

1. 第4回連携校全教員対象アンケート〔ICT活用〕の設問案の検討
2. 学習会の開催について

第6回FDシステム検討WG

2010年10月21日(木)18:30〜20:05　キャンパスプラザ京都　応接室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第5回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. 京都FDer塾ポスター制作の依頼
5. FDセミナーと最終事業報告会の件
6. FDフォーラム　ミニシンポジウム企画の件

【検討事項】

1. 第3回教員意識調査(職務全般)
   a. 結果報告、b. 分析の方針･分担
2. 第4回教員意識調査(ICT活用)
   a. 設問案の検討、b. 実施日程
3. その他(REAS学習会の日程調整)

第7回FDシステム検討WG

2010年11月19日(金)18:30〜20:45　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

◆REAS学習会:

講師:芝崎順司氏(放送大学ITC活用･遠隔教育センター　准教授)

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第2回センター会議･第6回FD連携運営委員会(合同会議)報告
3. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. 第3回教員意識調査(職務全般)の結果分析について
2. 第4回教員意識調査(ICT活用)の設問案について
3. 事業評価のためのWG活動報告について

第8回FDシステム検討WG

2010年12月16日(木)18:30〜20:00　キャンパスプラザ京都　第3共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第7回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. 第3回教員意識調査(職務全般)の結果分析について
2. 第4回教員意識調査(ICT活用)の進捗確認および結果分析について
3. 第2回FDセミナー(最終事業報告会)におけるWG報告について

第9回FDシステム検討WG

2011年1月20日(木)18：30〜20：00　キャンパスプラザ京都　第3共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. 第3回教員意識調査(職務全般)の結果分析について
2. 第4回教員意識調査(ICT活用)の結果分析について
3. 第2回FDセミナー(最終事業報告会)のWG報告について

第10回FDシステム検討WG

2011年2月10日(木)18：30〜20：00　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第8回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. 第4回教員意識調査(ICT活用)の結果分析について
2. 第3回教員意識調査(職務全般)の付録データについて

第11回FDシステム検討WG

2011年3月11日(金)18：30〜20：05　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第9回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. 第4回教員意識調査(ICT活用)の結果分析について
2. 学会発表について

第2回連携大学教員「授業改善に関する連携大学教員意識調査」の結果（2010年3月実施）

はじめに

前回の調査では授業評価アンケートに対する教員の意識を調査し、授業評価の結果を授業改善につなげる意識は概ね高いという結果が出ました。今回の調査の主な目的は（1）教員個人としての授業改善に関する取り組みの現状と意識を把握し、（2）授業改善の方法を連携校教員と情報共有する、の2点です。

本調査は放送大学ICT活用・遠隔教育センター（旧メディア教育開発センター）のWebアンケートシステム REAS（リアルタイム評価支援システム）を使って実施しています。また質問項目（8）（10）の定性項目のデータ分析は、テキストマイニングソフト「True Teller」（野村総研）を利用しています。

1. 基礎データ

回答者数	201名（回答率　8.7%）
性別	男性75%、女性25%
年齢	30代21%、40代27%、50代32%、60代以上21%
職位	教授50%、准教授28%、専任講師13%、助教･助手7%、その他1%
授業経験年数	5年未満17%、5年以上～10年未満20%、10年以上～20年未満27%、20年以上35%

2. アンケートの回答（定量項目）

1. 定量項目の分析

各項目に関して、以下の3点を簡潔に述べる。

結　果：5段階評価の項目（1）（6）（7）（9）（11）は、「強くそう思う」「そう思う」など上位2段階を含めた肯定評価の割合（%）。複数選択可の項目（2）（3）（4）（5）は、本文では40%以上の選択肢のみ表記。

検討点：質問項目に関して、本システム検討WG による今後の検討が望まれる点（必要な項目のみ）

（1）日常的に授業改善を意識していますか?

結　果：約99%の教員は授業改善を意識して授業に取り組んでいる。

（2）授業改善をしようと思い立ったきっかけは何でしたか?

結　果：授業改善は、組織的な働きかけより自分で必要と気づく教員が多く、また受講生からの意見で気づく場合も多い。

検討点：各教員が個々に授業実践を自省して改善する機会の創出。気付いた時の組織的なフォロー、サポート体制。

（3）授業の手法等で、どのような工夫をしていますか?

結　果：授業の手法の工夫として、プリントを工夫し、学生の理解度を考え、授業進行と話す速度を考慮している。

検討点：授業手法の工夫アイデア集の作成

(4) 対話型授業を取り入れていますか?

結　果：対話型授業の導入として、発言を促す、質問･感想を書かせるなどを工夫している。講義系の授業で受講生が情報発信する機会を設定している教員は5割弱である。

検討点：学習の動機づけと学習効果が高まるような(一授業形態としての)対話型授業のモデル提示

(5) どのような方法で授業外学習を促していますか?

結　果：授業外学習として、個別あるいはグループでの課題を出す、図書館等の利用などで工夫している。

検討点：受講生の学習効果が高まるグループ課題の内容や取り組み方

(6) ご自分の授業改善のための努力は、効果が上がっていると思いますか?

結　果：設問(1)では99%の教員が授業改善に取り組んでいるとの結果であったが、自らのその効果が上がっていると考える教員は約63%である。

(7) ご自分の授業で、今後さらに改善が必要だと思いますか?

結　果：設問(6)では約63%の教員が授業改善の効果が上がっていると考えているが、約91%の教員がさらなる教育改善が必要と考えている。

検討点：授業改善の助言や情報を提供する組織運営

(9) 授業改善について教員同士が相談しあうことが必要と思いますか?

結　果：設問(1)(6)では9割以上の教員が授業改善を意識しているとの結果が出ており、さらに約74%の教員は教員同士で相談することを必要と考えている。

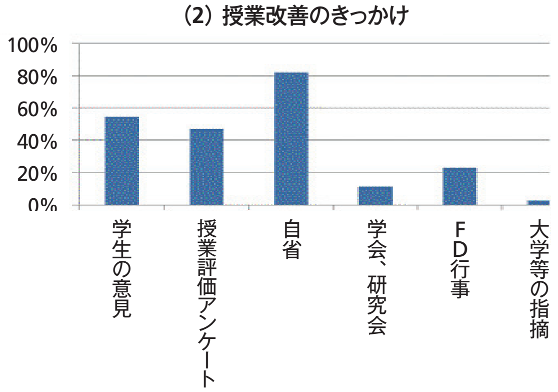
検討点：教員同士がボトムアップ的に授業改善について相談しあう場や土壌の構築

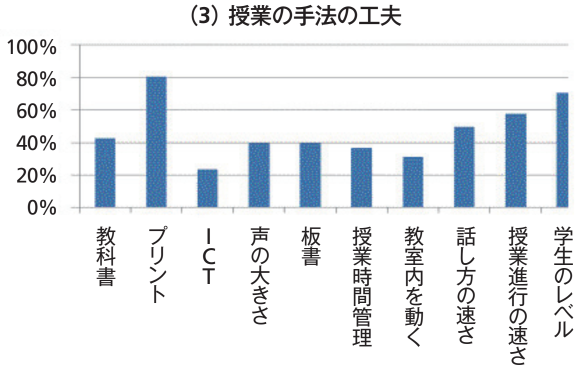
(11) 授業改善に関して、職員(事務職員等)の協力が必要だと思いますか?

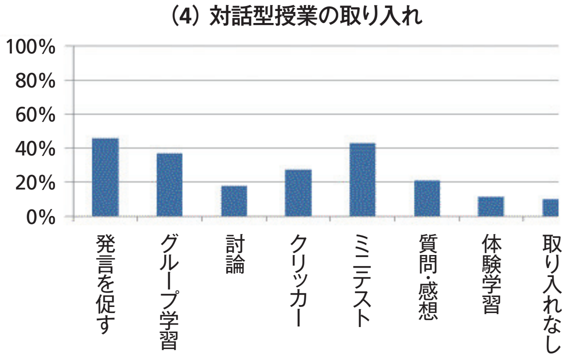
結　果：約63%の教員は、授業改善に職員の協力が必要と考えている。

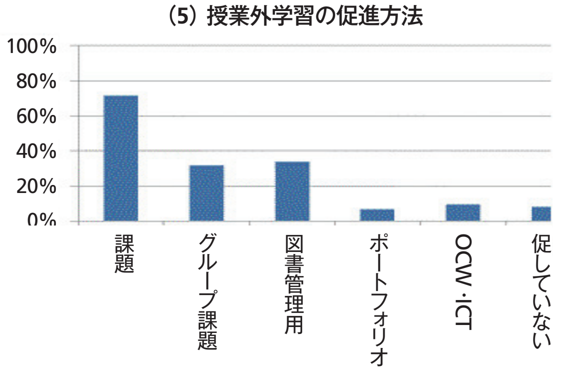
検討点：授業改善に向けた教職員の協調体制、協力する業務内容の仕分けと調整

以下、複数選択可の項目(2)(3)(4)(5)の結果をグラフに示します。









3. アンケートの回答（定性項目）

ここでは自由記述を求めた項目（8）（10）（12）への回答を、テキストマイニングソフト「True Teller」（野村総研）を使って分析した結果を報告します。

分析対象とした項目と回答数
（8）ご自分の授業で、今後どのような改善が必要だと思いますか?
（10）組織的に授業改善を進めるためには、どのような取り組みが必要だと思いますか?
（12）授業改善に関して、職員（事務職員等）に協力を求めたいことは何ですか?
201名の回答者のうち、項目（8）に125件（62%）、項目（10）に118件(59%)、項目（12）に91件（45%）の回答がありました。

頻出単語と話題
3つの項目に対する回答で、頻出した名詞を表1・表4・表7に示しました。ここでは主な話題を抽出することを目的としたため、内容に直接関わることの多い名詞のみを分析対象としています。また以下ではさらに、頻出単語のうち特に分析が必要と考えられる単語と係り受け関係のある単語（名詞･形容詞･動詞）を分析しています。

項目（8）「ご自分の授業で、今後どのような改善が必要だと思いますか?」
どのような授業改善が必要だと考えるかを尋ねた項目（8）では、1番に「学生」（69件）が現れており（表1）、授業改善は学生を中心に考えられていることが示唆されます。表2には「学生」に対する係り受けとして出現している単語を示しました。全体でも頻出単語に現れている「レベル」「意欲」「興味」「関心」「理解度」等の単語が「学生」とともに使われている場合が多く、その他の学生に対する係り受けとあわせ、授業改善が学生にあわせることによって考えられていることが読み取れます。
他の出現単語のうち質問文に含まれる単語（授業･必要･改善）またはその類義語（工夫･講義）は、記述されるのが当然ですので分析対象から除きます。さらに上記の「学生」と関係の深い語以外の頻出単語として「内容」（19件）を取り上げました。「内容」に対する係り受け（表3）を見ると、その「改善」「工夫」といったある意味で出現するのが当然の表現の他に「減らす」「絞る」「取捨選択する」といった単語が現れており、内容を絞って授業を構成しようとしている教員が一定数あることが推察されます。

項目（8）「ご自分の授業で、今後どのような改善が必要だと思いますか?」

表1 項目(8) 頻出単語（名詞のみ）

No.	単語	頻度	件数
1	学生	89	69
2	授業	63	48
3	工夫	26	24
4	内容	24	19
5	レベル	19	15
6	意欲	15	15
7	講義	16	13
8	必要	15	13
9	改善	15	12
10	課題	10	10
11	興味	11	9
12	学習	9	8
13	関心	9	8
14	対話型	9	8
15	理解度	8	8
16	それ	7	6
17	教材	8	6
18	テキスト	6	5
19	学力	6	5
20	時間	6	5
21	板書	5	5

表2 項目（8）「学生」との係り受け

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	レベル	名詞	8	8
2	理解度	名詞	7	7
3	意欲	名詞	5	5
4	関心	名詞	3	3
5	興味	名詞	3	3
6	参加する	動詞	3	3
7	取り組む	動詞	3	3
8	ない	形容詞	2	2
9	ニーズ	名詞	2	2
10	意見	名詞	2	2
11	異なる	動詞	2	2
12	考える	動詞	2	2
13	持つ	動詞	2	2
14	示す	動詞	2	2
15	理解する	動詞	2	2
16	あげる	動詞	1	1
17	ある	動詞	1	1
18	いる	動詞	2	1
19	つく	動詞	1	1
20	もつ	動詞	1	1

表3 項目（8）「内容」との係り受け

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	つなげる	動詞	1	1
2	ない	形容詞	1	1
3	ポイント	名詞	1	1
4	みる	動詞	1	1
5	わかる	動詞	1	1
6	引く	動詞	1	1
7	改善	名詞	1	1
8	改善する	動詞	1	1
9	確認する	動詞	1	1
10	学習する	動詞	1	1
11	減らす	動詞	1	1
12	工夫	名詞	1	1
13	工夫する	動詞	1	1
14	絞る	動詞	1	1
15	講義する	動詞	1	1
16	合わせる	動詞	1	1
17	持たせる	動詞	1	1
18	取り入れる	動詞	1	1
19	取捨選択する	動詞	1	1
20	授業	名詞	1	1

項目（10）「組織的に授業改善を進めるためには、どのような取り組みが必要だと思いますか?」

組織的な授業改善について尋ねた項目（10）では、頻度1位は「授業」（53件）でした（表4）。「授業」は質問の主題に関わる単語であり、頻出するのが当然ではありますが、非常に頻度が高いためその係り受けを検討しました。表5で最も頻度の高い「授業」–「改善」の係り受けは質問内容そのものですので除いて考えると、「見学」（見る・見学する）「公開」（公開する・公開制度）など授業公開に関わる記述が多くみられることが分かります。そこで、授業公開や模擬授業に関連すると思われる表現を全体から集めたのが表6です。一部に否定的な意見も含まれますが、組織的な授業改善と言ったときに授業公開を考え、かつそれに肯定的意見をもつ教員が、かなりいると考えられます

その他の頻出単語のうち、質問文に含まれる語を除くと、上位には「教員」（41件）や「学生」（18件）があります。しかし、これらの単語はさまざまな異なった使い方がされており、特定の関連したテーマを読み取るのは難しいようです。また「FD」（17件）は、本アンケート実施の趣旨等からして当然と言えますが、組織的な授業改善として各種のFD活動が挙げられています。またここに挙げられたいくつかの単語にまたがって現れるものとして「情報」（意見）–「交換」、「学部」「学科」（単位での，あるいはそれを超えて）の集まりや情報・意見の交換、「話し合い」を組織的取り組みとしてあげた回答も多くみられました。

項目（10）「組織的に授業改善を進めるためには、どのような取り組みが必要だと思いますか?」

表4 項目(10) 頻出単語（名詞のみ）

No.	授業	頻度	件数
1	授業	72	53
2	教員	52	41
3	改善	29	22
4	学生	23	18
5	FD	23	17
6	取り組み	19	16
7	必要	11	11
8	学部	11	10
9	教育	12	10
10	情報	10	10
11	講義	15	9
12	それ	10	8
13	交換	8	8
14	大学	9	8
15	評価	10	8
16	学科	9	7
17	内容	7	7
18	意識	6	6
19	活動	10	6
20	相互	6	6
21	目標	6	6
22	意見	5	5
23	意欲	5	5
24	機会	5	5
25	公開	5	5
26	場	5	5
27	人	6	5
28	組織	6	5
29	話し合い	5	5

表5 項目(10)「授業」との係り受け

No.	授業	品詞	頻度	件数
1	改善	名詞	23	19
2	内容	名詞	6	6
3	行う	動詞	4	4
4	評価	名詞	4	4
5	ある	動詞	2	2
6	見学	名詞	2	2
7	公開	名詞	2	2
8	参観する	動詞	2	2
9	お互い	形容詞	1	1
10	さらす	動詞	1	1
11	すすめ方	名詞	1	1
12	そのもの	名詞	2	1
13	もと	名詞	1	1
14	見る	動詞	1	1
15	見学する	動詞	1	1
16	公開する	動詞	1	1
17	公開制度	名詞	1	1
18	工夫	名詞	1	1
19	構築	名詞	1	1
20	行われる	動詞	1	1

表6 項目(10) で，授業公開に関連した回答（関連部分のみの抽出）

No.	授業
1	模擬授業を実施して改善点を指摘してほしい。
2	相互の授業を見学してコメントを述べる。
3	相互の授業を公開する必要がある。
4	TEAM　TEACHING、お互いの授業を参観する。
5	授業公開制度を活用して、先生方同士の意見の交流を深める。
6	授業を公開し、その職員の意見のフィードバックを通してを授業改善につなげる。
7	教員が学生役をつとめて模擬授業を行い、良い点や改善点を洗い出す。
8	授業公開、模擬授業をもとにしたFD。
9	公開授業
10	お互いに授業参観し合う。
11	お互いの授業見学。
12	研究授業などの実施。
13	【否定】うまい人の授業を見たところで、同じように出来るとは思えません。
14	授業の公開やさらなるFDの取り組みが必要と思う。
15	授業参観、発表会
16	授業見学、改善についての話し合い。
17	教員同士が互いの授業に出席し、意見を出し合う。

表7 頻出単語（名詞のみ）

No.	単語	頻度	件数
1	授業	49	33
2	学生	28	20
3	教員	17	14
4	職員	17	12
5	支援	12	10
6	事務	12	10
7	情報	8	8
8	意見	7	7
9	管理	7	7
10	機器	7	7
11	教育	8	7
12	教室	8	7
13	準備	9	7
14	FD	8	6
15	環境	6	6
16	プリント	6	5
17	改善	5	5
18	協力	5	5
19	教材	5	5
20	現在	5	5
21	大学	5	5
22	理解	5	5

項目(12)「授業改善に関して、職員(事務職員等)に協力を求めたいことは何ですか?」

表7で頻度1位の「授業」(33件)は、質問の主題に関係する単語です。これに続いて頻度が高いのが「学生」(20件)でした。回答の中でさまざまな使い方がされてはいましたが、事務職員に学生との対話や学生の状況把握を求める意見が一定数あることが、質問(12)で「学生」が第2位に来ていることの一つの理由と考えられます。

この項目(12)は、他の2つの自由記述項目と比較して回答数が少ないため高頻度の単語が少なく、個別の頻出語としてはまとまった話題が抽出されにくいようです。しかしながら全体としてみると、授業準備や授業環境の整備に関連した協力を求めている教員が多いことが、「管理」「機器」「教室」「準備」「環境」「プリント」「教材」等の単語に現れています。

4. 全体を通じて

多くの教員が授業の手法、対話型授業の実践、授業外学習などの面で、多様な工夫を凝らして授業改善に取り組んでいるという実態が明確になりました。全体的に「授業改善」に関する肯定評価が非常に強く、99%の教員が授業改善を意識し、91%の教員がさらなる改善の必要性を意識しています。組織的なフォローアップ次第で、授業改善に向けた各教員の意識をボトムアップ的に高め、大学全体のFD活動の活性化へと発展させていくことは可能と解釈できます。また授業改善に対して教員同士の連携は7割程度、職員の協力は6割程度の教員が必要と考えており、効果的な授業改善に向けた教職員の連携・協力の体制づくりが必要と解釈できます。

本調査結果は回答された201名(8.7%)の教員のデータに基づいています。1回目の「学生による授業評価に関する教員意識調査」の14%より若干低い回収率でした。連携校の全教員の傾向を調査結果に反映させるために、今後も回答率を高める努力をする必要があります。

第3回連携大学教員「職務意識調査」の結果（2010年9月実施）

はじめに

本調査は、2009年12月に行った「授業評価アンケートに関する教員意識調査」、2010年3月に行った「授業改善に関する教員意識調査」に引き続き、FD活動を進める上で必要不可欠な、大学教員の業務負担の現状を把握し、職務への充足感を高めるための方策を探ることを目的として実施しました。

なお、本調査では放送大学ICT活用･遠隔教育センター（旧メディア開発教育センター）のWEBアンケートシステムREAS（リアルタイム評価支援システム）を利用して実施しています。また、質問項目（12）の定性項目のデータ分析は、テキストマイニングソフト「True Teller」（野村総研）を利用しています。

1. 基礎データ

回答者数	194名（回答率　8.4%）
性別	男性69%、女性31%
年齢	30代18.5%、40代32.5%、50代29.4%、60代以上19.6%
職位	教授45.9%、准教授30.4%、専任講師18.0%、助教･助手4.1%、非常勤講師0.5%、その他1.0%
授業経験年数	～5年未満 16.5%、5年以上～10年未満 22.7%、10年以上～20年未満 30.9% 20年以上 29.9%

2. アンケートの回答（定量項目）

（1）定量項目の分析

各項目に関して、以下の2点を簡潔に述べる。

結　果：回答割合が85%以上のとき「ほとんどの教員」、70～85%のとき「多くの教員」、50%弱～70%のとき「半数の教員」とした。

検討点：質問項目に関して、本WG による今後の検討が望まれる点（必要な項目のみ）

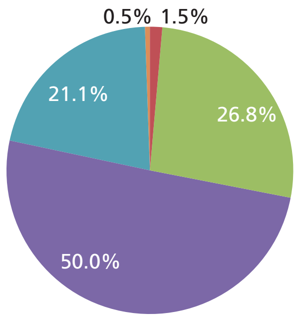
〔教育面の評価〕

1. 現在の授業、教育面の業務量について、あなたはどう思いますか?

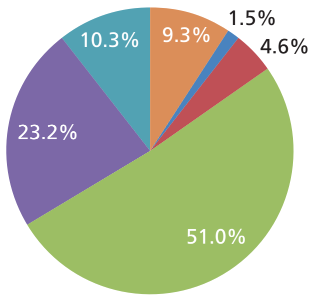
結　果：業務量は71.1%の教員が「とても多い」「多い」と回答しており、他の教員との比較では「とても多い」「多い」は33.5%である。ただし半数が「どちらとも言えない」と回答している。同様に負担感も「とても大きい」「大きい」は半数強（59.8%）であり、学内での不公平感は42.3%が抱いている。当然のことではあるが、業務量に対する認識と負担感はほぼ一致している。

検討点：学内の不公平感の実態把握が必要

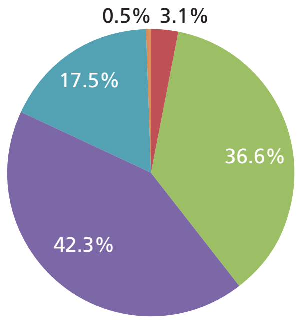
1-（1）
業務量



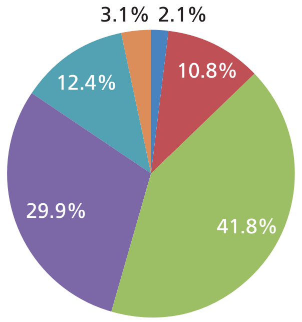
1-（2）
他大学の教員と比べて



1-（3）
負担感

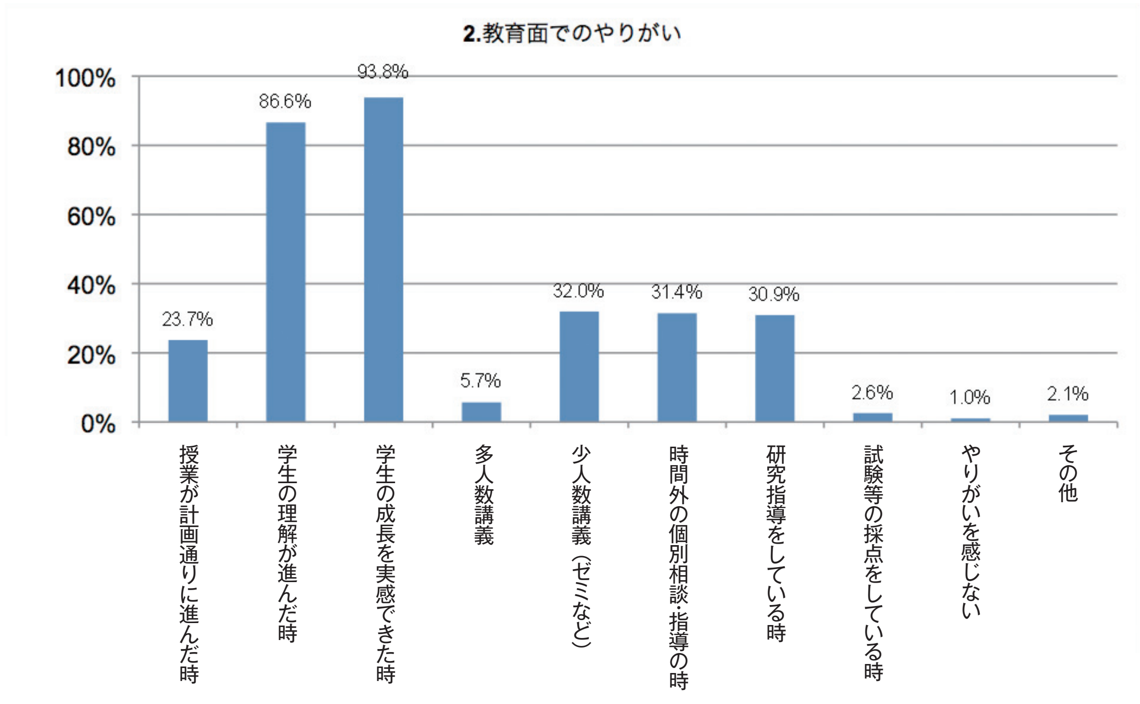


1-（4）
負担感



：とても多い（とても大きい）　：多い（大きい）　：どちらとも言えない
：少ない（小さい）　：とても少ない（とても小さい）　：無回答（わからない）

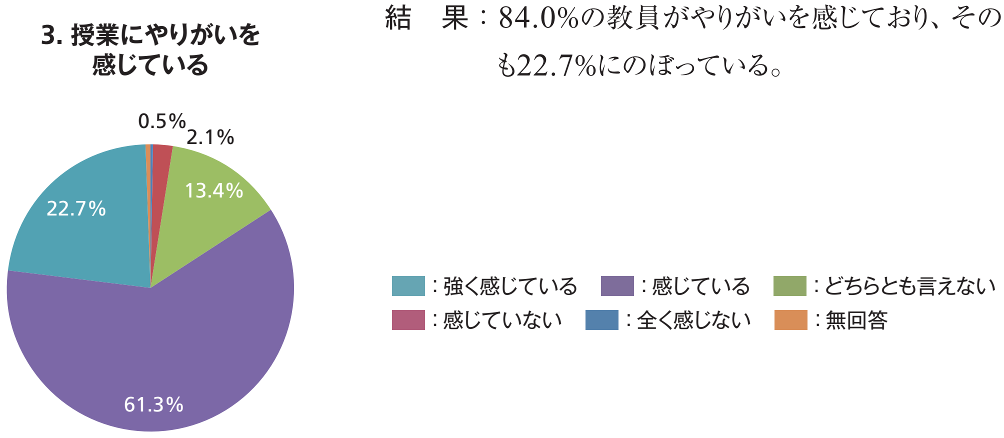
2. あなたは授業（教育面）で、どのような時に“やりがい”を感じますか？



結　果：やりがいを感じていない教員は1%（2名）だけであり、ほとんどの教員は「学生の理解が進んだ時」（86.6%）、「学生の成長を実感できた時」（93.8%）にやりがいを感じている。「少人数講義（ゼミなど）」「時間外の個別相談・指導の時」「研究指導をしている時」はいずれも30%台であり、必ずしも多数ではない。

検討点：「学生の理解」「学生の成長」を促す実践例（場面）の紹介、方法論の提示。

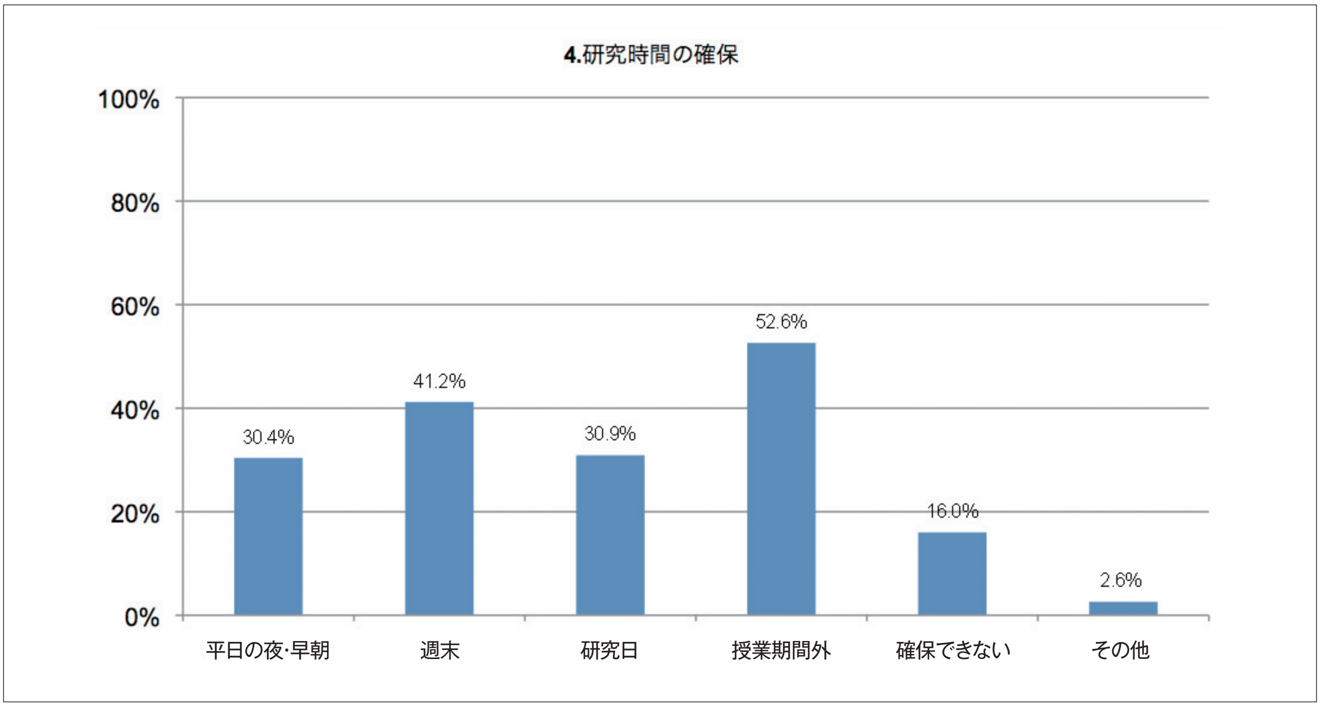
3. 全般として、ご自身が担当されている授業（教育面）に"やりがい"を感じていますか?



結　果：84.0%の教員がやりがいを感じており、そのうち「強く感じている」も22.7%にのぼっている。

〔研究面の評価〕

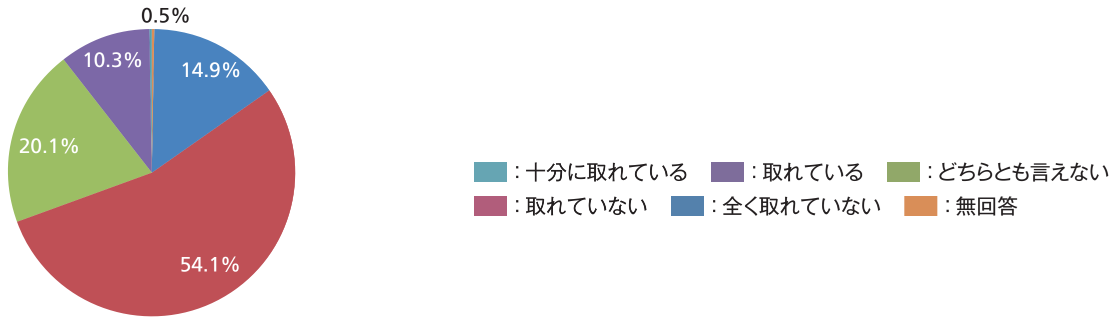
4. あなたは研究時間をいつ確保していますか?（複数回答可）



結　果：「授業期間外（長期休暇）」（52.6%）が最も多いが半数に止まり、他の回答も30～40%台である。「確保できない」との回答も16.0%あり、他業務や家事等のスキ間をぬって研究している実態が見える。
検討点：研究日、研究休暇の実態把握。

5. 研究時間はご自身にとって必要なだけ取れていると思いますか?

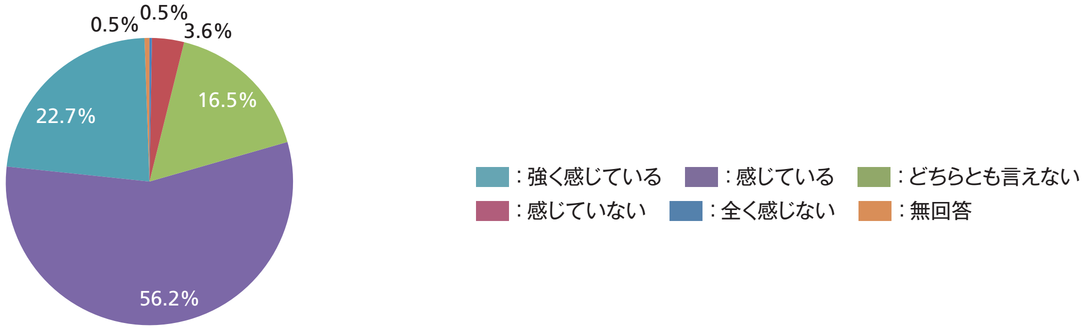
5. 研究時間は必要なだけ取れているか



結　果：「全く取れていない」「取れていない」が69%であり、多くの教員にとって研究時間の確保は切実な要求である。

6. 全般として、ご自身の研究に“やりがい”を感じていますか?

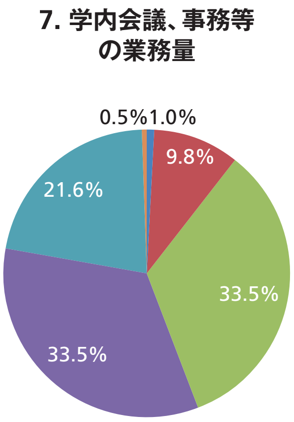
6. 研究にやりがいを感じている



結　果：多くの教員（78.9%）は、自身の研究に“やりがい”を感じており、研究したいと望んでいる。

〔学内業務の評価〕

7. あなたは、ご自身の学内会議、事務等の業務量について、どう感じていますか?

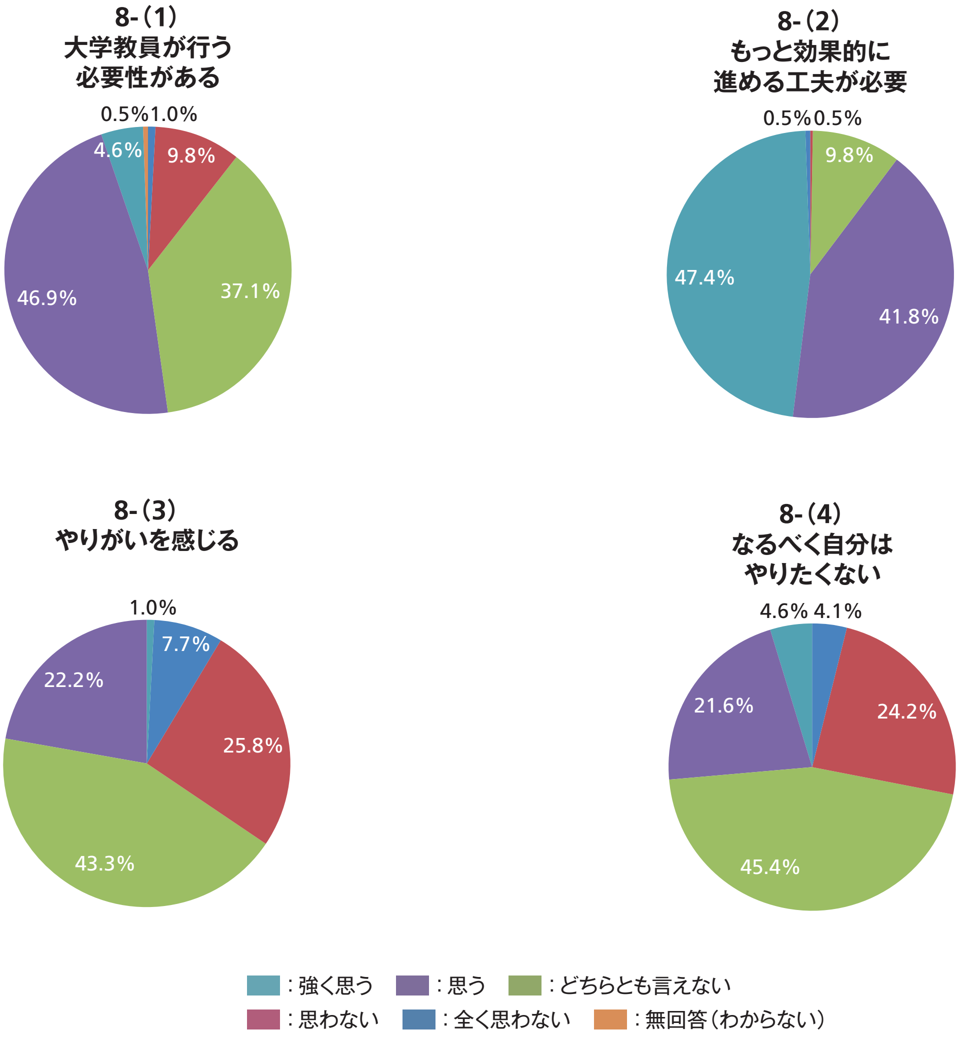


結果：過半数（55.1%）の教員が「とても負担が重い」「負担が重い」と回答しているが、1/3（33.5%）の教員は「どちらとも言えない」としており、業務量の偏りが見える。

検討点：役職教員の実態把握

：とても負担が重い　：負担が重い　：どちらとも言えない
：負担ではない　：全く負担ではない　：無回答

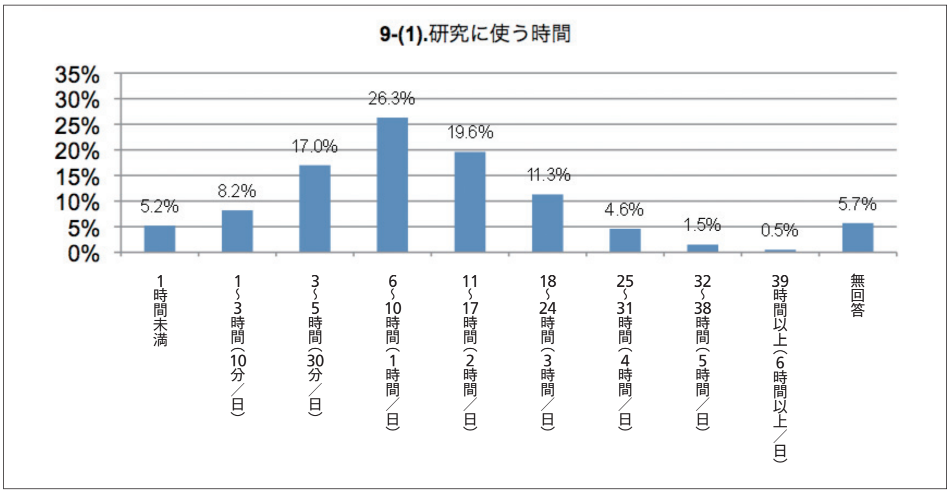
8. 学内会議、事務等の業務に関する以下の意見について、あなたはどう思いますか? 現在の業務量を前提として回答してください。



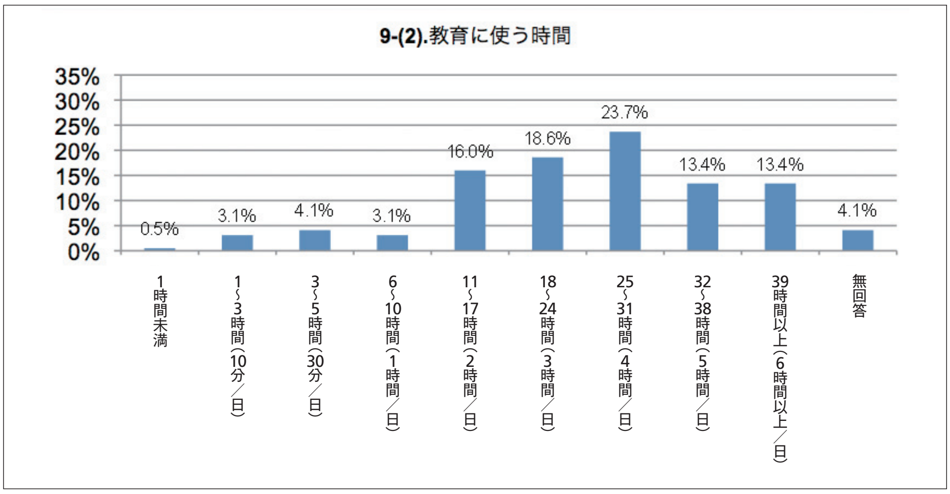
結　果：過半数（51.5%）の教員が「大学教員が行う必要性がある」と考えていて、「やりがいを感じる」との回答も1/4（23.2%）ほどある。「なるべく自分はやりたくない」も約1/4（26.2%）であり、学内業務に関する意識は分散している。多くの教員は「もっと効率的に進める工夫が必要」（89.2%）といった内容面、運営面の工夫を求めている。

検討点：学内会議、事務等を効率的に進める工夫

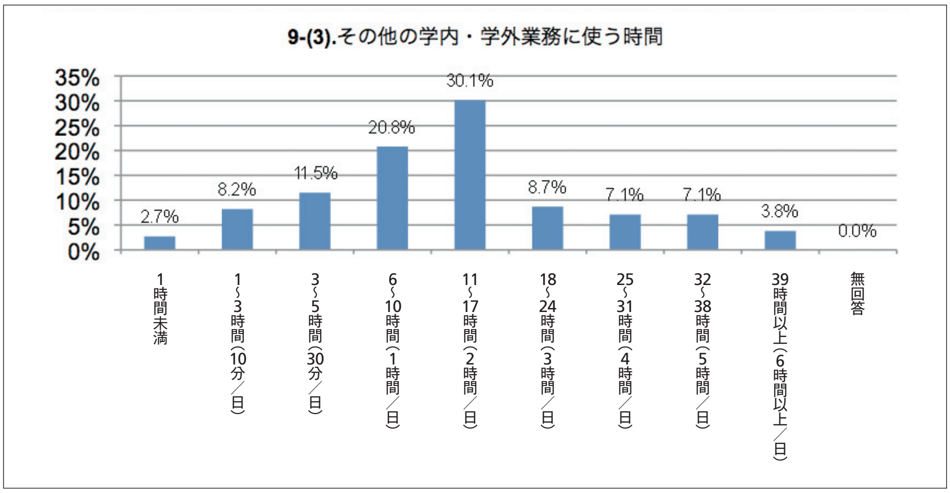
9. ご自身の1週間の職務時間（※）で、それぞれの業務にどのくらいの時間を使っているでしょうか?
※過去1年間における平均的な1週間の時間数を大まかに出してみてください。



9-(1).研究に使う時間



9-(2).教育に使う時間



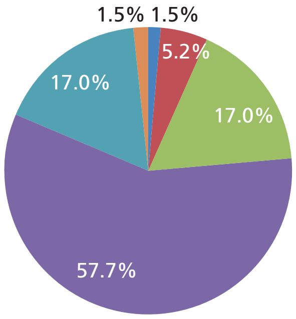
9-(3).その他の学内・学外業務に使う時間

結　果：研究時間は1日1時間、教育・授業時間は1日4時間、その他の学内・学外業務に使う時間は1日2時間弱であり、教育に使う時間が教員の業務時間の半分以上を占めている。

検討点：教育に1日6時間以上かけているとの回答も13.4%あり、実態の把握が必要である

10. 全般として、あなたは大学教員という職に満足していますか?

10. 大学教員という職に満足しているか

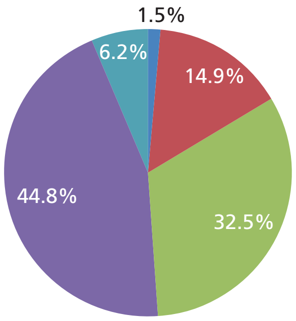


結　果：多くの教員(74.7%)が満足しており、していない教員は少数(6.7%)である。

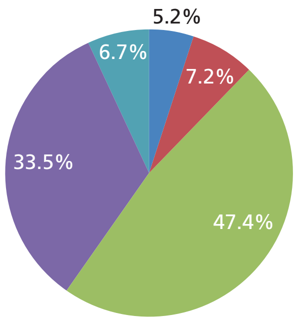
：とてもしている　：している　：どちらとも言えない
：していない　：全くしていない　：無回答

11. あなたは現時点で、大学教員としての職務に関してどのように感じていますか。それぞれについて最もあてはまるものにチェックしてください。

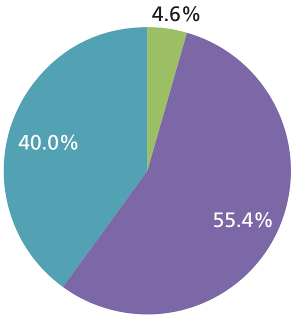
11-(1)
教育にかける時間



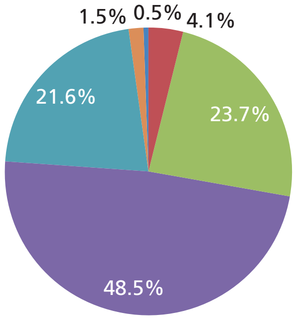
11-(2)
教育面での研修機会



11-(3)
研究にかける時間

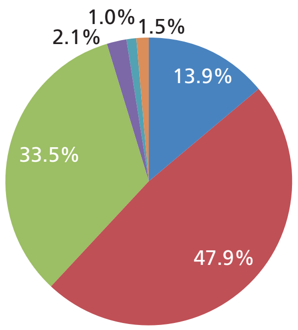


11-(4)
研究面での研修機会

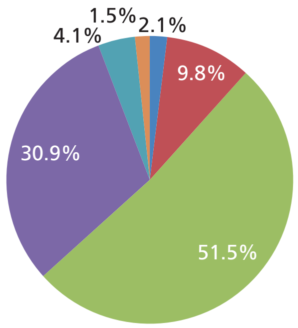


：とても増やしたい　：増やしたい　：どちらとも言えない
：減らしたい　：とても減らしたい　：無回答

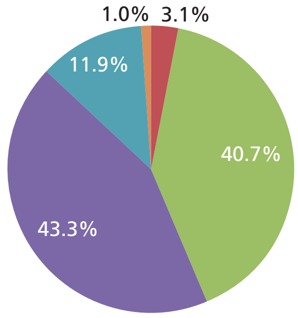
11-（5）
学内業務等にかける時間

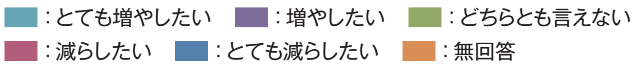


11-（6）
教員同士の協力、共同作業



11-（7）
職務以外（余暇、家事等）の時間





結　果：ほとんどの教員（95.4%）が研究時間を増やしたいと感じ、研究面での研修機会を増やしたい（70.1%）と回答している。教育にかける時間（51.0%）、教育面の研修（40.2%）、家事・余暇の時間（55.2%）はいずれも半数程度が希望し、逆に学内業務等にかける時間は61.8%が減らしたいと感じている。

検討点：研究時間を減らしたいとの回答はゼロだが、教育時間を減らしたいとの回答が16.4%あり、実態把握が必要である。

(2) 因子分析

質問のうち、段階評定の項目のみを対象に因子分析を行った（最小二乗法、プロマックス回転）。4因子を抽出し、累積寄与率は41.3%であった。

因子負荷量

		因子			
		1	2	3	4
1.	現在の授業、教育面の業務量について、				
	(1) 業務量	.915	.152	.035	-.060
	(2) 他大学の教員と比べて	.825	.058	-.014	-.157
	(3) 負担感	.808	.027	-.023	.036
	(4) 学内での不公平感	.610	.011	.033	.101
3.	授業に“やりがい”を感じている	.104	.118	.667	-.009
5.	研究時間は必要なだけ取れている	-.255	-.039	.219	-.437
6.	研究に“やりがい”を感じている	.019	-.159	.535	.055
7.	学内会議、事務等の業務量	.535	-.096	-.012	.124
8.	学内会議、事務等の業務に関する以下の意見について、				
	(1) 大学教員が行う必要性がある	.114	.492	-.096	.027
	(2) 業務を軽減する必要はない	.024	.140	.203	.056
	(3) もっと効率的に進める工夫が必要	.299	-.086	.164	.201
	(4) やりがいを感じる	.129	.652	.101	-.132
	(5) なるべく自分はやりたくない	-.097	-.739	.005	.103
10.	大学教員という職に満足	-.027	.081	.718	-.051
11.	大学教員としての職務に関して（増やしたい－減らしたい）				
	(1) 教育にかける時間	-.174	.318	.264	.163
	(2) 教育面での研修機会	-.167	.651	-.085	.344
	(3) 研究にかける時間	.108	-.082	.147	.611
	(4) 研究面での研修機会	-.080	.187	-.038	.644
	(5) 学内業務等にかける時間	-.237	.490	-.073	-.322
	(6) 教員同士の協力、共同作業	-.008	.476	.215	.160
	(7) 職務以外（余暇、家事等）の時間	.145	.267	-.216	.139

因子間相関

	1	2	3	4
1	1.000			
2	-.179	1.000		
3	-.257	.300	1.000	
4	.379	-.121	-.221	1.000

因子負荷量から，各因子は以下のように解釈できる。

- 第1因子：業務の多さ・負担感
- 第2因子：大学業務に対する姿勢
- 第3因子：仕事への効力感と満足度
- 第4因子：研究活動への欲求

第１因子と第４因子には正の相関があり，業務を過多と感じている程度と，もっと研究時間や機会を増やしたいと感じている程度には若干関係がある。

また，第２因子と第３因子にも弱い正の相関があり，大学業務に積極的な考えをもつことと，教育や研究にやりがいを感じ大学教員という職に満足感を感じる程度に弱いながら関係がある。

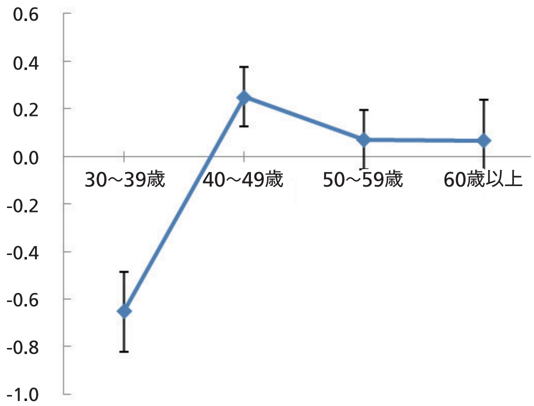
一方，業務の過剰感と，仕事へのやりがいや満足度は独立であると考えられる。

因子得点の比較

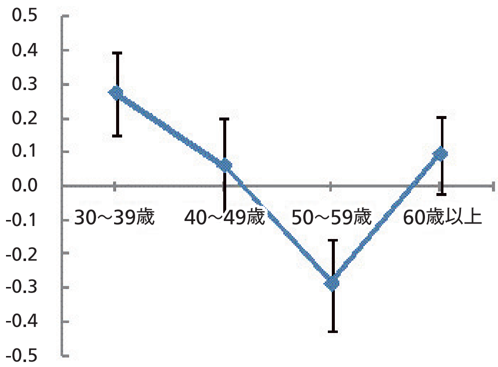
因子得点の推定値を，年齢帯および性別によって比較した。
（年齢帯４水準，性別２水準の２要因分散分析。多重比較はTukeyのHSD法を使用）

全体に，年齢による違いが見られる。これらは年齢による変化の可能性もあるが，一方で世代による差（コホート差）である可能性もある。

- 第1因子：業務の多さ・負担感
  年齢帯による差あり。30代のみが低い。
  30代は業務が多いという感覚が少ないが，
  40代以降で増加する。

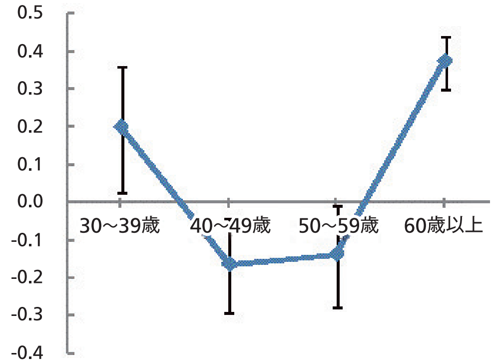


- 第2因子：大学業務に対する姿勢
  年齢帯による差があり，30代が50代よりも高い。
  若い方が大学業務に熱心で，50代で低下している。



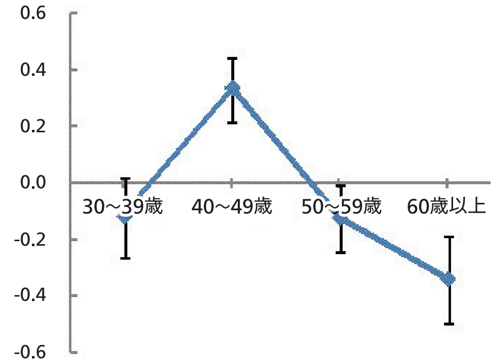
● 第3因子：仕事への効力感と満足度

年齢帯による差があり，40代よりも60代よりが高い。40代では効力感・満足度が低いが，60代になると上昇する。



● 第4因子：研究活動への欲求

年齢帯による差がみられ，40代は50代および60代よりも高い。40代は他の年代に比べ，もっと研究時間や機会を増やしたいという欲求が高い。40代で業務が増えることと関係しているのかもしれない。



3. アンケートの回答(定性項目)

設問12「大学教員の満足度（充実感，充足度）を高めるには，どのようにしたらよいと思いますか?」には、全回答者194名中100名(52%)の回答があった。

(1)頻出単語

年齢帯ごとに頻出単語を表に示した。ここでは主な話題を抽出することを目的としたため、内容に直接関わることの多い名詞のみを分析対象としている。

	30代（17）	件数	40代（32）	件数	50代（33）	件数	60代（18）	件数
1	教育	8	教育	16	教員	11	教育	10
2	教員	8	研究	13	時間	11	研究	7
3	研究	8	教員	12	教育	10	教員	6
4	時間	4	大学	10	研究	10	大学	6
5	会議	3	業務	9	大学	10	業務	5
6	業務	3	時間	9	事務	6	学生	4
7	バランス	2	学生	8	必要	6	活動	4
8	学内	2	会議	7	学生	5	時間	3
9	環境	2	仕事	6	業務	5	必要	3
10	効率化	2	負担	6	授業	5	FD	2
11	仕事	2	満足度	6	会議	4	サバティカル	2
12	大学	2	事務	5	学内	4	マネジメント	2
13	能力	2	必要	5	自分	4	意欲	2
14	必要	2	学内	4	こま数	3	会議	2
15	評価	2	サバティカル	3	環境	3	学内	2
16	負担	2	改革	3	研究時間	3	機会	2
17	満足度	2	確保	3	社会	3	採用	2
18	両方	2	作業	3	人	3	採用時	2
19			指導	3			雑用	2
20			授業	3			仕事	2
21			制度	3			受講生	2
22			担当	3			充実	2
23			面	3			重要	2
24							職員	2
25							人	2
26							成長	2
27							能力	2
28							満足	2

各年齢帯で1/3以上の回答者が記述した頻出単語を見ると、全年齢帯に共通するものとして「教育」「研究」「教員」がある。ここで教員満足度を尋ねているので、教員が頻出するのは当然と考えられる。大学教員の職務満足度には「教育」と「研究」の二者が重要であると考えられているようである。

「大学」という単語も30歳代を除いては多くみられている。30歳代は「大学」への注目が低く、年代が上がると言及が多くなるようである。

また「時間」という単語が50歳代で1/3を超えており、また40歳代でも比較的多く見られた。50歳代と40歳代は教育や研究の時間確保（あるいは、会議等の時間の短縮）への要望が多いようである。

その他「会議」「業務」「事務」等も割合よくでている。

（2）頻出語の係り受け

上記の頻出単語のうち、特に分析が必要と考えられる単語と係り受け関係のある単語（名詞・形容詞・動詞）を分析した。

全年齢帯で頻出する「教育」および「研究」の2語は、これらの二者が大学教員の職務満足度に重要であることを示すと考えられる。教育と研究を満足に行いたいという希望が非常に多いが、教育に関しては一部に負担を減らしたいという文脈での使用も見られた。

教育

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	業務	名詞	3	3
2	かける	動詞	2	2
3	どのようだ	形容詞	2	2
4	バランス	名詞	2	2
5	活動	名詞	2	2
6	減らす	動詞	2	2
7	行う	動詞	2	2
8	時間	名詞	2	2
9	両方	名詞	2	2
10	ある	動詞	1	1
11	いる	動詞	1	1
12	きめ細かい	形容詞	1	1
13	こなす	動詞	1	1
14	コミットメント	名詞	1	1
15	システム	名詞	1	1
16	ない	形容詞	1	1
17	意味	名詞	1	1
18	影響	名詞	1	1
19	基づく	動詞	1	1
20	気づく（否定）	動詞	1	1

研究

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	かける	動詞	5	5
2	活動	名詞	3	3
3	時間	名詞	3	3
4	バランス	名詞	2	2
5	環境	名詞	2	2
6	業務	名詞	2	2
7	両方	名詞	2	2
8	こなす	動詞	1	1
9	スキル	名詞	1	1
10	する	動詞	1	1
11	ない	形容詞	1	1
12	もつ	動詞	1	1
13	宛てる	動詞	1	1
14	一体化する	動詞	1	1
15	確保	名詞	1	1
16	割く	動詞	1	1
17	基づく	動詞	2	1
18	教育	名詞	1	1
19	業績（否定）	名詞	1	1
20	好きだ	形容詞	1	1

大学

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	教員	名詞	15	13
2	ある	動詞	2	2
3	ある（否定）	動詞	1	1
4	運営	名詞	1	1
5	果たす	動詞	1	1
6	改革	名詞	1	1
7	干渉	名詞	1	1
8	期待する	動詞	1	1
9	教育	名詞	1	1
10	経営	名詞	1	1
11	行政	名詞	1	1
12	事務	名詞	1	1
13	取り組み	名詞	1	1
14	収支	名詞	1	1
15	所属する	動詞	1	1
16	上層部	名詞	1	1
17	状況	名詞	1	1
18	成り立つ	動詞	1	1
19	製品	名詞	1	1
20	組織	名詞	1	1

「大学」については「大学教員」という使い方がもっとも多い。これは質問文（大学教員の職務満足度を高めるには…）に対応したもので、当然である。その他の用法については係り受けだけでは明確でない。この単語は30代で少なく、40代以降で多く使用されていたため各年齢帯での具体的な用例を調べた。その結果30代および40代では，ほとんどが「大学教員」という用法で「大学」という単語を使っていたが、50代･60代では大学運営や組織･大学の理念等に関連した用法が多くなるという傾向が見られた。

4. 全体を通じて

多くの教員が大学教員という職にやりがいを感じ、満足感を持っているという実態が明らかになった。一方で業務量が多すぎるという不満感があり、大学の管理業務を減らせればと考える教員は多いようである。また、研究活動に十分な時間や労力が割けていないと考える教員が多い。しかしながら、こうした不満が多いにもかかわらず、大多数の教員が職にやりがいと満足を感じている。

また、業務に対する姿勢や感じ方には、年代により差が生じていることが明らかになった。これらは年齢が上がるにつれ、大学の管理業務の負担が増えていくことに関係すると考えられる点が多かった。

ただし、ここでの調査結果は、今回の調査対象者の特性を考慮して、その一般化には若干の注意が必要である。調査対象の連携校はほとんどが私立大学であり、さらに中小規模の大学が多い。そのことが教育の重視、少数スタッフで運営していることからくる管理業務等の過重感に繋がっている可能性もある。またWeb調査に自発的に回答してくれた教員だけの結果であることが、高い職務意識に繋がっている可能性もある。

第4回連携大学教員
「教育改善に向けたICTシステムの活用に関する意識調査」の結果
(2010年12月実施)

はじめに

本調査は、2009年12月「授業評価アンケートに関する教員意識調査」、2010年3月「授業改善に関する教員意識調査」、2010年9月「教員職務意識調査」に引き続き、教育(学習支援)力を高めるためにICTシステムが有効活用され、教員のICT利用に関する意識を把握し、ICTシステムの有効活用法について探ることを目的として「教育改善に向けたICTシステムの活用に関する意識調査」を実施しました。

なお、本調査では放送大学ICT活用・遠隔教育センター(旧メディア開発教育センター)のWEBアンケートシステムREAS(リアルタイム評価支援システム)を利用して実施しています。

1. 基礎データ

回答者数	139名(回答率　約6.0%)
性別	男性 69%、　女性 31%
年齢	30代以下 1%、30代 18%、40代 35%、50代 28%、60代以上 15%
職位	教授 42%、准教授 28%、専任講師 19%、助教·助手 4%、非常勤講師2%、その他 2%
授業経験年数	~5年未満 25%、5年以上~10年未満 28%、10年以上~20年未満 23%、20年以上 22%

2. アンケートの回答(定量項目)

(1)定量項目の分析

各項目に関して、以下の2点を簡潔に述べる。

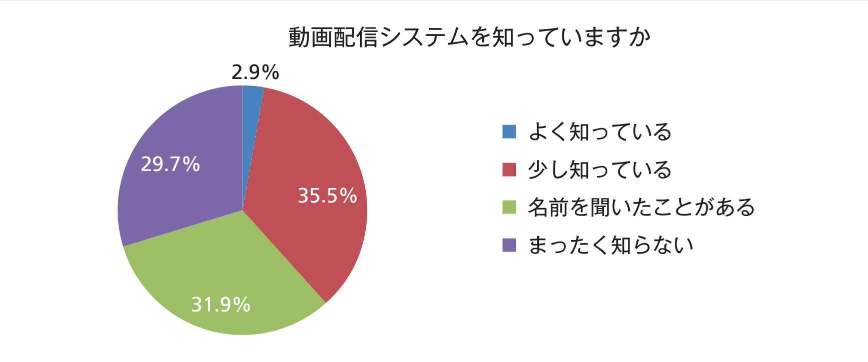
結　果:回答割合が85%以上のとき「ほとんどの教員」、70~85%のとき「多くの教員」、50%弱~70%のとき「半数の教員」とした。

検討点:質問項目に関して、本WG による今後の検討が望まれる点(必要な項目のみ)

ただし、自由記述項目となる設問6、設問11、設問16、設問17、設問18については代表的な意見や特徴的な意見を紹介する。

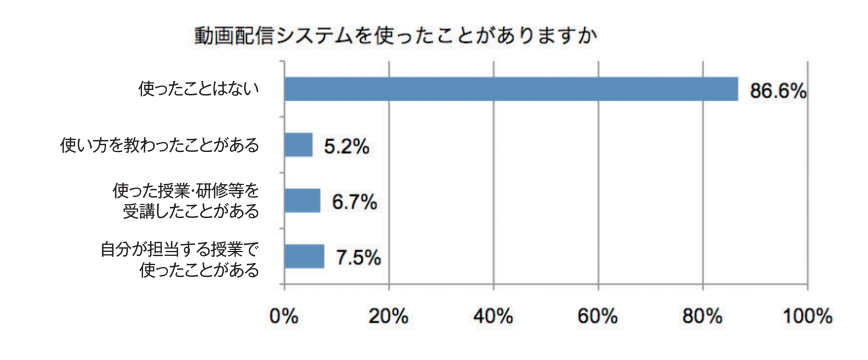
【動画配信システムについて】

1. 動画配信システムを知っていますか?



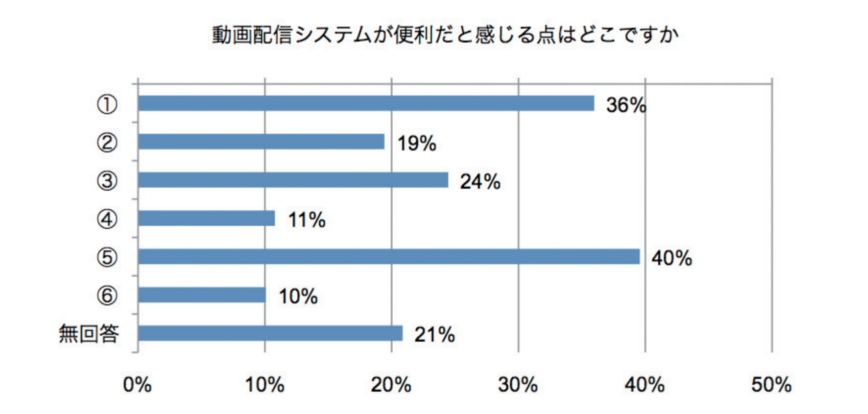
結　果：半数の教員(61.6%)が動画配信システムを「まったく知らない」「名前を聞いたことがある」と答えている。

2. 動画配信システムを使ったことがありますか(複数回答可)



結　果：設問1での結果が示すように、ほとんどの教員(86.6%)が使ったことはなく、実際に授業で使用したことがあるのは7.5%程度であった。

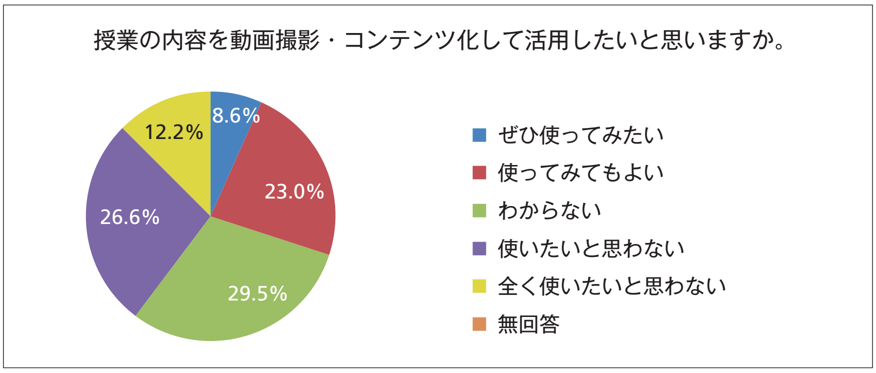
3. 動画配信システムが便利だと感じる点はどこですか(複数回答可)



①授業映像・ビデオ等を配信できる
②パワーポイントのスライドを配信できる
③早送り・巻き戻しなど受講者の理解速度で学習することができる
④動画内容について、受講生同士でコメントしあうことができる
⑤いつでも、どこでも学習できる
⑥その他

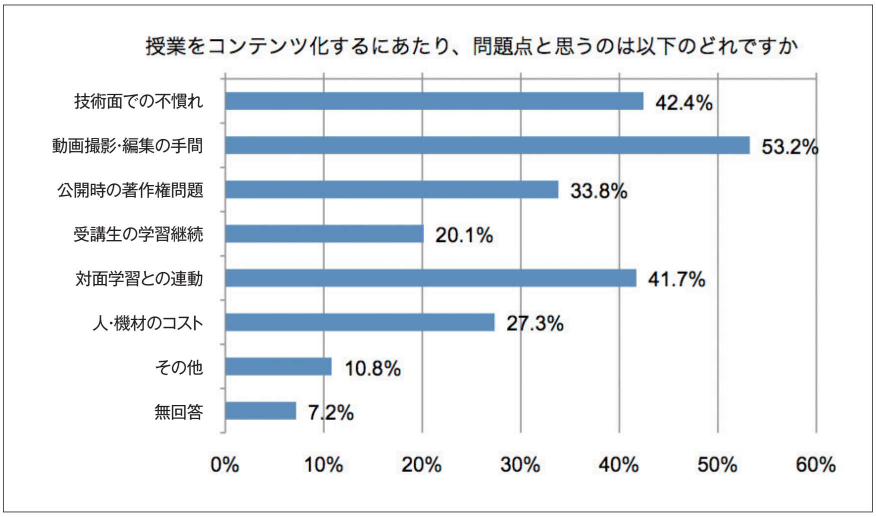
結　果：動画配信システムの「いつでもどこでも学習できる」、「授業映像･ビデオ等を配信できる」、「受講者の理解速度で学習しあうことができる」など、時間や場所を選ばずに受講が可能な点について便利だと感じている。

4. 授業の内容を動画撮影･コンテンツ化して活用したいと思いますか。



結　果：授業の動画化について否定的な意見が38.8%と多数ではあるが、肯定的な意見が31.6%、「わからない」も29.5%と、現状ではほぼ3つに意識が分かれている。

5. 授業をコンテンツ化するにあたり、問題点と思うのは以下のどれですか（複数回答可）



結　果：設問4でコンテンツ化への否定的な意見が多い背景には、技術面の不慣れやコンテンツ作成の手間、対面学習との連動など、開発に伴う教員への負担感が影響していることが窺える。
検討点：ICT技術の発達だけでなく、教育現場の支援体制も検討する必要がある。

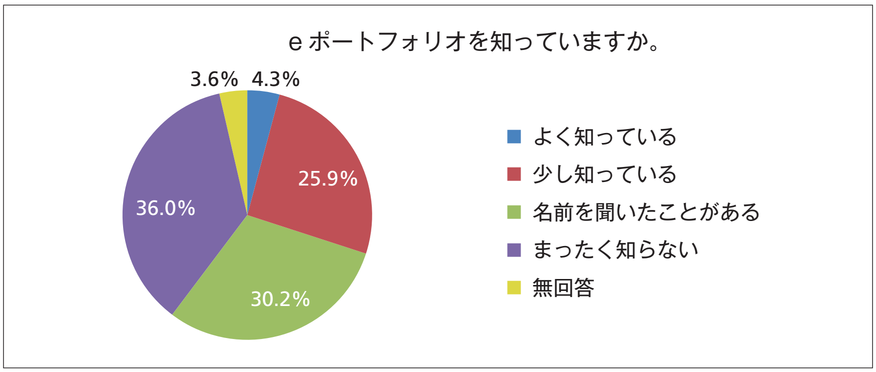
6. 動画配信システムをご自分の授業に取り入れるとすれば、どのような内容・方法で活用したいと思いますか。
(自由記述：回答数40)

予習・復習用の教材として、欠席者向けの教材として、授業の補助教材を配信する、といった回答が代表的なものであった。

一方、否定的な回答として、授業場面での双方向のやりとりや思索が重要で、動画配信では代用できない、あるいは適用範囲は狭いとする意見や、自分の担当する授業では有効と思えないといった限界を指摘する意見もあった。その他、有効な教材を作成するには多大な労力が必要であり、現状では困難だとする意見も少数ではあるが見られた。

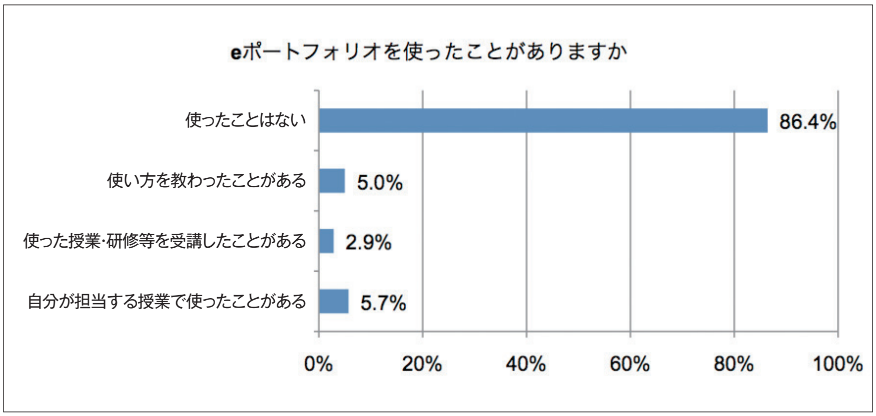
【eポートフォリオについて】

7. eポートフォリオを知っていますか。



結　果：eポートフォリオについては、半数以上(66.2%)の教員が全く知らない、名前を聞いたことがある程度と回答しており、まだまだ認知度が低い。

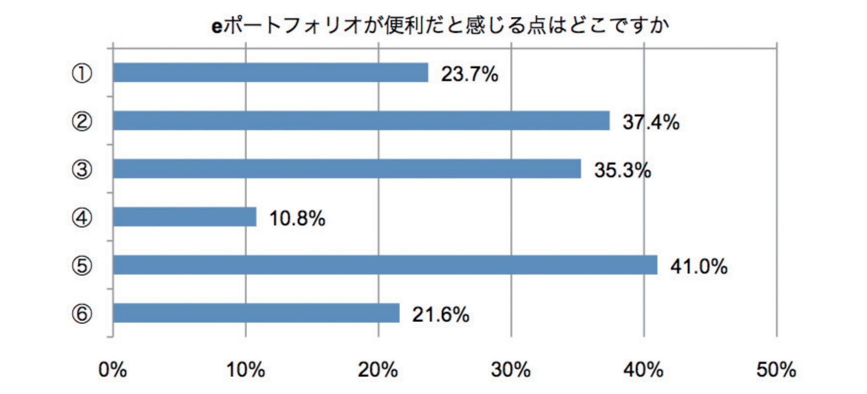
8. eポートフォリオを使ったことがありますか。(複数回答可)



結　果：設問7における認知度の低さに加え、「少し知っている」と回答している場合も実際に使用した(研修含む)経験がある人は少ない。

検討点：研修などを通して教員自身が実際にシステムを利用する機会の提供

9. eポートフォリオが便利だと感じる点はどこですか（複数回答可）



①学生が学習過程をコンピューター上で管理できる

②学生が学習過程を振り返り成長につなげられる

③学生が学習成果物を蓄積できる

④学生同士でポートフォリオを参照しあえる

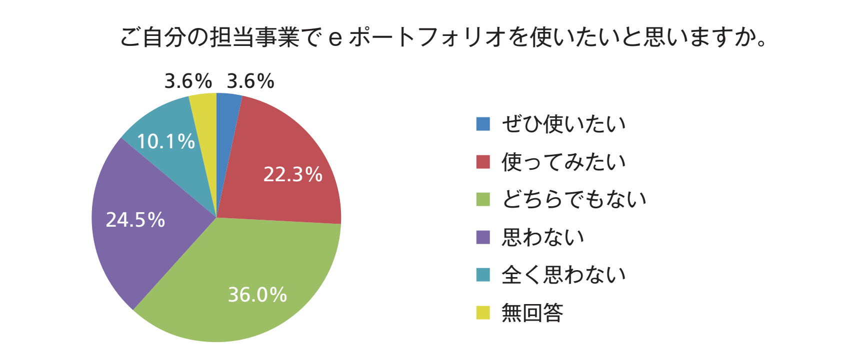
⑤教員が学生の状況を把握できる

⑥教員が成績評価指標の１つに活用できる

結　果：②③⑤の機能について、便利だと感じている教員が比較的多い。設問７における認知度の低さを考えると eポートフォリオの機能としてというよりは、選択肢の内容自体に対する共感が反映しているのかもしれない。

検討点：教員・学生が継続して活用し、教育・学習の効果を高めることができるeポートフォリオシステムの開発

10. ご自分の担当授業で eポートフォリオを使いたいと思いますか。



結　果：ぜひ使いたい、使ってみたいという利用に対する積極的な回答は25.9%となっている。
使用したいという意向と認知度（設問7）の結果には相関がみられる（$r=.40$, $p<.01$）。

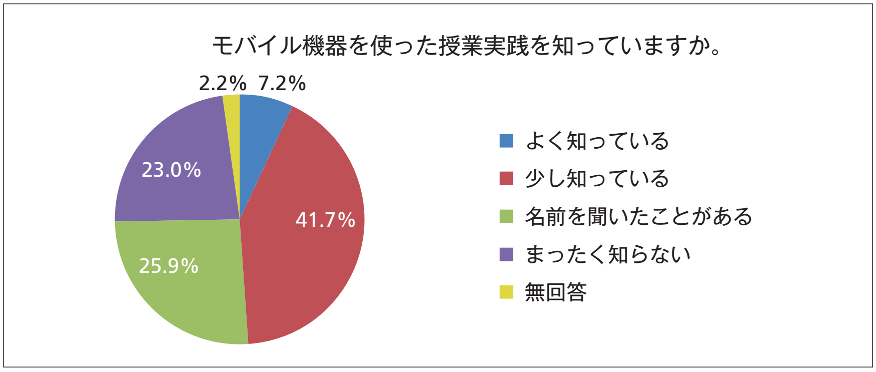
11. どのようにeポートフォリオを活用すると、受講生が継続して記録すると思いますか。
（自由記述：回答数34）

記録を義務化する必要をあげた回答が多く、レポート課題をシステム上で出題・提出させる、成績評価に反映させるなどの意見があった。また、授業中に記録の時間を確保とする回答も見られた。

学生の利用動機を高めるための方策としては、教員からのフィードバックが重要とする意見がもっとも多かった。他に、学生が取り組みやすい、あるいは回答しやすい課題設定が重要とするもの、使いやすいシステムの開発が重要とするものもあった。

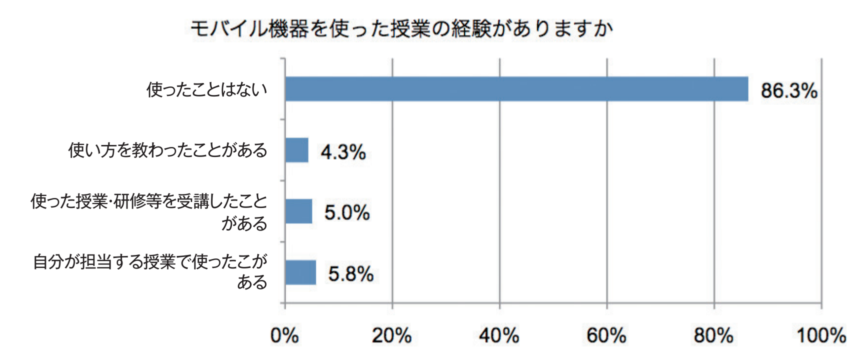
【モバイル機器を使った授業実践について 】

12. モバイル機器を使った授業実践を知っていますか。



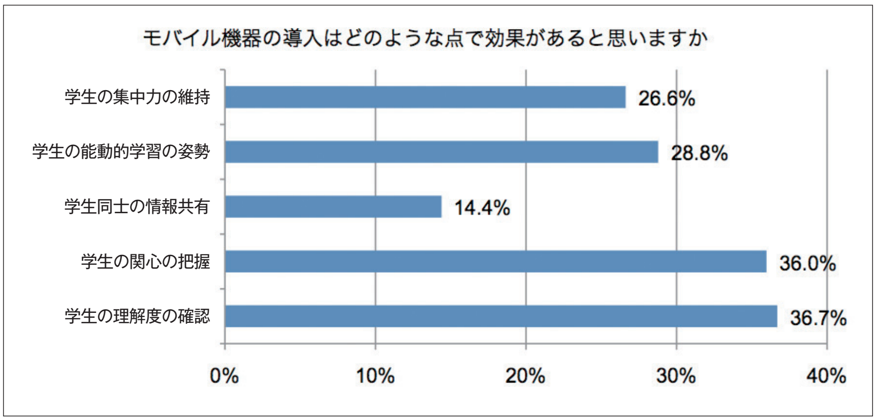
結　果：多くの教員（74.8%）が、モバイル機器を使った授業実践を知っていると回答している。

13. モバイル機器を使った授業の経験がありますか（複数回答可）。



結　果：ほとんどの教員がモバイル機器を使った授業の経験がないと回答している。

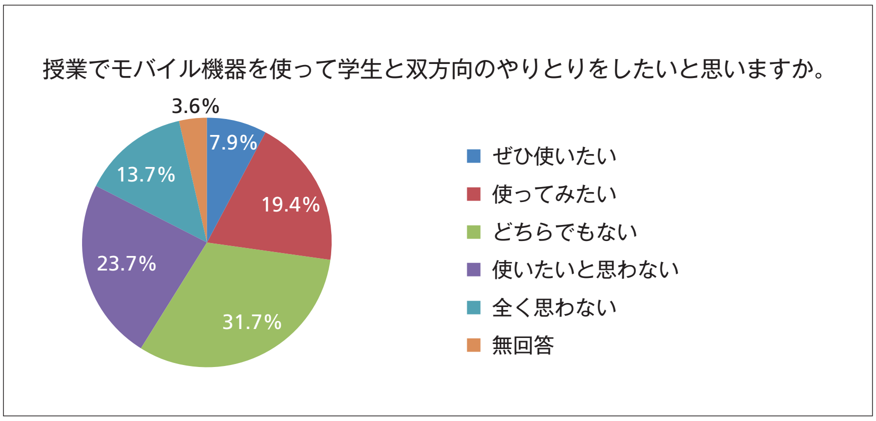
14. モバイル機器の導入はどのような点で効果があると思いますか（複数回答可）。



結　果：理解度の確認や関心の把握という点に効果があると考えられている。

検討点：モバイル機器によって教育効果が上がる授業運営方法の検討と開発

15. 授業でモバイル機器を使って学生と双方向のやりとりをしたいと思いますか。



結　果：ぜひ使いたい、使ってみたいが27.3%なのに対して、全く思わない、使いたいと思わないが37.4%とモバイル機器の利用に対して消極的である。使用したいという意向と認知度（設問12）の結果には相関がみられる（r=.48, p<.01）。

16.どのように授業でモバイル機器を活用すると、教育効果がより高まると思いますか。
（自由記述：回答数33）

大人数授業での使用の有効性、授業に双方向性を持たせるためツールとなる、学生の理解度を確認するために使用する、といった回答が多く見られた。また使用によって得られる効果として、学生の積極的な授業参加につながる、集中力の維持に役立つという意見がそれぞれ複数あった。さらに、単に学生の理解度や意見部分を知るだけでなく、モバイル機器によって調べた学生の意見を討論のきっかけに使用するという使い方を提案した回答もあった。

否定的な意見としては、機器に頼らなくても教員の力量があれば可能とするもの、機器を使い過ぎることによる弊害を指摘する意見も少数ながら見られた。

17.どのようなシステムがあると、授業に活用できると思いますか
（自由記述：回答数27）

他の設問に比べ回答数が少なく、記入された中にも分からない・思いつかないといった回答も多く見られ、答えにくい設問であったようである。

回答が少ないながら、授業運営をサポートするためのシステムの異なった観点からの提案がいくつかあった。たとえば、学生の興味・関心に注目したもの、授業運営の効率化について注目したもの、遠隔地との通信や学生間での情報共有などICT機器を用いることによって可能になる授業の新しい形態を考えたもの等があった。また、運用にストレスがないシステムである必要性を強調する回答も複数あった。

18.どのようなサポートがあると、ICTを授業に活用しやすくなると思いますか
（自由記述：回答数32）

機器の利用に関する技術的なサポート、機器の設置や運搬のサポート、コンテンツ作成についてのサポート体制、有効な活用事例の紹介をあげる意見が多く、専門のサポートスタッフや部署、講習会等の必要性を指摘している回答も見られた。

教員へのサポートを念頭に置いた回答が多数であったが、学生への技術サポートをあげる回答もあった。

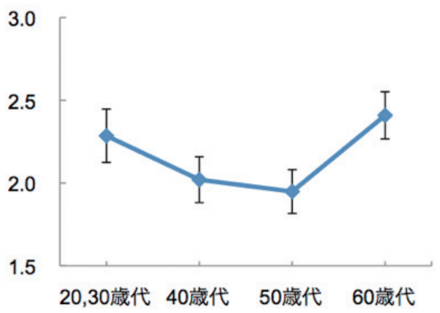
また、授業の準備を十分に行うための時間や経費の確保を、必要なサポートとしてあげる回答も複数あった。

(2)年齢と回答の関係

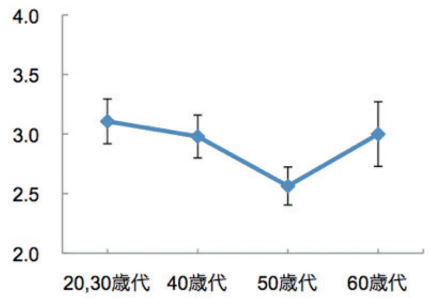
ICTシステム利用に対する態度には年代による違いが予想されるため、各システムに対する認知度(設問1, 7, 12)と利用の意向(設問4, 10, 15)の回答を年齢群間で比較した。認知度については1(全く知らない)～4(よく知っている)、利用の意向については1(全く使いたいと思わない)～5(ぜひ使ってみたい)の値を割り当て、年齢帯間で平均値を比較した。ただし、20歳代と30歳代は人数が少ないため一群に併合した。グラフのエラーバーは標準誤差を示す。平均値の比較には1要因4水準の分散分析とTukeyのHSD法による多重比較を使用した。

その結果、モバイル機器を使いたいかという設問15について年代間の差が統計的に有意であり(p<.05)、20・30歳代の教員で50歳代(p<.05)および60歳代(p<.10)よりもモバイル機器を使用したいという程度が高かった。その他の設問では、年齢による差異は見られなかった。ICT機器の認知度や利用の意向の年代差は、それほど広範なものではなさそうである。

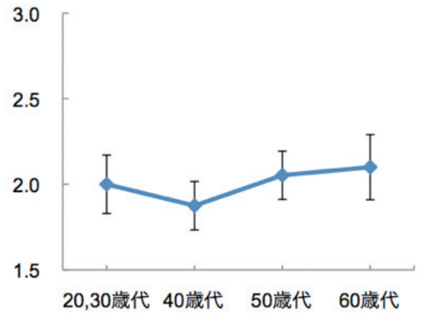
1. 動画配信システムを知っていますか?



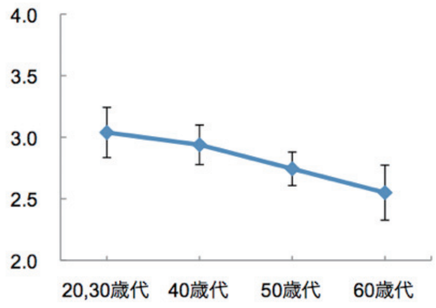
4. 授業の内容を動画撮影・コンテンツ化して活用したいと思いますか。



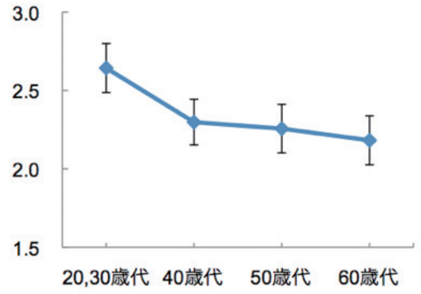
7. eポートフォリオを知っていますか。



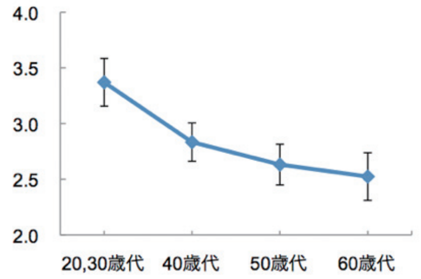
10. ご自分の担当授業で eポートフォリオを使いたいと思いますか。



12. モバイル機器を使った授業実践を知っていますか。



15. 授業でモバイル機器を使って学生と双方向のやりとりをしたいと思いますか。
（20・30歳代と50歳代の差が統計的に有意）



3. 全体を通じて

今回の調査では、三種類のシステムを中心に、その認知度や使用経験、有効性の評価、システムを利用したいかどうかの意向などを調べています。その結果、システムの認知については知らないあるいは名前を聞いたことがある程度とする回答も多く、利用経験を持つ教員に至ってはかなり少ないということが分かりました。一方で、システムの有効性についての質問に対しては、多くの教員がその有用性を評価しており、今後の大学教育においてICTシステムの利用がさらに普及することが期待されます。またこの結果は、システム使用のためのサポート体制の拡充が、強く求められていることを示していると言えるでしょう。

講義形式授業におけるクリッカー利用実践の報告

京都光華女子大学　阿部　一晴

平成22年度前期に京都FD開発推進センターより、クリッカーシステム一式を借用させていただき、実際の授業で利用する機会を得た。以下に、その取組概要および評価等について報告する。

1. 使用システム

今回使用したクリッカーシステムは、株式会社内田洋行（http://www.uchida.co.jp/）の「EduClick V3.0」という製品である。

EduClick V3.0の構成は以下のとおりである。

①教員用リモコン

問題や回答結果の表示などEduClick V3.0の操作を行う

②学生用リモコン（図1）

学生ひとりひとりに異なる番号で割り当てられる

問題に回答するのに使用する

③無線レシーバ

学生と教員のリモコン操作を受信する

図1：学生用リモコン（クリッカー）

上記以外に、教員用パソコン（無線レシーバを接続し、出題や回答の管理等をおこなう）とプロジェクター（問題や回答結果を投影する）も利用する。各機器は大変コンパクトで、専用バッグも用意されており、授業教室への運搬は非常に容易におこなえる。今回の取組では、ノートPCを含め使用するシステム一式の全ての機材を担当教員1名で特に支障なく運ぶことができた。設置や撤収も非常に簡単におこなえた。

EduClick V3.0の機能は以下のとおりである。これはクリッカーシステムとしてはシンプルで非常に基本的なものであるが、講義授業での使用には十分なものである。

①問題提示機能
パソコンとプロジェクタを用いて、スクリーン等に作成した問題を提示する
②問題作成機能
専用のEditorもしくはPowerPointを用いて問題を作成する
③回答収集機能
学生用リモコンにより全学生からの回答を瞬時に収集する
④回答結果表示･分析機能
学生の回答状況、誰が何を押したかなどの回答結果を表示する

2. 対象授業科目

今回は京都光華女子大学人間科学部人間関係学科の専門科目である「経営情報論」でクリッカーを利用した。半期のみの借用であり、授業準備等の関係から一科目のみの使用に止めた。この科目の概要（シラバスから転載）は以下のとおりである。また、受講登録者は約70名であった。

科目名：経営情報論
開講年度：2010年度 前期　　配当年次：2～4年
授業テーマ：経営･ビジネスと情報通信技術
授業の概要：現代社会の特徴は高度な情報化にあり、社会経済システム･生活･文化とあらゆる面で情報化が進み、情報社会と呼ばれる。この情報化により大きな影響を受けている分野の一つとして経営･ビジネスを挙げることができる。経営とは「戦略･マーケティング」「人事･組織」「会計･財務」といった要素から成り立っているが、これらは企業活動の中心であり、今日ではコンピュータやネットワークといった情報通信技術の積極的な活用抜きでおこなうことはできない。本講義ではこういった視点に立ち、経営やビジネスの基本とそこで活用されている情報通信技術についての現状と将来について考えていく。経営と情報の両面からアプローチすることにより、現実のビジネスの場で有効となる実践的な知識を習得することを目指す。

この科目はいわゆる一般的な講義形式の授業である。受講者数がそれ程多い大講義という訳では無いが、学生ひとりひとりが参加型で授業に臨めるほど少人数でもなく、中途半端な授業規模である。また、対象となる人文科学系学生にとって、授業テーマである経営･ビジネスといった分野は苦手意識を持つ者も多く、受講生の興味･関心を惹いたり、学習内容を定着させたりすることには工夫が必要とされるところであった。特に学生には馴染みが薄い専門用語等も多数出現し、これらの理解が必要となるため、以前からいくつかの工夫をおこなっていた。その一つが紙ベースの小テスト（図2）の実施であり、LMSを利用した宿題（図3）を課すことであった。ただし、紙ベースの小テストは、授業内での実施と採点に手間と時間がかかるという問題があった。また、LMSによる小テストは、一般教室にはPCが無いため宿題とせざるを得ず、授業との連続性という意味で学習効果上の問題があった。本来は授業内と授業外学習との連携効果があるはずなのだが、現実には有効に機能していなかった。また学生には面倒であるという意識が強い様である。

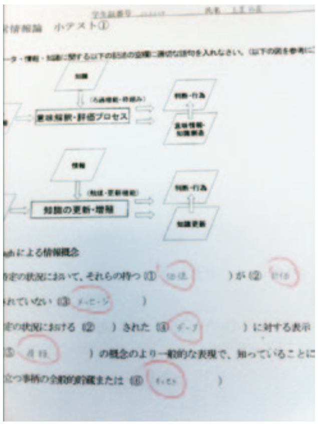


図2：小テスト

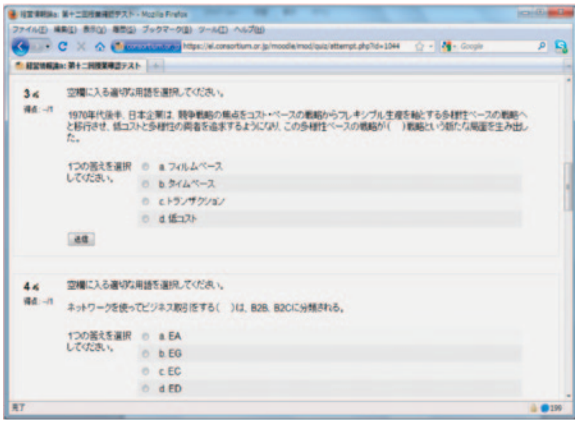


図3：LMSによる小テスト形式の宿題

3. クリッカーの利用

平成22年度前期に開講した、人間科学部人間関係学科専門科目である「経営情報論」授業においてクリッカーによる小テストを利用した。前述のとおり、この科目では人文系分野の学生が比較的苦手とする経営やビジネスに関する用語の正確な理解が必要とされており、これらを意識した小テストを取り入れ、その実施にクリッカーを利用した。基本的には、前述の紙ベースおよびLMSを利用した小テストと同種のものをクリッカー対応に作り直し、授業内で実施した。また小テスト以外に簡単なアンケートや授業内容とは直接無関係なクイズ等も取り入れた。（図4）

使用したシステムでは問題作成に専用エディタを使用する必要がある。CSVを経由してのファイル入出力等の機能も用意されているが、あまり操作性が良くなく、問題はほぼ一から手入力で作成することになった。（最新バージョンではPowerPoint上で問題作成する形式に変更となったため、操作は大幅に改善されている。）このため一回の授業で10～15問半期で100問超の問題作成をおこなう授業準備には、相当の時間をとられることになった。

受講生が約70名という講義形式の授業であり、参加型というよりは教科書と配布資料、PowerPointによるスライド投影と口頭説明という一方通行型の授業進行にならざるを得ず、90分間の講義時間の間ずっと学生の集中力を維持させるのは現実には非常に困難であった。このため、前半講義（30～45分）+クリッカーによる小テスト+後半小テストの解説（30分程度）というように、授業時間を区切ることで集中力の維持ができることを意識した。

図4：クリッカーを利用した小テストとアンケート

4. まとめと評価

クリッカーによる小テストを授業の中間に挟むことにより、単調になりがちな講義形式の授業にメリハリをつけることができた。受講学生からの評価も概ね好評で、以前と比べ授業への参加意欲は高まった様である。（居眠りや私語をする学生も相対的に減った）ただし、当初目新しさがあって学生も非常に積極的に授業に参加していたが、毎回使用していると学生側に慣れと言うかマンネリという雰囲気も感じられ、回数を重ねるごとに効果が薄れてくると感じられるところもあった。授業の変化、メリハリという視点では、こういったシステムの利用頻度というものも検討する必要があるのかも知れない。感覚的には、講義系授業へのクリッカーの導入は一定の効果があったと評価しているが、学習内容の定着に具体的に成果があったかどうか等継続して評価を進めたい。

参考までに、今回の授業を受講した学生の感想（自由記述）を付録として添付する。

最後になりましたが、今回貴重なクリッカーシステム利用の機会を提供いただいた、京都FD開発推進センター関係各位に感謝申し上げます。

参考資料等

EduClick商品ご紹介資料　内田洋行株式会社
EduClick V3.0簡易マニュアル　内田洋行株式会社
株式会社内田洋行Web　http://www.uchida.co.jp/
京都光華女子大学シラバス（学生ポータル「光華navi」）　https://navi.koka.ac.jp

付録　学生のクリッカー利用に対する感想（自由記述）

- クリッカーを使ってクイズ形式で問題を出してもらえると、ただ聞いているだけでは頭に入らない言葉も記憶に残りやすくなって良いと思う。聞いているだけでは眠くなるが、このクイズを行うことで積極的に授業に取り組むきっかけにもなった。
- 講義形式の授業にでも、“参加”するコトが積極的になり、学習意欲が高まると思う。先生の使い方にもよると思うが、楽しかった。大人数であればあるほど楽しいし、面白いと思う。
- 問題はあまり分からなかった。みんながどれくらいの正答率なのか知りたいと思った。この小テストが期末試験につながると良いと思った。ゲーム感覚で楽しめた。
- ハイテクな感じがして良かったです。楽しめたけど、ずっとやっていたら飽きそうかも知れないです。でも、新しい授業方法なのでみんな参加できて良いと思いました。
- 誰が何を押したか分からないし、周りに影響されないからアンケートなどにいいと思った。書く手間も省けるし、簡単だし使いやすい。でも、反応したかどうか分かりにくい。クリッカーでの復習は結構楽しい。ゲームするみたいで毎回楽しかった。
- 分かりやすくて普通に小テストとかをしているよりも簡単で良かったと思います。
- クリッカーを使用して小テストをすることで、自分がどれくらい分かっているのか分かっていないのかが分かるので良かったと思う。
- 授業で学習した内容を復習することができて良かったです。
- 問題を通じて知識が深められていいと思います。今の自分の理解度も把握できます。先生もいろいろと問題の間に説明してくれるから分かりやすいです。

・クリッカーを使った小テストは、自分の解答が合っているかどうかがその場ですぐ分かるのでいいと思います。クリッカーを押して解答するのが面白かった。
・ゲーム感覚で楽しかった。
・新鮮で良かった。テストのことも分かった。重要語を知ることができた。
・クリッカーは使うことでテストに便利だと思います。また、クイズ形式なので、楽しみつつできるなと思いました。
・結構勉強はできたと思います。復習には良いと思いました。でも、先生がヒントを言い過ぎですぐに答えがわかりました。
・前を見ながら、先生の話を聞きながら問題を解けるのは素敵だと思いました。インパクトもあるので覚えやすいです。
・ボタンが押しにくかったけど、クリッカーは問題を読んでボタンを押して答えるので楽しく学習できた。とても分かりやすく単語も覚えやすかった。
・今まで使ったことのない機械なので、珍しくてとても楽しく授業に参加できました。自分がどの程度理解できているのか確認できる点が良かったです。関連する語句や間違いやすい語句に目を通すことで知識を深めることができて良かったです。
・クリッカーはリモコンのように使いやすくPCが苦手な人でも簡単に使いこなせると思うので、授業で使うのはとても良いと思います。無駄な時間を使ってしまうこともなく、授業の中で使ってもスムーズに進むので集中しやすいと思いました。授業のアンケートなど色々な使い方も面白いと思ったので、これからもどんどん新しいものが導入されればいいなと思いました。
・クイズ形式でとてもやりやすい。覚えやすい。他の授業にも取り入れて欲しい。
・授業に関係する内容だったが、ゲーム感覚でできて楽しかった。
・便利で良いと思います。間違えても消しゴムを使わなくて良いので授業後の掃除をしなくてラッキーと思っています。全ての授業の小テストをこのクリッカーで行って欲しいと思います。
・クイズのお陰で分かりやすかった。どこが重要なのかしっかり理解できたし、どこが理解できなかったのかよく分かった。クリッカー楽しかった。
・この型で小テストをやるのが良かったと思います。その場ですぐに結果が分かったことで、授業の内容の重要なキーワードをもう一回思い出すこともできる。宿題より効果が高いと思います。
・自分では授業の後に復習はしなかったけど、クリッカーで復習することによって、授業で勉強したことを復習、勉強できるので良かったと思います。
・ゲーム感覚で楽しくできました。授業が終わってからするので復習になって良かったと思います。最先端な感じで良かったです。色々な授業で取り入れて欲しいです。
・何回も解答できるし、気楽にできるので楽しかったです。

クリッカーの使用経験

漆葉成彦（佛教大学 保健医療技術学部）

1　試用の動機

保健医療技術学部の授業の多くは資格取得のための科目であり、知識と技術を確実に獲得することがその目的となる。技術の獲得を目的とする科目の多くは演習、あるいは実習形式で行われるので、授業中に個々の学生の理解度を評価することは比較的容易である。しかし、知識の獲得を主な目的とする科目の多くは、一方向的な授業であるため、授業中に随時学生の理解度を評価し、これを授業に反映させることは難しい。従来は小テスト、あるいは学生への質問という形でこの欠点を補ってきたが、いずれも十分とはいえない。小テストは個々の学生の理解度を容易に評価することができるが、その結果によってその場でただちに更なる説明を加えることは難しい。授業の中で学生にマイクを向ける、あるいは挙手をさせるという方法は、その結果を授業に反映させることは容易であるが、質問に答えない、あるいは挙手しない学生が多く理解度の正確な評価は困難である。

今回、京都FD開発推進センターの指導の下、クリッカー（EduClick V3.0）を用いる機会があった。知識を伝えることを主な目的とする授業においてクリッカーがどのように活用できるのか、ということについて私自身の経験を報告させていただきたい。

2　科目の概要

1）授業科目：精神医学

2）登録学生数：88名

3）授業の概要

保健医療技術学部第2学年秋学期に開講される卒業必修科目である。理学療法学科･作業療法学科両方の学生にとって、国家試験受験の際に必要となる知識を学ぶ機会である。また作業療法学科の学生にとっては、精神医学の十分な知識がなければ精神科医療機関における臨床実習が困難なものとなる。

授業の内容は、精神医学および精神科リハビリテーション学の知識から精神保健行政の基礎まで含まれる非常に幅広いものであり、15回の授業回数では十分ではない。一部の内容について深く講義し、他の内容については学生の自習で補うという授業形式も可能ではあるが、国家試験に直結する科目であるため「すべての範囲について授業してほしい」というのが多くの学生の希望である。教科書を指定しているが、必要な内容を要約したレジュメを中心に授業を行っている。

4）クラスの状況

理学療法学科、作業療法学科合同の授業である。いずれの授業にも共通することであるが、意欲が高く積極的に学習する群と、意欲の低い群との差は大きい。またこの授業では学科により学習の意味が異なる（理学療法学科の学生にとっては国家試験対策、作業療法学科の学生にとっては実習の準備と国家試験対策）という特徴がある。

3　クリッカーの使用状況

1）使用機器：ノートパソコン／赤外線レシーバー／学生用リモコン／教員用リモコン／プロジェクタ

2）使用目的

使用目的は、（1）小テストの形で前回の授業を復習する、（2）授業中の理解度を　確認し追加の説明を行う、（3）出席を確認する、（4）学生の集中度を高める、の4点とした。

3）授業への利用

EduClick V3.0で作成した質問に学生が自分のリモコンで答え、それに対して教員が解説を加える、という形で授業を運営した。質問は、あらかじめ作成しておいたもの（通常クイズ形式）と、授業の流れでその場で作成したもの（即問即答形式）の両方を用いた。

4）授業の進め方

i. 各学生にあらかじめ割り当てた番号のリモコンを配布する。当初はこのために10分以上の時間を要したが、学生が慣れてくると5分程度で終わった。

ii. 授業開始直後に、出席確認の意味でいくつかの質問をした（「前回の授業の内容はよく理解できましたか？」、「前回の授業の復習をしましたか？」といった内容）。

iii. 前回の授業の内容から作成した質問（4～5者択一、10問を5分程度の小テストとして行った。すべての質問が終了した後に、質問項目を中心とした復習を 10分程度で行った。小テストの項目を印刷物として配布はしなかった。

iv. 授業の小項目毎に1～2問の質問をし、理解度を確認し、その場で学生に結果を返した。

v. 学生の集中度が落ちてきたと思われる時に、適宜「即問即答」形式の質問をした。

vi. 授業終了後、リモコンを回収する。当初は、学生がリモコンをばらばらに返却してくるため整理に時間を要したが、次第に数人の学生が並べ方を指示してくれるようになり、短時間での回収が可能となった。

5）結果の解析

EduClick V3.0であらかじめ作成しておいた質問は、簡単に採点でき、CSV形式での保存が可能である。

4　使用結果

1）教員としての感想

授業の準備は、当初は20分程度かかるが、教員・学生の双方が慣れてくると5分程度で可能である。ティーチング・アシスタントの必要性は感じなかった。

出席の管理は、楽にできる。ただし今回の試用では、出席をとる時刻を学生にきっちり告知していなかったことと、複数のリモコンを持ちいわゆる代返行為を行う学生もあったことから、学生の間では不公平感もあったかもしれない。クリッカーを出席管理に用いた場合、出席簿によって学生の名前を呼ぶことがなくなるため、学生の名前を覚えることが難しい。

小テストとしての使用は、準備、採点とも従来の紙で行う方法よりもはるかに簡便である。またその場で結果が返せるという利点がある。

小項目毎に確認の質問をしていると、授業の進度は遅くなる。

遅刻者、途中退室者は減った。居眠りする学生は、ほとんどいない。ただし、授業中の私語は増えた。

総じて、クラス管理のためには非常に便利な道具であるといえる。

2）学生の感想

授業評価アンケートの自由記述欄でクリッカーの感想を尋ねた。学生の感想は、概ね好意的なものであったが、否定的なものもあった。

好意的な意見は、

面白い。

ゲーム感覚で勉強できる。

眠くなりにくい。

答えがすぐにわかるので勉強しやすい。

経験したことがない機器で興味が持てた。

それに対し、否定的な意見としては、

リモコンの配布・回収が面倒。

小テストの質問項目が印刷物として返却されないので、復習がしにくい。

リモコンで答えるよりも紙に直接手で答えを書く方が覚えやすい。

小テストの際にレジュメを見たりする不正行為が多い。

私語が多い。

理解の程度をみるためだけなら、挙手させればよいことであり、あえてクリッカーを使う必要は感じない。

毎回使われると飽きる。

といったようなものがあった。

3）授業の達成度

授業の進度は、クリッカーを使用することによって遅くなった。最終的にはシラバスで予定していた進度より遅れたため、学期末の数回の授業は2回分の内容を1講時で行わざるを得なくなった。

小テストの成績と科目最終試験の成績との間には明確な相関関係はなかった。ただし、授業中の受講態度と小テストの成績との間には、相関があるように思われる。

科目最終試験の成績は、昨年度とほぼ同程度であった。

5　考察

知識の獲得を主な目的とする授業で、クリッカーを試用してみた。

教員の立場でクラスを管理するための道具としては、クリッカーは大変便利な道具である。従来出席管理や小テストの採点・返却等に要した時間がほとんど不要となる。しかし、学生の感想（授業アンケートの自由記述欄からのものなので、実際に答えた学生の数は半数に満たなかったのであるが）が、思いの外教員の予想と乖離していたことからみて、今回の方式でのクリッカー使用が直ちに学生の満足度を上げるとは言えないだろう。また、授業の達成度を試験の成績のみで評価するわけにはいかないとはいうものの、少なくとも今回の試用ではクリッカーが学生の知識獲得に有用であったと結論づけることはできない。

知識の獲得を目的とする授業において、クラス管理の道具としての便利さに流されてクリッカーを漫然と使用することにはあまり意味がないようである。クリッカーを単に便利な道具ではなく教員、学生の双方にとって有益な道具とするためには、知識伝達中心の授業であっても、まず学生の学習態度を養成する様々な試みなどの教授法改善をした後に使用すべきものであると考える。

FD研修プログラム検討ワーキンググループ　2010年度活動記録

WGメンバー

林　久夫	龍谷大学	理工学部　教授　［WGリーダー］
辻野　嘉宏	京都工芸繊維大学	工芸科学研究科　教授
梶谷　佳子	京都橘大学	看護学部　准教授
髙橋　伸一	京都精華大学	人文学部　教授・共通教育センター長
左右田昌幸	種智院大学	人文学部　教授
圓月　勝博	同志社大学（大学コンソーシアム京都）	文学部　教授
［事務局］		
中山　類	種智院大学	教務課
深野　政之	京都FD開発推進センター	専門研究員　※2011年11月30日退職
川面　きよ	京都FD開発推進センター	専門調査員　※2010年12月1日より専門研究員
中島　弘喜	大学コンソーシアム京都	次長
北山　広喜	大学コンソーシアム京都	主幹

2010年度の活動方針

《研修プログラムの実施とモニタリング》

2009年度に固めたFD研修プログラムを実施するとともに、内容の調整と評価・フィードバックを重ね、補助事業終了後に向けて最終的な体系化を行う。

- 2009年度に刊行し好評を得ている「FDハンドブック」をシリーズ化して発行する。ハンドブックをテキストとして活用した階層別の研修プログラムを展開する。
- 新任教員を対象とした合同研修プログラムを、補助事業終了後にも定例開催していけるよう、プログラム化を図る。

2010年度の活動報告

1）新任合同研修プログラムの実施

2009年3月の第1回新任教員合同研修の成果を踏まえ、京都地域の大学新任教員の教育活動面をサポートすることを目的として、今年度以降は年2回実施、修了認定証を発行できる体系的プログラムを開発することとした。新任教員研修は、多くの連携校がすでに自大学内で実施しているが、それぞれの大学で実施している研修を補う役割として合同研修を位置付け、合わせて京都地域の多くの大学の新任教員が交流する場とした。

実施時期は新学期が始まる直前の9月と3月とし、土曜日午後と日曜日全日の日程で検討を進め、実施した。研修プログラムは国立教育政策研究所のFDer研究グループ「新任教員研修プログラムの基準枠組」に準拠して、基準枠組の大項目を網羅し、さらに「授業のデザイン」と「教育の実践」の2項目は重要なので9月と3月の両方に盛り込むこととした。9月の《プログラムA》と3月の《プログラムB》の両方に参加することにより、「新任教員研修修了認定証」を発行する。

2010年3月の合同研修では土曜日夜に情報交換会を設定したが、情報交換会の参加者が少なかったため、今年度は土曜日午後の休憩時間を多く取って全体での自己紹介を行った。グループディスカッションの時間を多く取ったことにより、講義と模擬授業の内容を深めることができ研修効果を挙げることができた。

新任教員の参加者数は9月が14名、3月が23名であり、密度の濃いグループワークが可能となり好評であった。参加者アンケートでは全員から「とても満足」「満足」との評価を得ており、特段のクレームはなかった。ただし、土曜日午後と日曜日全日の研修に年2回参加するのは負担が大きいとの意見も寄せられており、来年度以降の検討課題となっている。

2010年度第1回新任教員合同研修《プログラムA》

開催日時：2010年9月18日（土）　13：00～18：00
　　　　　2010年9月19日（日）　 9：30～17：00
場　　所：キャンパスプラザ京都　2Fホール
参 加 者：新任教員14名（18日12名、19日14名）

1日目スケジュール

時間	内　　　容	講師･担当者
13：00	開会あいさつ：挨拶･研修目的の説明	林　久夫氏
13：10～14：00	（1）-①　大学教員のキャリア開発	林　久夫氏
14：00～14：40	（1）-②　自己紹介･アイスブレーキング グループワーク ・「所属大学の良い所」を絵に描いて下さい。	【司会】 深野政之 【ファシリテーター】 圓月勝博氏・梶谷佳子氏 左右田昌幸氏・林　久夫氏
14：40～15：30	コミュニケーションタイム	
15：30～18：00	（2）-①　授業デザインのための基礎知識 （2）-②　ワークショップ①	【講師】 沖　裕貴氏　（立命館大学） 【ファシリテーター】 圓月勝博氏・梶谷佳子氏 左右田昌幸氏・林　久夫氏

2日目スケジュール

時間	内　　　容	講師･担当者
9：30～10：00	1日目の振り返り、2日目プログラム説明	深野政之
10：00～11：00	（3）-①　さまざまな授業形態　模擬授業①	阿部一晴氏　（京都光華女子大学）
11：00～12：00	（3）-①　さまざまな授業形態　模擬授業②	大西俊弘氏　（龍谷大学）
12：00～13：00	昼食休憩	
13：00～13：30	（3）-②　グループディスカッション 《テーマ》授業改善 模擬授業とFDハンドブックを参照しながら、 自分の授業の工夫を話し合う	【ファシリテーター】 圓月勝博氏・梶谷佳子氏 左右田昌幸氏・髙橋伸一氏 辻野嘉宏氏・林　久夫氏
13：30～14：30	（4）-①　学習者中心の授業運営	【講師】 梅本　裕氏　（京都橘大学） 【ファシリテーター】 圓月勝博氏・梶谷佳子氏 左右田昌幸氏・髙橋伸一氏 辻野嘉宏氏・林　久夫氏
14：30～15：30	（4）-②　ワークショップ②	
15：30～16：00	コミュニケーションタイム	
16：00～16：30	（4）-③　ワークショップ②の報告	各グループ報告者
16：30～17：00	まとめ･参加証授与、閉会のあいさつ	林　久夫氏

2010年度第2回新任教員合同研修《プログラムB》

開催日時：2011年3月12日（土） 13：00 ～ 18：00
　　　　　2011年3月13日（日）　9：30 ～ 17：00
場　　所：キャンパスプラザ京都　2Fホール
参 加 者：新任教員19名（12日14名、13日15名）

1日目スケジュール

時間	内　　　容	講師･担当者
13：00	開会あいさつ：挨拶･研修目的の説明	林　久夫氏
13：10～13：40	（1）-①　「京都の大学、大学のまち京都」	【講師】 重田裕之氏 （大学コンソーシアム京都　副事務局長）
13：40～15：00	（1）-②　自己紹介･アイスブレーキング グループワーク ・「初回の授業（導入部分）で気をつける（つけている）こと」を一つ書き出して下さい。	【司会】 川面きよ 【ファシリテーター】 林　久夫氏・髙橋伸一氏 圓月勝博氏・左右田昌幸氏 梶谷佳子氏
15：00～15：50	コミュニケーションタイム	
15：50～16：50	（2）-①　授業デザインのための基礎知識	【講師】 井上史子氏　（立命館大学） 【ファシリテーター】 林　久夫氏・髙橋伸一氏 圓月勝博氏・左右田昌幸氏 梶谷佳子氏
16：50～18：00	（2）-②　ワークショップ グループワーク：強制連結法による授業設計	

2日目スケジュール

<table>
<tr><th>時間</th><th>内　　　容</th><th>講師･担当者</th></tr>
<tr><td>9：30～9：35</td><td>1日目の振り返り、2日目プログラム説明</td><td>川面きよ</td></tr>
<tr><td>9：35～10：45</td><td>（3）-①　さまざまな授業形態　模擬授業①</td><td>【講師】
南　直人氏　（京都橘大学）</td></tr>
<tr><td>10：45～10：50</td><td>休憩</td><td></td></tr>
<tr><td>10：50～12：00</td><td>（3）-①　さまざまな授業形態　模擬授業②</td><td>【講師】
森原規行氏　（京都精華大学）</td></tr>
<tr><td>12：00～13：00</td><td>昼食休憩</td><td></td></tr>
<tr><td>13：00～13：30</td><td>（3）-②　グループディスカッション
《テーマ》授業改善</td><td>【ファシリテーター】
圓月勝博氏・梶谷佳子氏
左右田昌幸氏・髙橋伸一氏
林　久夫氏</td></tr>
<tr><td rowspan="2">13：30～15：30</td><td>（4）-①　成績評価のための基礎知識</td><td rowspan="2">【講師】
圓月勝博氏　（同志社大学）
【ファシリテーター】
圓月勝博氏・梶谷佳子氏
左右田昌幸氏・髙橋伸一氏
林　久夫氏</td></tr>
<tr><td>（4）-②　ワークショップ</td></tr>
<tr><td>15：30～15：50</td><td>コミュニケーションタイム</td><td></td></tr>
<tr><td>15：50～16：30</td><td>（4）-③　ワークショップの報告</td><td>各グループの報告者</td></tr>
<tr><td>16：30～17：00</td><td>修了証、参加証授与式･閉会のあいさつ</td><td>林　久夫氏</td></tr>
</table>

2）FDハンドブック［成績評価編］の作成

新任教員を対象にした研修プログラム開発の一環として、2009年度には『まんがFDハンドブック おしえて！ FDマン【新任教員編】』（以下、第1巻）を作成して連携大学の全教員約3,000名（一部大学では職員全員にも配布）に配布するとともに、全国の大学関係者に広報したところ約800通の申し込みがあり、増刷と電子ブック版の公開を行った。

今年度はマンガによる一問一答形式を継承したFDハンドブックの第2巻を作成することにして、テーマを検討することからWGの検討を開始した。ハンドブックの内容･形式等について、「新任教員研修プログラムの基準枠組」を参照しながら、以下のような話し合いを持った。

・まんが版として継続発行したい。
・研修プログラムに使えるように、ワークシートを取り入れたり、シラバスの記入様式を付けたりするとよいのではないか。
・1冊目はPDCAの2番目「Do(教育の実践)」をテーマにしたので、他の部分を取り上げたい。
・1冊目で割愛したICT活用はマンガにしやすいのではないか。
・大学の歴史、外国の大学、大学教員とは、単位制度、設置基準などの「高等教育の基礎」をテーマにしてもよいのではないか。

これらの論議を踏まえ、「高等教育の基礎」「授業デザイン」「ICT 活用」「成績評価」の４つのテーマ案について話し合った。その結果、ハンドブック第２巻のテーマとして「教育効果の測定（成績評価等）」をメインに据え、「高等教育の基礎」を加えた内容とすることを決定した。また、できるだけ「まんが表現」を継承し、ワークシートの活用なども検討することとなった。

この結果を受け、連携校である京都精華大学の事業推進室（京都国際マンガミュージアム）の協力を仰ぎ、第１巻と同じマンガ作者に依頼することとなった。

まず成績評価に関する一問一答の設問案作りからスタートし、20 問の設問を確定した上で WG メンバー（教員）が回答（マンガページ右下の枠内）を分担作成した。並行してセンター専門研究員と専門調査員が「教育評価の第一歩」と「大学の基礎知識」を作成し、WG メンバーによるチェック・修正を受けた。

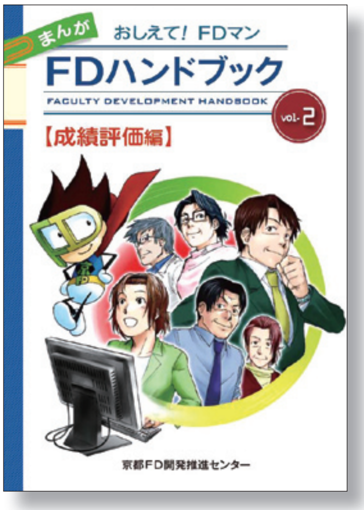
記述内容はワーキンググループ全員で議論した結果だが、テーマが「教育の評価」であるため第1巻にも増して多くの議論が必要となった。「成績評価におけるTAの役割」「インセンティブとしての出席点」「GPAと平均点の長短」など、いくつかの設問については意見が分かれ、最近の一般的な見解を疑問視する意見も出された。議論の末、今回はそれらを敢えて一つにまとめることはしないことにし、複数の意見あるいは一般的な見解とWGメンバー全員による提案を並列に提示することとした。

初版は2010年11月に5,000冊出版し、電子ブック版も公開している。

『まんがFDハンドブック おしえて！ FDマン【成績評価編】』作成スケジュール

1月18日（月）	第2巻についてアイデアを出し合った
2月18日（木）	第2巻のテーマを「教育効果の測定（成績評価等）」に決定
4月16日（金）	第1回WGで設問案と回答骨子を検討
5月20日（木）	京都精華大学事業推進室にて打ち合わせ
5月21日（金）	第2回WGで設問の決定、回答の分担
6月18日（金）	第3回WGでまんがページ回答原稿の検討
7月 1日（木）	京都橘大学現地取材
7月 8日（木）	種智院大学現地取材

7月16日（金）	第4回WGで記述ページ構成、原稿の検討
9月 3日（金）	第5回WGでキャラクター、まんがページの検討、記述ページ原稿の検討
10月 1日（金）	第6回WGでハンドブックの名称決定、原稿案最終確認
11月30日（火）	FDハンドブック第2巻刊行、初版5,000冊
1月	増刷5,000冊
3月	増刷10,000冊
3月	増刷1,000冊（第1巻との合冊版）
3月 末	電子ブックの公開



WG議題

第1回FD研修プログラム検討WG

2010年4月16日（金）　19：00〜20：45　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 他WG進捗状況報告
3. 京都FDer塾、執行部塾予定
4. デジタル版まんがFDハンドブック公開

【検討事項】

1. 2009年度事業報告書のWG活動記録（案）
2. FDハンドブックⅡ：設問案の検討
3. 新任教員合同研修企画
4. 第1回FDセミナー企画

第2回FD研修プログラム検討WG

2010年5月21日（金）　19：00〜20：40　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第1回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. 海外FD研修（ICED、自己設定型）の募集

【検討事項】

1. FDハンドブックⅡ：設問の決定、回答の分担
2. 新任教員合同研修企画
3. 第1回FDセミナー企画

第3回FD研修プログラム検討WG

2010年6月18日（金）　19：00〜21：30　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第1回センター会議･第2回FD連携運営委員会（合同会議）報告
3. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. FDハンドブックⅡ：まんがページ回答原稿の検討
2. 新任教員合同研修について

第4回FD研修プログラム検討WG

2010年7月16日（金）　19：00～20：45　キャンパスプラザ京都　第2会議室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 6月～7月の専門研究員、専門調査員の出張
3. 第3回FD連携運営委員会報告
4. 他WG進捗状況報告
5. FDハンドブック取材（7/1京都橘大学、7/8種智院大学）について
6. センター事務室の移転

【検討事項】

1. FDハンドブックⅡについて
  （1）まんがページ回答原稿修正文の検討
  （2）記述ページ構成、原稿の検討
2. 新任教員合同研修について
  （1）講師、模擬授業担当者の決定
  （2）参加者募集･連携大学への広報
  （3）3月実施分の日程確定

第5回FD研修プログラム検討WG

2010年9月3日（金）　13：00～15：30　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第4回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告

【検討事項】

1. FDハンドブックⅡについて
  （1）キャラクター、まんがページの検討
  （2）記述ページ原稿（教育評価）の検討
  （3）記述ページ原稿（大学の基礎知識）の検討
2. 新任教員合同研修について
  （1）参加者人数確認
  （2）当日計画

第6回FD研修プログラム検討WG

2010年10月1日（金）　19：00～20：40　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第5回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. 京都FDer塾特別公開セミナー報告

5. 京都FDer塾ポスター制作の依頼
6. 第2回FDセミナー「最終事業報告会」の件
7. FDフォーラム　ミニ・シンポジウム企画の件

【検討事項】

1. 新任教員合同研修の件
   （1）参加者アンケート
   （2）総括・次回への反省など
2. FDハンドブックⅡの件
   （1）ハンドブックの名称決定
   （2）原稿案最終確認

第7回FD研修プログラム検討WG

2010年11月26日（金）19：00～19：50　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告・活動予定
2. 第2回センター会議・第6回FD連携運営委員会（合同会議）報告
3. 他WG進捗状況報告
4. FDハンドブックⅡの刊行
5. 国立教育政策研究所ヒアリング報告

【検討事項】

1. 新任教員合同研修《プログラムB》
   （1）講師依頼について
   （2）模擬授業について
2. 事業評価のためのWG活動報告について
3. 第2回FDセミナー（最終事業報告会）WG報告について

第8回FD研修プログラム検討WG

2010年12月17日（金）　19：00～20：30　キャンパスプラザ京都　第1共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告・活動予定
2. 第7回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. FDハンドブックⅡのニュースリリースおよび頒布開始について

【検討事項】

1. 新任教員合同研修《プログラムB》
   （1）講師（模擬授業）について
   （2）広報について
2. 第2回FDセミナー（最終事業報告会）WG報告について

第9回FD研修プログラム検討WG

2011年1月21日（金）　19：00～21：00　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第8回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. FDハンドブックⅡの頒布状況について

【検討事項】

1. 新任教員合同研修《プログラムB》
   （1）当日運営について
   （2）広報について
2. 第2回FDセミナー（最終事業報告会）のWG報告について
3. 青山学院大学へのマンガ･データ提供について

第10回FD研修プログラム検討WG

2011年3月4日（金）　19：00～20：00　キャンパスプラザ京都　第2共同研究室

【報告事項】

1. センター活動報告･活動予定
2. 第9回FD連携運営委員会報告
3. 他WG進捗状況報告
4. FDハンドブックⅡの頒布状況について

【検討事項】

1. 新任教員合同研修《プログラムB》
   （1）当日運営について
   （2）参加者応募状況について
2. まんがFDハンドブック合冊版デザインについて
3. 青山学院大学へのマンガ･データ提供について

The Kyoto Faculty Development Center
Project Report 2010

2

第２部

海外研修参加報告
POD2010

FD海外研修参加報告《POD2010》

2010年11月2日（土）～11月9日（金）

参加メンバー（2名）

廣田　孝子　　京都光華女子大学　教授
川面　きよ　　京都FD開発推進センター　専門調査員

開催日：11月3日（水）～11月7日（日）
開催地：ハイアット・リージェンシー セントルイス（アメリカ ミズーリ州・セントルイス）
主　催：Professional and Organizational Development Network in Higher Education

PODとは1976年に設立された全米のファカルティ・ディベロッパー（Faculty Developer）、FD活動担当者のためのネットワーク組織であり、出版・年次大会・コンサルティング・情報交換・資金提供を通した会員メンバーへの支援、高等教育機関における教授方法や学習活動の質の向上などに貢献することを目的として活動している。

PODの年次大会ではFDの手法等や専門職としてのコンピテンシーなどについて議論や情報交換が行われている。海外からの参加も認められており、ここ数年FD・SDコンソーシアム名古屋や四国のSPOD等が派遣を実施し、その研修効果の高さが報告されている。

当プロジェクトにおいても、今後の京都地域でのFDネットワーク活動の継続および各大学のFD活動発展のための研修の機会として連携校教員およびセンター専門調査員の派遣を実施した。本稿はその参加報告である。

研修・調査スケジュール

	月日	都市	時間	スケジュール詳細
①	2010年 11月2日（火）	伊丹空港発 成田国際空港着 成田国際空港発 ロサンゼルス着 ロサンゼルス発 セントルイス着	14：35 15：55 18：30 12：15 15：25 20：55	空路、成田空港へ 出国手続き後、ロサンゼルスへ ………日付変更線通過……… 乗り換え後、セントルイスへ 《セントルイス泊》
②	11月3日（水）	セントルイス		プレカンファレンス参加　《セントルイス泊》
③	11月4日（木）	セントルイス		カンファレンス参加　《セントルイス泊》
④	11月5日（金）	セントルイス		カンファレンス参加　《セントルイス泊》
⑤	11月6日（土）	セントルイス		カンファレンス参加　《セントルイス泊》
⑥	11月7日（日）	セントルイス発 ロサンゼルス着	13：20 15：20	カンファレンス参加 空路、ロサンゼルスへ　《ロサンゼルス泊》
⑦	11月8日（月）	ロサンゼルス発	13：15	ロサンゼルス空港より帰国の途へ　《機内泊》
⑧	11月9日（火）	成田国際空港着	17：55	成田国際空港到着後、新幹線で関西へ

POD年次大会の構成

参加者は約700名。内、日本からの参加者が35名程度とのことであった。午前中に75分のインタラクティブ・セッションまたはラウンドテーブル（分科会）1コマと基調講演が1コマ、午後からまた75分のインタラクティブ・セッションまたはラウンドテーブルが2〜3コマ実施というのが基本的な1日の会議スケジュールである。

それぞれのコマでは大小16ほどの分科会が設置され、参加者各々が興味のあるテーマの分科会会場へ足を運ぶ形式となっている。

<table>
<tr><th colspan="3">典型的な1日のスケジュール</th></tr>
<tr><td>6：00AM</td><td colspan="2">6：00 - 7：00AM　Yoga</td></tr>
<tr><td>7：00AM</td><td colspan="2">7：00 - 8：45
Continental Breakfast</td></tr>
<tr><td>7：30AM</td><td colspan="2">7：30 - 8：45
POD Topical Interest Groups（TIGs）</td></tr>
<tr><td>9：00AM</td><td colspan="2">9：00 - 10：15
Interactive Sessions, Roundtables, & Job Fair</td></tr>
<tr><td>10：15AM</td><td colspan="2">Beverage Break</td></tr>
<tr><td>10：30AM</td><td colspan="2">10：30 - 12：00
Plenary Session</td></tr>
<tr><td>12：00PM</td><td colspan="2">12：00 - 2：00
Lunch-on-your-own & Committee Meetings</td></tr>
<tr><td>2：15PM</td><td colspan="2">2：15 - 3：30
Interactive Sessions & Roundtables</td></tr>
<tr><td>3：30PM</td><td colspan="2">Beverage Break</td></tr>
<tr><td>3：45PM</td><td>3：45 - 5：00
Interactive Sessions & Roundtables</td><td rowspan="2">3：45 - 5：45
Poster Sessions</td></tr>
<tr><td>5：15PM</td><td>5：15 - 6：45
Resource Fair　（cash bar）</td></tr>
<tr><td>7：00PM</td><td colspan="2">7：00 - 8：30
POD Awards Banquet</td></tr>
</table>

いずれのセッションにおいても一方的に発表者が報告を行うことはなく、途中にグループ討論やシミュレーションなどを取り入れ、その部屋にいる全員が議論に参加する形式がとられていた。

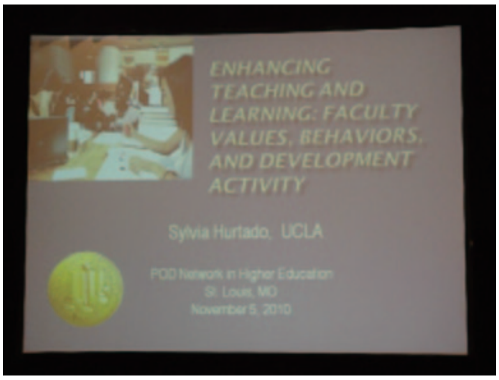
セッションの内容は、ファカルティ・ディベロッパーとしての実践報告であったり、教授法であったり、組織の在り方であったりと多岐に渡る。参加者は各々が興味を持つ分野のセッションに参加することになるわけだが、事前に参加希望をとっていないので、基本的にFirst come First servedとなっている。そのため、参加者が溢れて立ち見というセッションも多く見られた。

2つの基調講演

今年度の年次大会では2つの基調講演が行われたが、ここではそのうちの1つについてその内容を簡単にご紹介する。

Plenary Session 1
11月5日（金） 10:30am-12:00pm
Enhancing Teaching and Learning: Faculty Values, pedagogy, and Development Activity

Sylvia Hurtado氏　カリフォルニア大学 ロサンゼルス校



Sylvia Hurtado氏は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のHigher Education Research InstituteのDirectorである。いくつもの全国的な調査研究プロジェクトをコーディネートされており、今回はその経験を踏まえて「Enhancing Teaching and Learning:Faculty Values, pedagogy, and Development Activity（教育と学習の向上に向けて：教員の価値観、行動、開発活動）」と題した発表を行われた。概要は以下の通りである。

まず、「キーポイント」として、･学生の価値観やスキル、知識を向上させる教員の役割、･教員の関わりなくして学生の積極性を引き出すことはできない、･教員の価値観と実践とは関連性がある、･組織的なサポートと褒賞は学生中心の教育およびcivic-minded活動に積極的な教員に対して不可欠である、の4点を挙げ、続いて「多様性に富んだキャンパス形成のキー」として･カリキュラムの統合、･多様性の教育的な価値を学内に気づかせることを助ける先進的な教授法、･地域コミュニティとの協力関係の構築であると述べ、いくつかの統計データを示しながら、これらの要素がさまざまな教員あるいは学習意欲に影響すると説明された。

特に「Faculty Engagement with Student（教員と学生との関わり）」について、学生中心の教育の重要性を強調し、学士課程の目的は学生の発達を支援することであり、さまざまな価値観の重要性という視点からも教員の価値観は重要であるとした。

続いてアメリカにおける学生中心の教育において「誰が最も積極的に関わっているか?」という問いかけに浮かびあがる人物像のキーワードとして職位：助教、性別：女性教員、専門分野：教育学をあげ、大学教員というキャリアのためのトレーニングと位置付けている教員であると説明された。また、そのような教員は学生が学習するための思考習慣を培うことや初年次ゼミや共通教育クラスを担当すること、学生の研究に積極的に関わったり、civic-minded活動を実施していたりする傾向があるという。

そして、学生中心の教育への組織的なサポートと褒賞として：

・教授法ワークショップを通じたプロフェッショナル・デベロップメント
・教授法にフォーカスした外部組織の有料研修
・キャンパス内でのファカルティ・デベロップメントに対する適切なサポート
・組織が州政府のガバナンスを支持すること

以上の4点を挙げられた。

キャンパス内でのファカルティ・ディベロップメントに対する適切なサポートという点においては統計データが披露され、多くの教員がファカルティ・ディベロップメント活動よりも自身の教育現場において技術的なサポートが行われることを希望していることが示された。

ここから「civic-minded」活動に関するパートへと移っていった。ここまで講演を聞きながら、「civic-minded」という単語が何を指すのか測りかねていた。ここでcivic-minded活動の調査の項目として：

・コースワークの一部にコミュニティサービスを含んでいる
・地域コミュニティと協同で調査や教育を行っている
・地域コミュニティのニーズに対応するために学識を発揮した
・サービス活動に参加した学生グループに指導を行った
・無報酬で社会奉仕やコンサルティングを実施した
・コミュニティサービスや社会奉仕活動において1週間に数時間の関わりを持った
・サービスラーニングの授業を教えた

などが挙げられていたことから、「civic-minded」活動≒社会貢献活動ととらえればよいのだろう。

ここでも「誰が最も積極的に関わっているか?」についてその人物像が示された。学生中心の教育の場合と異なり、職位では准教授、人種／性別では黒人女性の教員が、専門分野では社会科学分野の教員が多いのだと言う。ただし、やはり大学教員というキャリアのためのトレーニングと位置付けているという傾向については同様であるのだそうだ。

社会貢献活動との関わりにおいては、学士課程に対する教員の価値観と目的を仕事と個人的な価値観の緊密な関係性、学士課程における目標が学生の個人的な啓発にあること、さまざまな価値観を支援すること、役目としての奉仕の重要性とし、教員は報酬によって満足感を得ているのではないとした。

また、ここでも積極的に社会奉仕活動に取り組む教員の人物像が以下のように示された。

・学生の調査プロジェクトに積極的に関与する
・初年次ゼミを担当する
・学生が学習するための思考習慣を培う：個人的かつ社会的な責任において卓越した行動を身につけられるように努める
・教室において学生中心の教育を実施する

これらの教員に対する組織的なサポートや褒賞としては以下の例が挙げられた。

・学内での優遇措置：社会奉仕活動に対するサポート
・学外での教育に関する有料のワークショップ受講
・実際の授業を用いたワークショップ
・教育に関する賞を授与する

ただし、それ以上に多様性や風土、州政府によるガバナンスに対する大学としての組織的な関わりがより重要なのだと強調された。

そして最後に教育・学習センターは能力開発、多様性、社会貢献という目的を達成するために重要であり、教員の評価と教育活動の間には関連性があること、組織的なサポートと褒賞は学生中心の教育、そして社会貢献活動において教員の積極的な関与を生み出すのに不可欠である、と締めくくられた。

この発表に対して、引き続き参加者とのQ&Aセッションが行われ、「社会貢献を教員の評価として位置付けるのは難しいのでは?」、「テニュアを取るまでのobligationなのでは?」、「非常勤講師はこれらにどのように関わっているのか?」、「コミュニティ･サービスが大学に組織的な利益を与えるとしたらそれは何なのか?」、「専門学校と大学の違いとは?」、「そもそも大学教員の定義とは?」などなど多岐にわたる質疑が約1時間行われた。

もう一つの基調講演はミシガン州立大学のKristen Renn准教授による「Intersection of Identity, Teaching, and Learning : LGBT Issues and Student Success（アイデンティティと教育･学習の交差点：LGBT問題と学生の成功）」であったが、講演の中心課題であるLGBT=Lesbian, Gay, Bi-sexual and Transgender問題については欧米では広く議論されている内容ではあるが、日本ではまだまだ取り上げるに至っていない課題であるため、ここでは割愛させていただく。[1]

1：講演資料については以下のアドレスから確認できる。
http://sites.google.com/site/podnetwork/pod-2010-conference/presentations-1/renn

新しい試み

PODでは2009年からTwitterが広報手段の一つとして利用されており、今年もカンファレンスの開催に合わせて“#pod10”というハッシュタグが作られ、参加者からのリアルタイムのつぶやきが見られるようになっていた。そして翌日のNewsLetterに前日のTwitterでのつぶやきからのハイライトが記事の一つとして掲載されていた。カンファレンス終了後には頻出ワードを視覚的に記述したWordCloudを作成し、2009年度と比較しての分析が行われている。

POD2010におけるTwitter頻出単語のWordCloud

【POD Twitter チームによるWord Cloud分析の一部】

・いずれの年にもFacultyが手前中心近くに位置し、その傍にLearningが存在する。
・「Student」という単語は2009年度よりもさらに頻出度が高まっている
・一方で「Research」については2009年度のほうが多くつぶやかれていた
・個別のセッションの講師に関するつぶやきは2010年度のほうが多少多めであった

また通常のHPとは別にElectronic Communication and Resource Committeeにより“WikiPODia”なるPOD Networkが持つリソースを共有するためのサイトが立ちあげられてテスト的に運用されていた。そこでは先のTwitterの情報やカンファレンスの各セッションの概要や使用された資料が閲覧できるようになっており、まだ一部のセッションのみの対応であるが、今後、情報が蓄積されていけば非常に有益なものになるだろう大きな可能性を感じた。

【参加報告】

新米FD委員による米国POD(Professional and Organizational Development Network in Higher Education)会議での苦戦記

京都光華女子大学　廣田孝子

京都FD開発推進センターからの参加募集に、新米FD委員として十分理解しないまま課題をこなさなければいけないジレンマに陥る中、FDの本場で勉強できる絶好の機会と思い応募しました。FDのことをまだまだ十分理解しないまま、この報告書を書いておりますことをお許しください。ご指導いただければありがたいです。

米国PODの目的は、高等教育(高校卒後からの教育)に携わる者に出版や会議、相談、ネットワークを通して会員をサポートすること、FDに関心のある人に情報や人材などのサービスを提供すること、FDの重要性を国のリーダーに伝え、認識させること、などです。POD会議は年に1回全国レベルで行なわれ、今年はセントルイス、来年はアトランタで開催予定です。FD関連の研究は厚い本にまとめられ、毎年会員に配布されます。投稿された論文は審査後出版されますが、掲載に至る論文数は投稿数の3−4割と厳しいそうです。

今年のPOD会議はカエデの紅葉が始まるセントルイスにおいて、プレカンファレンスを含め5日間にわたり、講演や討議、論文発表がなされました。約700名の参加で米国以外ではカナダやオーストラリアなどから、アジアからはほとんどが日本人で約2-30名でした。これまでもFD活動に熱心な大学からの参加のようです。

会議構成は2つの基調講演(UCLAのDr. S.Hurtadoとミシガン州立大学のDr. K.Renn)とポスター発表(25演題)のほか、ラウンドテーブル・ディスカッションとインタラクティブ・ディスカッションが大半で、問題が提起され、演者や司会者が中心となり討論などでその答えを導かせる形で運営されます。参加者は座って講演や発表を聞くだけでなく、活発に質問し、意見を述べ、提出された課題をグループごとに討論し、まとめてゆく形式をとります。

この会議に参加さえすれば、進んだFDの情報がどんどん得られると思っていた私は、早々面食らいました。日本では考えられないほどの活発な討論に驚き、先生方自身の意見や経験談を臆することなく次々発言する積極的な姿勢に圧倒されました。教育分野での英単語に慣れていない私は、辞書とにらめっこで四苦八苦です。意見を聞かれたら、日本の異なる教育環境を説明するのがせいぜいです。毎日50から80を超えるテーマのセッションが並行してあり、どのセッションの情報が日本の実情に適応できるか見極めるだけでも一苦労でした。

ここからは、私が参加し印象に残ったセッションの紹介をさせていただきます。

ノースウエスタン大学Dr. S.Calkinsによる「学生が関心を示さない授業はどのように進めれば良いか」、インディアナ大学Dr. G.Sieringによる「教員に文句ばかり言う学生にどう対処するか」、クレムソン大学Dr. L.Nilsonによる「学生は講義内容をすぐ忘れてしまうが、どうすれば学生の頭に定着させることができるか」などのセッションには入りきれないほど多くの先生方が集まられ、一層活発な質問、意見や議論が展開されました。アメリカの先生方の多くも私たちと同様の悩みをお持ちのようで、少し安心しました。

提案された解決法は、学生の意見は決して無視せずに対応し、学生に問題がないか、教員から学生へ提案できることはないのか、また教員が集まりそれらの問題を討議し、他の先生方の意見を参考にすることがとても有効であるとの結論でした。

講義内容をすぐ忘れる学生への対応は、まず教員が学生の集中力の持続時間が長くないこと、持続時間の個人差も大きいことを認識しなければならない。講義内容を単純化したり、繰り返したり、色による表現や顔の表情など感情に訴える。復習により記憶は残る。そして大脳生理を応用しながら、記憶に留めやすい授業の工夫なども紹介されました。先生方は熱心に聞き入り、終わっても質問が絶えません。このように学生が理解しやすく、記憶に残る教授法を、生理学、心理学的手法により紹介されたのでとても説得力があり、さらに勉強し、応用しなければと思いました。

テキサスA&M大学Dr. D.Fowlerによる「より良いカリキュラム作成」についてのセッションでは、いきなりカリキュラムの定義は?と聞かれ、アメリカの先生方も一瞬戸惑われます。カリキュラム作成には各大学の教員・管理者だけでなく現役学生・卒業生や外部有識者などによるメンバーが構成され、厳密に作成されなければならないことが強調され

ました。カリキュラムの最終目的は、学生が何を達成できるかである。カリキュラム作成に卒業生や学外の有識者の意見が反映されるため、カリキュラムは現実の社会活動との関連が持たされ、仕事や社会に今何が求められているか、従って学生は何を達成目的として勉強すれば良いかが反映されると説明されました。私はこのように社会のニーズをしっかり受け止めて作られるカリキュラム作成のプロセスに驚きました。

ウエブスター大学Dr. J.Rattnerによる「好ましいシラバスのテンプレート」のセッションでは、シラバスにはどのような要素が必須で、オプションの要素は?どこまで公表されるべきか、誰がシラバスの内容をチェックすべきか、大学管理者側の関与はどこまであるか、などが討議されました。参加者の先生の中には「学生はお客であり、シラバスはその客に見せる商品説明書であるから、学生に講義の内容を懇切丁寧にすべて記し、公表すべきである。」「シラバスは講義スケジュールを示したカレンダーのようなものである。」「それぞれの先生の講義の内容が詳しく書かれているので、企業秘密のようなもの、公表はできない。」など、意見や考え方はそれぞれ違っていました。

大学としてテンプレートを持つWebster大学のシラバスを見せてもらったところ、A4で9ページに渡りとても詳しく書かれており、参考になりました。他に数か所の大学のシラバスのフォームを見せてもらいました。いずれのシラバスも少なくともA4で4～5枚はありました。

詳しくシラバスを書く先生の責任、これを読んで選択する学生の義務を感じさせられました。だから米国の大学では居眠り学生がいないのでしょうか。学生がお客様でシラバスは商品を選ぶ時のパンフレット!と割り切っておられた先生の考え方は驚きであり、参考になりました。

ミシガン大学Dr. M.Kaplanによる「メタ認識による学生の思考と記述スキルの訓練」では、メタ認識法により学生の思考や記述スキルが向上した結果が報告されました。ディスカッションで隣に座られていた数学の先生は、メタ認識のトレーニングにより学生の数学の点が上昇した体験談を披露されました。馴染みのなかったメタ認識法とやらも教育に取り入れたいと感じさせられるセッションでした。

このような討論が4日間も続いたのです。自分自身の英語力の貧しさを感じさせられたしんどい4日間でした。

米国の教育業界における厳しい予算カット・社会情勢の急激な変化・学生の質の変化・卒後の学生の就職難など、積もる問題を抱える現状において大学の先生方は、学生の卒後の社会での活躍や貢献に支点を置き、教育のあり方・効率の良い教え方などをとても真剣に討論されていた様子に感動するばかりでした。急激で深刻な少子高齢化を抱えている日本だけの問題ではなかったのです。

共通の問題が欧米でも進行していることを知りほっとしましたが、それならば狭い日本の中だけで悩まないで、多くの国々から進んだ意見を取り入れ、討議し、日本に適する方法を考えれば良いのですから。

「人の多様性を認めた、学生を中心(student-centered)とする教育の重要性」が強調された基調講演がとても印象的でした。これからの日本は繁栄しているアジアの中で、世界に通じる教育ができ、日本で学びたいと世界から留学生が集まってくる存在になってほしいものです。人の多様性を認めた学生を中心とする高等教育により、少子超高齢化社会の日本の将来はもっと期待できるものになるかもしれません。

最後にこのような驚くばかりの感動する機会を与えて下さった京都FD開発推進センターの方々に、またFD連携プロジェクトの提携校のご協力に感謝します。

以上

総括　　川面　きよ

全米のみならずさまざまな国から700名を超す参加者を集めるPOD networkの年次カンファレンスに参加できる機会を得られたことを非常に光栄に感じている。

何より環境は違えど同じ目的や問題意識を持った仲間が集い、情報交換を行う、そして、またそこからネットワークが広がって行く。その様を間近で確認できたことは非常に有意義であった。

セントルイスのシンボル　アーチのモニュメント

初めての参加者にはIntroductionのセッションが用意され、主催者からこのカンファレンスの構成や雰囲気について和気あいあいとした雰囲気の中で説明が行われる。このセッションには私も参加したが、100人程度は参加者がいたように思う。会議の規模は毎年700人前後だということなので、ほぼ600人がリピーターとして毎年参加しているという計算になる。学内で日々FDに取り組んでいる人間にとってはそのストレスや悩みを共感しあえる、非常に元気の出る場になっているのではないだろうか。だからこそ、これだけ多くの人が集まるカンファレンスへと成長したのではないかと推測する。

一緒に参加いただいた光華女子大学の廣田先生は主に教授法の改善をテーマにしたセッションに参加されていたが、私は組織的なFD、部署の在り方や学内向けのアプローチなどをテーマにしたセッションを中心に参加した。

〈主な参加セッション〉

-Facing Harsh Economic Realities, Faculty Learning Communities Bring Statewide Solutions
Cynthia Desrochers, California State University; Victoria Bhavsar, CalPoly, Pomona Milt Cox, Miami University

-Gateway to a Learner-Centered Campus: Faculty-Administration Collaboration
Mattew DeLong and Faye Chechowich, Taylor University

-What's Real? What Can We Do? : Teaching Centers' New Direction
Amy Govert, Kim Kenyon, and Theresa Pettit, Cornell University

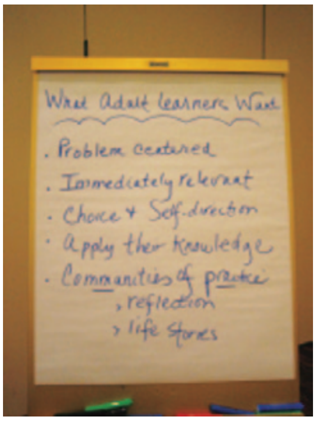
-Teaching Centers as Teaching Advocates: Navigating University Politics
Peter Lindsay, Georgia State University

-Understanding Faculty Practice and Perspective for a Learning-Centered Campus
Ashley Finley, American Association of Colleges & Universities

-Helping faculty motivate and engage students through a faculty development workshop
Susanna Calkins and Denise Drane, Nothernwestern University

先にも書いたようにどのセッションでも参加者とのインタラクティブな時間がとられ、「じゃあ、このテーマについて隣の人と話し合ってみましょう」や「4人以上のグループを作って4つの役割に分かれ、ロールプレイングをやってみましょう」など、否が応でも発言をしなければならない状況に置かれることとなる。報告者もつたない英語でなんとか意見を言うのだけれど、やはりアメリカと日本では前提にする条件が違うのでそこらあたりを説明しているうちにタイムアップとなることが多く、お相手いただいた方々に非常に申し訳ないことをした。その中でも印象的だったのは「日本ではまだFD活動は取り組み始めたばかりで、先進的なアメリカの取組を勉強しに来た」と発言したところ、「アメリカでもここまでFDが注目されるようになったのはここ3〜4年のこと。小さな大学に専門の部署ができ始め、何をどのようにすれば

よいか模索しているところがほとんど。だからこそ、ここに集まってみんなで意見交換や情報共有をしているのだ」と教えていただいたことであった。アメリカにおいてもFDの実践については各校で浸透の度合いに差があるのだと実感した。



それでは日本で同様に同じようにFDに取り組む部局や担当者間で意見交換や情報共有ができる場はあるだろうか。全国規模のFD関連のイベントということであれば、本プロジェクトの協力機関でもある大学コンソーシアム京都が主催し15年以上にわたり開催している“FDフォーラム”がある。当センターもこれまでミニシンポジウムの企画・運営という形でかかわらせていただいてきた。個人的な思いつきであるが、毎年国内から約1,000人の大学教職員を一堂に集めるこの機会においてPODの取組を参考にインタラクティブな分科会や大学間、地域間のネットワーキングのための機会づくり、教育実践に関するリソース共有のための新しい仕掛けができないかなどと考えている。

上記の実現性はさておき、来年度以降、京都地域で継続される予定のFD連携活動において何かしら今回のカンファレンスに参加した成果を還元していきたいと思う。

参考情報：

POD network：http://www.podnetwork.org/
Wikipodia: http://sites.google.com/site/podnetwork/

〈代表校〉

佛教大学

〈連携校〉

京都工芸繊維大学
大谷大学
京都外国語大学
京都学園大学
京都光華女子大学
京都産業大学
京都精華大学
京都橘大学
京都薬科大学
種智院大学
龍谷大学
池坊短期大学
大谷大学短期大学部
華頂短期大学
京都外国語短期大学
京都光華女子大学短期大学部
龍谷大学短期大学部

京都FD開発推進センター

〒600-8216
京都市下京区西洞院通塩小路下ル
キャンパスプラザ京都
TEL : 075-353-9122　FAX : 075-353-9101

2011年3月発行